国際俳句フェスティバル

International Haiku Convention 2002

記録集

国際俳句フェスティバル　記録集

International Haiku Convention 2002

目次

正岡子規国際俳句賞……2
概要……2
受賞者紹介……4
受賞者記念講演（コール バン デン フーベル）……7
受賞者記念講演（サトヤ ブシャン ワルマ）……15
21世紀えひめ俳句賞……20
概要……20
受賞作品・著者紹介……22
俳句シンポジウム「俳句を訊く」……26
芝不器男俳句新人賞……39
概要……39
選考委員奨励賞授賞作品……41
公開審査会……50
カンファレンス・句会・吟行などの記録……77
俳句カンファレンス「欧米における俳句」……78
当日句会……96
南予吟行……99
レセプション……101
その他
正岡子規英語俳句展……104
俳句ワークショップ「英語で俳句」……105
高校生との俳句交流……106
■
国際俳句フェスティバルの概要……107

正岡子規国際俳句賞
21世紀えひめ俳句賞
芝不器男俳句新人賞

正岡子規国際俳句賞

◎趣　意

洋の東西を問わず、俳句は現在、最も多くの人に作られかつ読まれている、もっとも生きのいい文芸のジャンルであろう。親しみやすい短詩型のなかに無限の創造性をはらむ俳句は、21世紀以後の文学の歩みを先導する豊かな可能性を秘めている。

近代俳句の創始者・正岡子規の名を冠する当賞は、1999年9月に開催された「しまなみ海道'99国際俳句コンベンション」において世界に向けて発信された「松山宣言」の趣旨に沿って2000年に創設され、今回二回目の授賞となる。

この賞の目的は、世界の詩人としての子規、そして世界最短詩として俳句を、世界に向けてアピールすることにある。子規が没して百年が過ぎた今、当賞が一つの契機となって、俳句が世界的視野から見つめ直され、21世紀におけるその更なる飛躍、発展に繋がることを強く願っている。

◎対　象

正岡子規国際俳句賞は、国籍や言語を問わず、俳句（ハイク）のもつ創造力の開発と顕揚に、最もめざましい功績を挙げた人物に贈られる。受賞者は、俳句（ハイク）への強い関心と、何らかの意味での国際的視野をもつことを条件とするが、俳人（ハイク作者）・詩人・作家・研究者・翻訳者・エッセイスト・編集者など、必ずしも専門分野を限定しない。

◎種　類

正岡子規国際俳句賞

正　賞：メダル、ディプロマ（授賞証書）

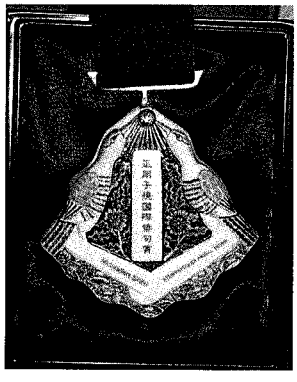
副　賞：賞金（各50万円）、NHK賞（砥部焼花瓶）、愛媛新聞社賞（竹細工工芸品）

正岡子規国際俳句EIJS特別賞

正　賞：メダル、ディプロマ（授賞証書）

副　賞：スェーデン製陶器（EIJSが拠出）

メダル：本体は砥部焼。ホトトギス（子規）をメダル左右に配置し、子規が愛した野球のバットを止まり木に、松山市の花である椿に囲まれた構図となっている。また、メダルリボンは伊予絣、ケースは桜井漆器が用いられるなど、愛媛の伝統工芸の粋を集めて制作した。



◎選　考

選考等委員会及びその下部組織として調整会を設置し、委員会が選定する推薦人の推薦に基づいて受賞者の選考を行う。

◎選考等委員会

委員長　有馬　朗人　国際俳句交流協会 名誉会長
副委員長　芳賀　徹　京都造形芸術大学 学長
稲畑　汀子　日本伝統俳句協会 会長
ウィリアム　ヒギンソン　俳人　俳句研究者
上田　真　米 スタンフォード大学 名誉教授（平成14年4月退任）
金子　兜太　現代俳句協会 名誉会長
ジャン＝ジャック　オリガス　仏 国立東洋言語文化研究所 教授
※オリガス先生は、平成15年1月26日、パリにて逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。
ウィリ　バンデ＝ワラ　ベルギー　ルーヴァン大学 教授
白石かずこ　詩人
宗　左近　詩人
鷹羽　狩行　俳人協会　会長
長谷川孝士　松山市立子規記念博物館　前館長

故 ジャン＝ジャック オリガス氏

◎調整会

座　長　芳賀　徹（選考等委員会副委員長）
川本　晧嗣　帝塚山学院大学教授
城戸　朱理　詩人
齋藤　愼爾　俳人、深夜叢書社社主
玉井日出夫　俳人（文部科学省　高等教育局私学部長）
筑紫　磐井　俳人
対馬　康子　俳人
坪内　稔典　俳人（佛教大学教授）
デビット　バーレイ　俳人（フェリス女学院大学助教授）
野村喜和夫　詩人
村上　護　作家

参　与　西村我尼吾　俳人

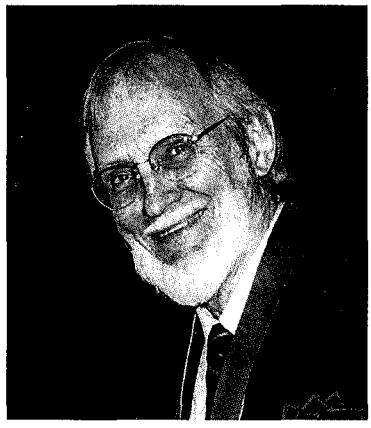
◎選考経緯

平成13年7月6日　第1回選考等委員会
平成14年3月2日　第1回選考等委員会調整会
平成14年3月27日　第2回選考等委員会調整会
平成14年4月13日　第2回選考等委員会
平成14年5月8日　受賞者発表

受賞者紹介

正岡子規国際俳句賞

コール バン デン フーベル
(Cor van den Heuvel　アメリカ)



【授賞コメント】

40年以上にわたって、俳句に対する深い理解に基づいて優れた実作や評論を発表するとともに、情熱を持って後進の指導にも携る。特に、優れた英語俳句を編集した「俳句選集（The Haiku Anthology）」は、英語圏諸国において、俳句が詩の一ジャンルとして一般に認められるようになった画期的な業績であり、俳句の普及と理解の深化に顕著な功績があった。

◎経　歴

1931年、アメリカ・メイン州生まれ。ニューハンプシャー大学及びニューヨーク大学に学ぶ。

1958年にゲーリー スナイダーによって俳句を知る。以後、俳句の研究、実作を現在まで続ける。ニューズウィーク社に勤務しながら、1974年に「俳句選集（The haiku anthology）」（初版）をダブルデイ社から出版。1978年にはアメリカ俳句協会会長も務めた。1999年より、リフォルニア州立図書館アメリカ俳句文書室（カリフォルニア州サクラメント）名誉室長に就任している。

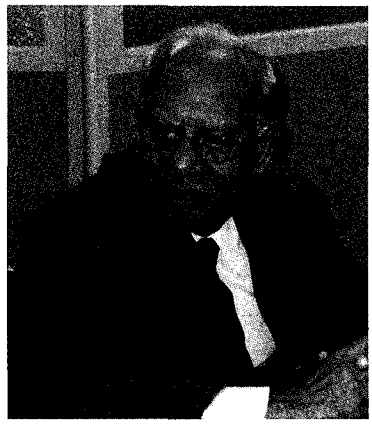
◎著書等

■編集「俳句選集」　初版：1974年、2版：1986年、3版：1999年

■句集「骸骨の中の陽」「窓拭き夫のバケツ」「ダーク」「泡」「雁去りぬ」「プレイボール」

正岡子規国際俳句賞

サトヤ　ブシャン　ワルマ
(Satya Bhushan Verma　インド)



【授賞コメント】

日本文学・詩歌研究に長年従事し、俳句の持つ韻律と自然観を基本にヒンディ語への翻訳を行い、インド国内における、タゴール以来の本格的な俳句紹介となる。更に、俳句とインドの詩との比較研究、俳句雑誌の刊行や俳句クラブの創設などを通じて、インドにおける俳句の普及と理解の深化に大きく貢献した。

◎経　歴

1932年、インド・パンジャーブ州ラワルピンディ生まれ。パンジャーブ大学卒業の後、デリー大学大学院で修士号を取得。1978年にはインド・ハイク・クラブ創設し、1986年には　ジャワハッラール・ネール大学の日本語・日本文学部教授、東アジア言語学部主任教授に就任。1991年には国際日本文化研究センター客員教授として来日。学術研究の傍ら、日本とインドの交流にも積極的に携り、日本インド文化研究協会インド支部支部長、日印協会会長等にも就任している。

◎著書等

■翻訳・評論書「日本の詩」「日本の俳句とヒンディの詩」

■辞書「日印辞典」

■講演「世界に拡がる宮沢賢治」「タゴールと賢治」

正岡子規国際俳句ＥＩＪＳ特別賞

和田　茂樹
（日本）

【授賞コメント】

「子規全集」編集や記念博物館の設立、俳句を軸にした資料探索など、子規の研究と顕彰に生涯を通して取り組む。殊に、芭蕉の俳句を初めて英訳した子規の国際性に注目し、子規が世界的な視野から俳句を文学たらしめようとしたことを強調。さらに、海外研究者を含めて後進の指導にあたるなど、子規と俳句の国際化に大きく貢献した。

◎経　歴

１９１１年、愛媛県生まれ。京都帝国大学文学部及び同大学院卒業後、愛媛師範学校、愛媛大学の助教授、教授を歴任。１９７７年に退官し、同大学名誉教授となる。１９７８年に文部大臣奨励賞を受賞。「子規全集」（講談社）の編集に携わるほか、子規記念博物館の設立に尽力し、１９８１年～１９９６年に同博物館の初代館長を務める。

◎著書等

■ 著書・編書「子規と周辺の人々」「正岡子規入門」「子規全集」「正岡子規」「子規の素顔」「小林一茶寛政七年紀行:複製と解説」

ＥＩＪＳ（The European Institute of Japanese Studies）
〈ストックホルム商科大学　欧州日本研究所〉

ＥＩＪＳは、スウェーデン・日本の財界とスウェーデン政府からの基金により、１９９２年にストックホルムに設立されました。日本・東アジアとヨーロッパとの社会経済的な関係に焦点をあてた研究と教育が中心的な活動内容です。

２０００年の正岡子規国際俳句賞の創設にあたり、その趣旨にご賛同をいただき、ＥＩＪＳ特別賞として副賞を供していただくこととなりました。

受賞者記念講演

私が歩んだ俳句の道 —My Haiku Path—

コール バンデン フーベル (Cor van den Heuvel)

訳：須山典子　俳句訳：白石妙子

ここでお話をする機会を与えられましたことを、大変光栄に存じます。これから、1958年から約半世紀に渡って、私が歩んで参りました俳句の道—私と俳句との関わりについてお話したいと思います。

私は、俳句に出会うまでの10年間近く、ライターになりたいという希望を持っておりました。このため、1957年にニューハンプシャー大学で英文学を勉強し、その後、州都にある「コンコード モニター」の新聞記者として仕事を始めました。そして数ケ月後、「エバーグリーン レビュー」という新聞で、サンフランシスコで起こっている文学ルネッサンスの記事を読みました。

ジャック ケルアック、アレン ギンズバーグのほか、「ベイ エリア」の詩人であるロバート ダンカン、ジャック スパイサー、そしてゲーリー スナイダーなどが、ビート派詩人として主要な人物でした。評論の対象となっていた彼らの作品は非常に革新的で、すがすがしいものでした。私は、個人的にそのルネッサンスを体験するため、サンフランシスコに行こうと決心しました。

サンフランシスコには、1958年の早春に到着しました。そして晩秋まで、チャイナタウンの端にある小さな長期滞者用のホテルに滞在し、百科事典を売るような片手間仕事をやったりしましたが、ノースビーチでの詩の現場に触れようと捜しておりました。「ザ・プレイス」と呼ばれる作家達の溜まり場のバーで、「ダンカン同好会」の詩人の一人に会い、彼等の定期集会に招待されました。それはこの種の会の一つであり、ふつう10人から12人の詩人で構成され、非公式にロバート ダンカンが指導していました。私は、そこで始めてゲーリー スナイダーに出会いました。彼は日本での最初の滞在から帰ったところでした。彼は、日本の島々を一つの石庭に例えた、かなり長い詩を読んでいました。それは大変な人気で、何度も読むように頼まれていたのを思い出します。

この会で、ある詩人が「さいころ」について大変短い詩を読みました。彼は「さいころ」の目を珍しいイメージに変えながら、生き生きとした比喩を使いました。「蛇の目のそれぞれの点の一つが、オートバイのヘッドライトになった」という表現を思い出します。その後、グループは、2～3人の小グループに分かれました。私はスナイダーと、短詩を読んでいた詩人の隣

の椅子に座っていました。その詩人はハロルド ダルと申します。彼らは床に座って、お互いのノートや日誌を見ていました。二人共がお尻を風になびかせている馬のイメージを記録していて、楽しそうに驚いていたのを覚えています。

彼らは日誌のメモを詩に変えることについて少し話し、それから短詩を書くことについて議論を始めました。この時、スナイダーは俳句に言及しました。私が俳句について聞いたのは、これが初めてでした。大学でイマジストについて読んでいた時、俳句についての引用文を見ていたのに違いありませんが、俳句という言葉が私の注意を捕えたのはこれが初めてでした。私は興味を駆り立てられましたが、当時は隠遁者と言われるほどまで寡黙でした。実は、町に住む隠者としての生活について、一連の詩を書いてさえいました。このため、私はその二人の詩人の議論には参加しませんでした。しかし、スナイダーが言ったことに感銘を受け、数日後、図書館で俳句についての本を捜し、ブライス、ハロルド ヘンダーソン、ケネス ヤスダの翻訳を読みました。

私が詩の中に捜していたものの真髄を、俳句は具体的に表現しているように思えました。私は言葉を事物に変えて行く秘訣を探し求めていました。ヘンリー ソロー、アーネスト ヘミングウエイ、そしてジェイムズ ジョイスの散文の中に、またジョン キーツ、ジェラルド ホプキンス、そしてウイリアム ウイリアムズの詩の中に、僅かではありますが、この種の魔術の入った文に出会ったことがあります。うれしいことに、ブライスの芭蕉、蕪村、一茶、そして子規の翻訳の中にも、私はそれを見つけ出しました。

その秘訣は、名前をあげて簡単に描写することと、その結果を純粋な連想の要素へ改良していく事にあるようでした。その言葉は、心の中に、真の存在という存在論的な力を持っていただけでなく、読者から、自分はそのイメージを含んでいる物と共にあるという確信を引き出し、それは更に、生き物全て、自然全て、如いては宇宙の全てまで広げていきます。

サンフランシスコでの発見の後に、イーストコースト（東海岸）に戻りました。そして１９５９年の早春までメイン州ウエルズビーチでの小さなコテッジで暮らし、自分の俳句を書いてみようと思いました。

最初の俳句は１９５８年～５９年の冬に書きました。それは、１９６１年に出版した最初の小冊子、「sun in skull（頭蓋骨の中の陽）」の中に入れています。

behind snow-covered boards
the carousel's contoured ponies
leap into silence

雪に覆われた板の陰で
回転木馬の輪郭は
沈黙の中に飛び込んでゆく

雪積むや沈黙へ飛び込む回転木馬

俳句試作の中で、依然として西洋の詩作の習慣を使っていたということがお分かりになると思います。もし今、この特別なイメージについて書くのであれば、おそらく"contoured（輪郭描写された）"という形容詞を使わないでしょう。ここでその語を使うことは詩的で

あり、色彩に富んだ叙述的な言葉で、彫刻された馬の美を捕えようとしています。その語はまたおもしろい音の効果を付け加えるために使われています。最初の"c"は"covere"と"carousel"の中の"c"と頭韻を踏んでおり、そしてその"d"は他の三箇所で反響しています。"contoured"は興味深いリズムを出しています。この言葉を取り除くことは、詩をより簡単に、また私が今俳句はこうあるべきだと信じているものにするかもしれませんが、より良い詩になることはないでしょう。老いた詩人は、若い頃の作品を修正することに慎重であるべきです。

私は、今、最良の俳句は最も簡潔なものであると信じるようになっています。どのような美があるかということは、単純に記述できるものではありません。もし詩人が意識して美しい絵を画いたり、手際よいスピーチを考案したり、精巧な音質効果を作り上げようと試みていれば、彼は読者の注意を、イメージ自体から逸らしてしまうでしょう。ブライスの言うとおり、月を差している指に宝石があれば、指が示しているものではなく、指自体が関心の的になるのです。

最初の本の、もう一つの詩によって、西洋の詩論の影響であるシュールレアリスティック（超現実主義的）な取り合わせにも、関心があったことがお分かりになります。

two cows
graze on the common
a train steams into the album

牛二頭
牧草地で草を食む
蒸気機関車がアルバムに蒸気を吐く

牧草食む牛二頭蒸気吐く機関車アルバムの中

ここでも音、特に"m"の音と遊んだことは明らかです。甘美な言葉とシュールレアリスティック（超現実主義）な配合は、俳句の世界でも正統であるかもしれませんが、私の俳句は、それからは離れた方向に歩んできています。

1959年の夏は、メイン州オガンキットにある「カフェーゼン」で、自分の俳句や他の人の詩を読んだりしながら、住み込みの詩人として働いていました。その秋と冬には、ボストンにある「サラマンダー カフェ」で、週に数夜、詩を読んで働きました。後には「アルハンブラ」という店で、ジャズトリオと共に詩を読んでいました。そこからプロビンスタウンへ行き、1960年の夏の間働きました。日中はトロール船に乗って、夜はその土地のバーで自分の詩を朗読していました。その秋には、ニューヨークへ移り、グリニィッチ ビリッジに住み、十番街コーヒーハウスでの詩の朗読に夢中になりました。

1961年に最初の小冊子を発行した後、小さな手動印刷機でそれを自分で印刷して、メインからシアトルへ旅をしました。俳句を書きながら、徒歩で、あるいはヒッチハイクをして国を横切りました。ニューヨークへ帰る途中、その間も俳句の道は続けており、グリニィッチ ビリッジに再び住みました。その時に結婚し、ニューズウィークでレイアウト専門家として働き始め、1963年に息子、ダークが生まれました。1971年には、ニューヨークで会を開いているアメリカ

俳句協会を知り、そこで私は、ウイリアム ヒギンソン、アニタ バージル、アラン ピッツァレリ、その他大勢、その後大切なアメリカの俳人となる作家達と出会いました。

この間も俳句を書くことと句集の自費出版を続けました。１９６３年に「窓ガラス拭きのバケツ」を出版しました。表題の句は、都市の生活環境と、より簡潔で客観的な俳句のスタイルへ進んでいることを表しています。

high above the city
dawn flares
from a window-washer's pail

町の空高く
夜明けの日が燃え上がる
窓掃除夫の桶の中から

窓掃除夫の桶へ夜明けの陽の溜まる

日常の単純なイメージを含んだ句集「窓ガラス拭きのバケツ」からもう一句

through the small holes
in the mailbox
sunlight on a blue stamp

小さな穴を通り
郵便箱の中の
青い切手に日差しが伸びる

日差伸ぶ郵便箱の中の青切手

この郵便箱はニューヨーク市のアパートの中にあり、正面入り口のすぐ隣の玄関に置いてある箱でした。このような金属製の箱には、持ち主が郵便がきているかどうかを見るための小さな格子の窓があります。春や夏の日光は、通りからその格子の中へ、小さな隙間の中に入っていきます。

しかし、シュールレアリスティック(超現実主義的)な手法を全く止めてしまったというわけではありません。次の俳句からお分かりになると思います。

the windshield wipers
vanish over the horizon
Geronimo leaps to his horse

フロントガラスのワイパーは
地平線上に消え
ジェロニモ、馬に飛び乗る

ジェロニモは馬に飛び乗る地平にワイパー消え

ジェロニモは、アパッチ族インディアンの有名な酋長でした。

その本には最も単純簡潔で、基本的な俳句も入っています。

dawn
among rocks
lights water

夜明け
岩の間に
水を照らす

夜の明くる岩々の隙の水照らす

今では、これは少し単純化しすぎたかもしれないと感じています。具体的というより、一般的なイメージになっています。読者は、これが海の情景なのか、山の渓流の情景かわかりません。作った当時は、このような曖昧さも好ましいと思っていました。でも今は、そうは思わないようになっています。しかし、また気持ちが変わるかもしれませんが…

１９６４年出版の本、「ＥＯ７—キリストは真珠柄のピストルを持つべきだった—」は、一、三の俳句と、俳句によって影響された短詩で構成される一連の詩集でした。そして、そのうちの一つは、私の最も初期の一行俳句でした。

a Dixie cup floats down the Nile
紙コップが一つナイル河を漂う

ナイル河漂ふ一つの紙コップ

紙コップは、20世紀を通じて、アメリカでは至る所にありました。小さな紙コップがソフトドリンク、アイスボックスからの水、そしてアイスクリームを入れておくためにさえ使われました。紙コップは現在、コカコーラが至る所にあるように、世界中にあります。この俳句は本当に起こりえたことを描写していますが、シュールレアリズムの技法が、微かですが、入っています。

１９６６年と１９６９年に二冊の本を出版しました。それには一ページの長さの自由詩と、俳句のような短詩を繋いでいる一連の詩が入っていました。１９７０年代初期には、「俳句選集」の初版を編集・出版のため、奔走しました。１９７４年の出版以後、三年間ニュージャージーへ引越し、その後ニューヨーク北部の湖畔の小屋に移りました。そこには１９７７年から１９８０年まで住みました。この間、ニューヨーク市のニューズウィークまで通勤しました。そこで幸運にも、週に三～四日だけ出勤すればよい仕事を得ました。

この間、私は俳句雑誌のみに俳句を発表しました。１９７１年に最初の妻と離婚し、１９８２年に今の妻—レニアと結婚しました。同じ年に「ダーク」と呼ばれる俳句冊子を出版しました。それは13句しか含んでいませんでしたが、その時までの最良の句を集めたものであり、当時の私の状況を示しています。

「ダーク」から、いくつかを読んでみます

November evening
the wind from a passing truck
ripples a roadside puddle
11月の夕べ
走るトラックの風で
道ばたの水溜りは波立つ

秋の夕トラックに波立つ水溜まり

この俳句は、アメリカの様々な所でハイキングやヒッチハイクをしていた時の体験から出てきたものです。1970年代に、ニューヨークのキャットスキル＆アディロンダック山脈、そしてニューハンプシャーのホワイト山脈にハイキングやバッグパックを背負って旅行に出かけました。この俳句の場面は、裏通りか寂しいハイウエーです。

次は最初の意図的な一行俳句です。それは、単独で成り立つことを意図したものです。以前に書いていた二、三の一行詩は、連続詩の一部でした。

the shadow in the folded napkin
折りたたむナプキンの中の陰

ナプキンを折りたためば襞に翳

三行俳句を作るために、このイメージと共鳴するもう一つの要素を見つけようとした後に、アニタ バージルに激励されて、このイメージはそれ自体で有効であると決めました。他に何も必要としなかったのです。私は俳句へのアプローチの一部として、一つのイメージ、一行俳句を考え始めました。あるイメージが充分印象的で、喚情的であるならば、読者の経験のなかに、潜在的なものであれ、そのイメージと共鳴する何か別なものが存在するのです。それは、人によっては、表に出ない隠喩として考えるかもしれません。

「ダーク」からの次の俳句は、私の代表句ともいうべきものです。海、生活、そして海岸に沿って見い出される物と関係がある俳句です。私はメイン州、そして大西洋からあまり遠く離れていないニューハンプシャー州で成長しました。そして、この半世紀の間ほとんど毎年、メインの海岸で数週間過ごしました。

a tidepool
in a clam shell
the evening sunlight
貝殻の中の
潮溜まり
夕暮れの陽

夕映えて貝殻の中に潮溜り

次の句はニューヨークのものです。ある雨の春の日、三番街のある骨董店でこれを見ました。19世紀から20世紀の初期にかけて、木製のインディアン像が葉巻とタバコの店の前に置かれていました。そのインディアンは普通、遠くの物を捜しているように、右手で目を覆った状態でした。

shading his eyes
the wooden Indian looks out
at the spring rain
小手翳し
木製のインディアンは
春雨を眺める

春雨やニューヨークのインディアン像小手翳す

次の一行俳句は、キャットスキル山脈でのバックパックを背負った旅行中のものです。

A stick goes over the falls at sunset

一本の枝が夕暮れに滝を渡る

瀧の上の一本の枝や日の暮るる

次の俳句は都市の俳句と言えるでしょうが、私の気持ちとしては、小さな町のイメージです。エドワードホッパーの絵の中に想像できるようなものです。

autumn twilight
in the closed barbershop
the mirrors darken

秋の夕べ
閉店した床屋の
鏡は暮れゆく

店閉めし床屋の鏡も暮るる秋

「ダーク」からの最後の句は、ニューヨーク北部の湖畔の別荘に居たときの作です。

the sun goes down
my shovel strikes a spark
from the dark earth

日は暮れゆき
ショベルは暗い地から
火花を散らす

暮れし地の中ゆショベルに火花散り

「ダーク」以後も多くの俳句を書きました。しかし1990年に出版された「泡」という俳文集の中にあった俳句と1999年に出版した野球俳句は別にして、俳句雑誌か名詞選集の中にしか発表しませんでした。俳文については、1970年代から書き始めて、俳句雑誌に多くを発表しました。私の俳句は簡潔と客観性の方向に動き続けてきました。話の終わりに、この10年間に書かれたもので、その傾向を示していると思う二、三の俳句をご紹介します。

まず、野球俳句の中から二句です

picking up my glove
from the shade in right field
its coolness

グローブを拾いあげれば
右翼の日陰の
涼しさよ

グローブ拾ひあぐれば右翼日陰は涼し

after the game
a full moon rises over
the left field fence

試合後に

満月上る
レフト・フェンスに

試合果つレフトフェンスに満月や

次の俳句は、２００１年にボストンで開かれた北アメリカ俳句会議の際に、記念選集の表題句として選ばれました。

the rusted paperclip
has stained my old poem
wind in the eaves

錆び付いたクリップが
染みをつけた我が古き詩
ひさしの風

ひさし風我が古き詩にクリップの錆

最後に、私の最初の俳句を思い出させてくれるような最近の俳句、回転木馬についての俳句で終わりたいと思います。

deep snow
one ligh
in the amusement park

深い雪
明かりひと筋
遊園地の中

遊園地に明りひと筋雪深し

受賞者記念講演

サトヤブシャン ワルマ（Satya Bhushan Verma）

皆さん、こんにちは。今日は私にとって大変ありがたい日でございます。正岡子規国際俳句賞をいただいたことに対しまして、愛媛県文化振興財団の方々をはじめ、日本の皆様に心から感謝の気持を表します。私にここまで歩む機会を与えてくれた日本、そして日本での私の先生たちと友人に対しても、ありがたく感謝の言葉を送りたいと思います。

俳句の研究が、私の生き方をここまで導いてくれるとは思いませんでした。そして俳句をインドで紹介した時も、好きだからやりたいと思って始めました。

私は１９５４年に大学を出て、ヒンディ文学の教師としてインドのパンジャーブ大学に勤め始めました。１９５７年に、ノーベル文学賞受賞者のタゴールが作った有名なヴァシュワバーリティ大学に移りました。ヴァシュワバーリティは、古くから日本との深い関わりがあります。そこで、私は、日本人の仏教学者であるシンヤ カスガイ先生のおかげで日本語を少し習い始めました。その結果、１９６２年にインド文部省の奨学金を受けて、留学生として日本へ来る機会が与えられました。三年間、国際学友会の日本語学校で日本語を学び、日本文学の研究も続けました。その間、俳句にも出会いました。

私が感動させられたのは、俳句の簡潔さと暗示に富む深い意味です。インドの言葉にも、短い詩形の中で、暗示的に表現することはよく見られます。また思想的にも、人生に対する俳句の内容は、インド人の心には異質なものではないとも感じました。梵語（サンスクリット語）のお経（スートラ）は、教えの内容を短い文句で簡潔にまとめたもので、深い意味を持つ唱です。皆さんがご存知のように、インドは言葉の多い国です。そして、それぞれの言葉が豊かで、文学的かつ歴史的伝統を持っています。インドの多くの詩形は短くて深い意味を持つ語句です。例えば、ヒンディ語のドーハまたはバルヴェとか、マラティ語のオビとか、パンジャービ語のマヒアーとか、タミール語のティルクラルなどはその例です。特に、パンジャービ語のマヒアーは俳句に大分近いと思います。一つの例をあげてみましょう。

ヴェコイラーボウリディヤー　カデボールチャンダリヤカーワー

日本語に訳すると

コーエルが歌っているのに
なぜおまえは歌わない

ああ、いじわるな鳥

元の詩はたったの18字です。コーエルはマンゴーの木に花が咲くころに歌うインドの鳥です。そして、春の季節を伝える鳥です。また、この鳥は甘い歌声をしているということで、大変歓迎されています。一方、聞き苦しい声の鳥の鳴き声は、だれも聞きたくないでしょう。コーエルも鳥も黒い鳥です。インドでは、鳥が恋人のメッセージをもってくるという伝説があります。今日はコーエルが歌っていますが、鳥は黙っています。でも、コーエルの歌声は乙女にとっては嬉しくはありません。恋人が来るのを待っている乙女は、鳥が口を開いて欲しいのです。

日本の俳句をはじめてインドに紹介したのはタゴールでした。タゴールは1916年に日本をはじめて訪問した後、日本紀行「ジャパーン・ジャトリ」という本をベンガール語で書きました。この紀行の中で、タゴールは俳句も少し紹介し、ベンガール語の翻訳で、芭蕉の一番有名な二つの俳句を例としてあげています。その俳句は「古池や蛙飛びこむ水の音」と「枯れ枝に烏のとまりけり秋の暮」です。彼はインドの読者に俳句について次のように語っています。「日本の詩人と読者には、わずか三行で事足りる…日本人の心は泉水のようにぽこぽこ音をたてない。湖水のように静かである」。タゴール自身は二・三行の詩も多く書きました。このような詩は火花（Sphuling）という題の詩集に発表されています。

タゴールが、俳句からどのぐらいの影響を受けているかを言うのは難しいですが、このような詩のほとんどは1924年に彼の二度目の日本旅行中に即興的に書かれたものです。「タゴール著作集」第二巻に、この詩集の日本語訳が「蛍」という題で収録されています。森本達雄氏は後書きの解題の中で、この詩について次のように書いています。「1920年5月から一年二ヶ月にわたって、タゴールはふたたびヨーロッパからアメリカへ、ついで24年三月から七月にかけて中国・日本を訪れた。中国や日本では、行く先々で「扇面や絹布に揮毫所望される」と、詩人は多くは即席で、短詩（ここには、多分、俳句の影響がみられる）を書いて求めに応じたが、それらはまぎれもなく詩と叡知の飛び交う火花であった」。"Stray Bird"という題で出版されたこの詩集の英訳を、タゴールは「横浜のハラ氏」に献げています。この詩集の中の一つの詩は日本についての詩人の印象をこう語っています。

ジャパーンの海は落ち着かない
陸地は穏やかで
山々は険しく密集している
公園はやさしい緑色

日本は、確かにタゴールの心の中に深く影響を与えていることに違いがありません。タゴールの短詩の中から二つの例をあげてみましょう。

蝶には蓮の花を愛する暇がある
蜜をいそがしく集める蜂に暇がない

または

天が雨でキッスをする
地はそれに対する花々を咲かせる

インドの現代文学は、西欧文学の深い影響を受けています。俳句も、英文学を通して紹介されました。俳句の初期の翻訳者は、俳句の簡潔さを無視して十七字の形の俳句を自由に説明を加えて翻訳をしていました。それは異文化の読者にわかりやすく訳したのでしょう。俳句がどのように訳されているかを、一つの例をあげてみましょう。もとの俳句は「花の雲　鐘は上野か浅草か」です。この俳句は英訳で次のようになりました。

A cloud of blossoms
Far and near
Then Sweet and clear
What bell is that
That charms my ear
Is that Ueno or Asakusa

この英訳をまた日本語に直すとこうなります。

花の雲
遠くて近い
甘く澄んでいる
何の鐘か
私をうっとりしてくれるのは
上野ですか、浅草ですか

また、芭蕉の有名な俳句「夏草や兵どもが夢の跡」の英訳はこうなりました。

Old battlefield, fresh with spring flowers again
All that is left of the dreams
Of twice ten thousand warriors slain

日本語に直すと次のようになります。

古い戦場
いまは春の花がまた咲いた
夢の後に残っているものは
惨殺された一万の二倍の兵士たち

インドでの俳句に対する関心はこのような英訳から始まりました。インドの詩人の幾人かは、インドの言語にも、俳句と同じような短い形の詩を作り始めました。１９５０年代に、短くて、豊かな表現力に富み、形式は自由で、新しい詩形が生まれました。幾つかの例を日本語訳であげましょう。

最初の夕立
空は根を
地に投げつける
蝶々は
花から花へ飛んでいく
春のラブ・レター
雲の中の月
隠れん坊をして
穴を探しているウサギ

次の詩は、詩人の目から見た飛行場のことです。

セメントの湖
遠く広く広がっている
アルミニウムの
白鳥が泳いで
そして飛びたっていく

俳句に興味を持った多くのインドの詩人たちが、日本の俳句をそれぞれ自分の言語に翻訳して紹介しました。また、自分でも、俳句のような短い形の詩を書き始めました。１９５０年代には、インドの多くの文学雑誌が、俳句についての紹介論文や俳句の英訳からのインド語訳をよく載せていました。

アギェーヤ（Agyeya）というヒンディ語文学の代表的な詩人が、１９５１年に次のような三行を作りました。

鳥は飛んで行った
木の葉が震えて
落ち着いた

この三行について、詩人は自分の感情を次のように表しました。「実際に起こった事は、私が言葉にそれを書き留めるだけの時間もなかった。鳥は木の葉に触れ、おそらく何かに怯えて飛び去った。私はその瞬間を捉えようとした。けれども、私は心の中で、その瞬間はなにかまだ完成していないような感情にとらわれた。」１９５９年に詩人は日本を訪問しました。そこで、彼は禅宗の公案について研究しました。帰国後、彼はたくさんの俳句をヒンディ語に訳しました。そして突然、彼が不完全だと思ってしまったその三行は、実際には完成しているということに気がついたのでした。この三行は、後に「アリー・オー・カルナー・プロバマイ」（Ari O Karuna Prabhamayi）という詩集の中に収録されました。１９５９年に出版されたその詩集の中には、俳句の翻訳も含まれています。序文にも俳句が紹介され、俳句について次のように述べられています。「俳句は西欧よりも、わたしたちにより近いものでしょう。また、わたしたちの詩的感性に大変近いものです」。東京外国語大学のヒンディ語文学の教授である田中敏夫さんは「アギェーヤは、俳句の外国語翻訳の中で一番成功した翻訳者である。」と言っています。アギェーヤの言葉で言うと「日本語がわかりません。しかし、日本人の友達の助けを借りて、翻訳された俳句の深い意味まで理解しようとしていました。」時には、アギェーヤは勝手な翻訳も加えましたが、美しい詩に作ることに成功しました。彼はもとの意味を伝えることが難しい語句や、もとの意味からあまり離れてしまったと考えた詩を「日本の俳句に影響された」、または「着想を得たもの」と呼びました。翻訳以外にもたくさんの俳句のような短い詩も書きました。その詩のいくつかは詩集「アリー・オー・カルナー・プロバマイ」の中に集められ、また別の詩集の中にも収録されています。日本の鳥居について、彼の詩の一つを日本語翻訳で紹介しましょう。

神社も寺も見えない、神仏もあるかもしれない
雲を越えて天空に聳えている赤い鳥居

私は日本から帰国して、短歌と俳句を翻訳し始めました。１９７７年に関西外国大学の後援で、私の短歌と俳句のヒンディ語訳が出版されました。本の左のページに日本語で書かれたもとの短歌や俳句で、ふりがなをヒンディ語のデヴァナーグリ文字にしました。右のページの上半分にはその短歌や俳句がデヴァナーグリ文字で、下の半分にヒンディ訳を載せました。この本は日本語の活字を使って、元の短歌や俳句を直接インドの言葉に翻訳したという点で、おそらくインドでは初めてのものだったと思います。私の二冊目の本は

俳句についての紹介論文で、１９８３年に出版されました。

この二つの本はインドで俳句について新たな関心を引き起こしました。１９７８年には「インド　ハイククラブ」が設立され、このクラブの活動の一つとして二ヶ月ごとに『ハイク』という機関紙を出すようになりました。この機関紙によって、インドの詩人が、だんだん五・七・五の十七調の形でインド俳句を書くようになりました。今日では、インドのあらゆる地方からハイクの雑誌がたくさん出ています。１９８９年に「ハイク１９８９」と言う俳句の代表的な収集本が出版されました。この俳句集には各詩人が七つの俳句を紹介し、合計三十人の１５０句が編集されています。その次は、１９９９年に「ハイク１９９９」の題で、別の40人の代表的俳句が編集されました。その他にも、この20年の間に、俳句の何冊もの作品が出版されました。ほとんど毎月、新しい俳句集が出版されています。

インド・ハイクは季語なしで、俳句の簡潔さと形式を守ろうとしていますが、テーマや経験をインドに求めるものです。インドの伝統やインドの文化的な考えに立脚して、多くの俳句が書かれていますが、その中には川柳のような風刺もよく表現されています。

最後に、インド・ハイクの幾つかを日本語訳で紹介してみます。

収穫期　孔雀のように歩く　村の少女
谷間に　山の苦しみ　流れ出る
パンくずを　雀に投げて　鳥来る
波が来て　流してしまう　砂の城

山から山　登ってみれば　また山
腕白なピーパルの木　茶めきたっぷりに笑う　井戸の中

21世紀えひめ俳句賞

◎趣　意

愛媛出身の四俳人―石田波郷、河東碧梧桐、富澤赤黄男、中村草田男―の名を冠するこの賞は、２０００年９月に発表された「松山メッセージ２０００（『松山宣言』追補）」の提言に則して、２００２年に創設された。

この四俳人は、それぞれ独特で相互に対立することもあったが、いずれも何らかの意味で子規の精神を継承した者であり、彼らなくして「近代俳句」は存在しなかったであろう。彼らが20世紀の俳句史に遺した大きな足跡は、今世紀の俳句にも影響を与え続けるに違いない。

21世紀えひめ俳句賞は、四俳人の業績を顕彰し、今世紀の俳句をリードする優れた句集、評論書等に贈られる。前世紀に活躍した四俳人の名が架け橋となって、この賞が俳句の持つ可能性を豊かに拡げる誘因となり、今世紀における俳句の更なる飛躍、発展に繋がることを強く願っている。

◎対　象

平成12年4月1日～平成14年3月31日までに単行本として刊行された句集又は俳句に関する評論・研究書

◎種　類

石田波郷賞、河東碧梧桐賞、富澤赤黄男賞、中村草田男賞

正　賞：メダル、ディプロマ（授賞証書）

副　賞：賞金（各50万円）、翻訳本の出版（平成15年度予定）

メダル：本体は砥部焼。デザインとしては、自然豊かな愛媛の気候風土を抽象的な形―天、空、雲、水（雨）、草木（生命）―として捉えることにより、新たな生命を育む図式「天があり、空には雲があり、雨を降らして草木を育む」を表し、豊かな風土の中に多くの俳人を輩出する愛媛のイメージを重ね併せている。また、メダルリボンは伊予絣、ケースは桜井漆器が用いられるなど、愛媛の伝統工芸の粋を集めて制作した。

◎選　考

公募と推薦による募集作品の中から、選考委員会の審議により受賞作品を決定する。また、賞名は、受賞作品の内容により選考委員会が決定する。

◎選考委員会

委員長　金子　兜太　俳人　現代俳句協会名誉会長
副委員長　篠崎　圭介　俳人　愛媛県俳句協会会長
有馬　朗人　俳人　国際俳句交流協会名誉会長
川本　皓嗣　帝塚山学院大学　教授
齋藤　愼爾　俳人（深夜叢書社社主）
宗　左近　詩人
筑紫　磐井　俳人
野村喜和夫　詩人
芳賀　徹　京都造形芸術大学　学長
村上　護　作家

参　与　西村我尼吾　俳人

◎選考経緯

平成14年5月15日　第1回選考委員会
―　応募作品公募及び識者からの推薦受付
平成14年8月10日　同　受付締め切り（総数96作品）
―　予備審査
平成14年9月30日　第2回選考委員会
平成14年10月8日　第3回選考委員会
平成14年11月5日　受賞者発表

受賞作品・著者紹介

石田波郷賞

研究書
「芭蕉の風景　文化の記憶」
（角川書店）
著者：ハルオ シラネ（Haruo Shirane）

【授賞コメント】

芭蕉と俳諧に関する歴史的・社会的な考察を通じて、俳句という世界最短の形式が「詩」足りえている文学的本質を西洋詩学の手法を用いて鮮やかに解剖し、日本の文学・文化における意義を明らかにした。

古典に学び、伝統に対して理念を与えた石田波郷に因んで「石田波郷賞」を授与する。

◎著者略歴

１９５１年、東京に生まれるが、翌年渡米し帰化する。１９７０年にコロンビア大学を卒業。１９８３年に博士号を取得の後、８７年にコロンビア大学教授に就任。１９８８年に「夢の浮橋―源氏物語の詩学」（英語版）がアメリカの優良学術研究書に選ばれ、同書の日本語版は１９９３年に角川源義賞を受賞する。１９９７年に「芭蕉の風景　文化の記憶」（英語版）、２００１年に同書日本語版を出版する。

◎著書等

■「近世文学選集」「創造された古典」「夢の浮橋―源氏物語の詩学」

河東碧梧桐賞

句集
「夏石番矢全句集　越境紀行」
（沖積舎）

著者：夏石番矢

【授賞コメント】

最短定型による表現の旺盛な実験精神、肉厚な詩的エネルギーの爆発力は凄まじい。壮麗な神話的想像力と肉体の生々しい息遣いとの共棲は、際立って鮮やかである。

豊かな芸術的才能と、常に新しさを求めて止まない先駆的資質を有した河東碧梧桐に因んで「河東碧梧桐賞」を授与する。

◎著者略歴

1955年、兵庫県生まれ。東京大学在学中より作句に励み、同大学院比較文学比較文化博士課程修了。俳句は高柳重信に師事。1981年に「俳句研究」50句入選、1991年には現代俳句協会賞を受賞する。1996年からパリ第七大学客員研究員として渡仏。1998年には吟遊社代表・国際俳句雑誌『吟遊』発行し、2000年に世界俳句協会（WHA）創立に携った。現在、明治大学法学部教授。

◎著書等

■句集「猟常記」「メトロポリティック」「真空律」「神々のフーガ」「人体オペラ」「楽浪」「巨石巨木学」「地球巡礼」

■評論等「俳句のポエティック」「現代俳句キーワード辞典」「天才のポエジー」「ちびまる子ちゃんの俳句教室」

■共著「現代の俳句」「現代俳句ハンドブック」ほか

富澤赤黄男賞

句集「加藤郁乎俳句集成」

著者：加藤郁乎

（沖積舎）

【授賞コメント】

言葉の持つ機能を深く捉えて、俳句に西洋詩、パロディ、俳諧など多様な言説を盛り込み、豊かな前衛性と独自の俳詩的世界を結実させている。

常識的な表現を超越した詩として、俳句の可能性を極限にまで追求した富澤赤黄男に因んで「富澤赤黄男賞」を授与する。

◎著者略歴

1929年、東京生まれ。父・紫舟の手ほどきにより作句を学ぶ。1951年に早稲田大学文学部を卒業の後、日本テレビに勤務。その後退社して文筆業に専念する。1959年に句集「球体感覚」を出版し、以後、俳句、詩、エッセイ、評論等を各種メディアを通じて発表する。

◎著書等

■句集　「えくとぷらすま」「形而情学」「牧歌メロン」「秋の暮」「江戸櫻」「初昔」

■詩集　「終末領」「荒れるや」「ニルヴァギナ」「姦吟集」「詩篇」「エジプト詩篇」「閑雲野鶴抄」

■評論集「眺望論」「遊牧空間」「かれ発見せり」「後方見聞録」「夢一筋」「日本は俳句の国か」「イクヤーノフの優雅な私生活」

■編著他「吉田一穂全集」「詩の歓び」

■小説集「エトセトラ」「膣内樂」

■共著　「現代彫刻」「現代俳句論叢」「江戸の風流人　正続」「江戸俳諧歳時記」「近世滑稽俳句大全」

中村草田男賞

句集「虚空」

著者：長谷川櫂

（花神社）

【授賞コメント】

句の持つ品格、余裕、本格的俳諧性（対話性）など、古典的美意識を継承しながら、その詩魂は現実の時空に向って澄み、新しさを睨んでエネルギッシュに躍動している。

伝統に深く根ざしながらも、俳句に近代性を求めた中村草田男に因んで「中村草田男賞」を授与する。

◎著者略歴

1954年、熊本県生まれ。「古志」主宰。朝日俳壇選者。1990年、「俳句の宇宙」でサントリー学芸賞受賞。神奈川県在住。現在、「子規選集」（増進会出版）編集委員。小学館ウィークリーブック「週刊四季花めぐり」に「花の歳時記」を連載中。

◎著書等

■句集「古志」「天球」「古志・天球」「果実」「蓬莱」

■俳論集「俳句の宇宙」

■随筆集「一度は使ってみたい季節の言葉」「続一度は使ってみたい季節の言葉」

■編著書「現代俳句の鑑賞101」

■共著「遅刻の誕生―近代に日本における時間意識の形成」

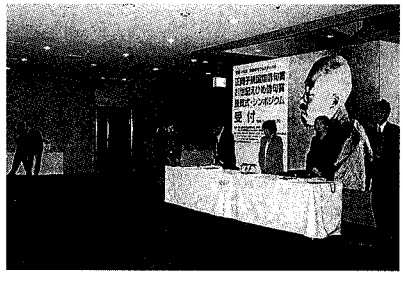
俳句シンポジウム

俳句を訊く

とき：平成14年12月1日　午後3時～4時30分
ところ：愛媛県県民文化会館　サブホール

モデレーター：村上　護（作家、21世紀えひめ俳句賞選考委員）
著書：「山頭火放浪記―漂泊の俳人」「放哉評伝」「安吾風来記」「中原中也の詩と生涯」ほか
俳句劇「山頭火・風の中ゆく」で全国公演

パネリスト：ハルオ　シラネ（石田波郷賞　受賞者）
夏石　番矢（河東碧梧桐賞　受賞者）
加藤　郁乎（富澤赤黄男賞　受賞者）
長谷川　櫂（中村草田男賞　受賞者）



▼村上　こんにちは。村上護です。

今日は四人の受賞者の方に、受賞記念のお話を伺うということでも良かったのですが、「俳句を訊く」というタイトルで、ざっくばらんなシンポジウムにしたいと思っています。さて、シラネさんは実作者ではありませんが、あとの三人の方は実作者です。三人の方には自選十句を選んでいただいております。まず俳句の朗読をお願いして、ちょっと肩の力を抜いていただいて、あとは好き勝手なお話を伺います。

まず最初に、夏石さんにお願いします。

▼夏石　最初はプレッシャーがありますが、朗読ですね。これは世界の俳句イベント、詩歌のイベントでは必ず朗読というのがありますので、僭越ながら試みたいと存じます。

降る雪を仰げば昇天する如し
未来より滝を吹き割る風来たる
海底の泉のむかしむかしかな
ひんがしに霧の巨人がよこたわる

In the east
a fog giant
lies down

龍の骨より生まれては笑う我
いのちひしめく雲のやちまた涼しけれ
わが俳句九百九十九歳の小杉
一心安楽琉球鳳凰木散華
道は羊へ大西洋へ石の家
イリノイの菫へ越境してくる光

A radiance
crossing border
to an illinois violet

▼村上　俳句は活字で読むというのが普通ですが、もう一つ、音から聞く、耳から聞くこともできます。声を出して作者が読んでいただくと別の伝わり方がしますね。詩の朗読というのは多いのですが、俳句では余りされていません。これからは、大いに俳人も耳からも俳句を入れるということをやっていけばいいんじゃないかな思っています。

次に加藤さんにお願いいたします。

▼加藤　しばらく、こういうことをやっていませんから。うまくできるか分かりませんが……。（笑）

昼顔の見えるひるすぎぽるとがる
天文や大食（タージ）の天の鷹を馴らし
一満月一韃靼の一楕円
雨季来りなむ斧一振りの再会
春しぐれ一行の詩はどこで絶つか
薗八のなかるべからず岡時雨
初松魚あゝつがもねえなまりとは

あれとさすゆびが肴や露しぐれ
伊勢るまで待ちて業平蜆かな
川筋に子供老いけり春の雪

▼**村上**　どうもありがとうございました。加藤郁乎さんの俳句は、今まで活字だけで読んできましたが、初めて朗読を聞きまして、聞くと何となく分かったような気もいたします。不思議な気持ちで聞いておりました。

では、長谷川さんからお願いいたします。

▼**長谷川**　『虚空』の中から十句選んでまいりましたので、それを読みます。

千年をまた一つより始めけり
億万の春塵となり大仏
春の塵からくれなゐのまじりけり
うねりくる卯波に命ゆだねたる
木のもとに花散らばりて明易し
乾坤に水打つ秋の初めかな
摩天楼の頂に秋来てゐたり
馬追の捨ててゆきたる足ならん
目の穴を水流るるや鮭の骸
夢殿を出でていづこへ秋の道

▼**村上**　ありがとうございました。三人三様の俳句を活字で読むより、別の伝わり方があるのではないかと思います。それでは、もう一回元に戻りまして、夏石さん。受賞をされた挨拶も無かったので、5分ぐらいでお話しいただきたいのですが。

▼**夏石**　お知らせを受けた時に、なぜ私が河東碧梧桐賞なのかなと思いましたが、先程の金子兜太先生のご紹介でようやく判りました。碧梧桐さんのご子孫がいらっしゃいますし、それで何を言おうかと思ったのですが、この碧梧桐さんの一句、「父はわかつてゐた黙つてゐた庭芒」。句集の『八年間』からですけれども、この父は審査員の皆さんです。

▼**村上**　もうちょっと熱弁を聞けると思ったんですけれども、意外に短いのでちょっとびっくりました。

▼**夏石**　俳人ですから、簡潔が第一、スピーチも短いのがいいです。

▼**村上**　そうですね。よく、短詩型をやっているのに俳人の挨拶は長いと言われておりますが、余りにも短かかったので、ちょっと私が付け加えさせていただきます。

河東碧梧桐というと、正岡子規の二大弟子―虚子と碧梧桐―の一人ですが、新傾向俳句運動を起こし、子規の俳句革新を継承した人です。途中でいろいろありまして挫折はしますが、その革新の精神、それは現在も生きているというか、や

はり継いでいかなければいけないと思っております。

夏石さんの受賞は、私自身非常に相応しいものと思っています。現在、俳句の革新に最も努力している中の一人ではないでしょうか。従来の季語というものを、そういう枠組みを解体するというか、バラバラにしまして、詩的な連想力によってキーワード、俳句における季語でなくてキーワードを中核にした多様な広がりを持つ俳句を作られている。それが碧梧桐賞の受賞に結びついたと個人的に思っています。

次に富澤赤黄男賞の加藤郁乎さんです。富澤赤黄男というのは、余計なことを言わせていただきますと、俳句は詩であるという、季語を超えた超季の認識に立って、昭和10年代の新興俳句運動で『天の狼』という実に優れた句集を出し、戦後も一貫してその姿勢は崩さないで、節を曲げないで通した人だと思います。

その赤黄男賞の加藤郁乎さんですが、これも私の個人的な考えですが、戦後の現代俳句史の中で画期的な仕事をなさっている方だと思います。例えば赤黄男の戦後の句集に『黙示』がありますが、戦後の句集としては、高柳重信の『蹠子』、そしてやはりもう一つ挙げると、加藤さんの『球体感覚』という優れた初期の句集になると思います。たいへん赤黄男に相応しい受賞者が第一回に受賞されたということで、愛媛県にとっても、21世紀の俳句にとっても、ありがたいことではなかったかと思っております。よろしくお願いします。

▼加藤　お褒めいただきましてありがたいのですが、ちょっと場違いの爺が出てきたと思ってご勘弁ください。（笑）

富澤赤黄男賞を愛媛県の俳句、俳諧に心あるお方が入れてくださったということにまず感謝を申し上げます。この人は昭和における子規みたいな人ですね。ただ、戦野に長くあって、二度ほど応召されましたから空白の期間が長いですな。戦前の新興俳句、戦後俳句、ことに前衛俳句などに多大の影響を与えられました。つまり季のない俳句、無季俳句も唱えられて、非常に実験的な、詩のポエジーを大事になさる方ですから、実験的な仕事をたくさんした方です。高柳重信とか加藤とか、隣の受賞なさった夏石番矢君というようなこういう素晴らしい男もみんなこの系譜にありまして、非常に影響を受けて勉強させてもらいました。

今回の俳句賞のもとになっているのは大体旧派ですから、その旧派の中に富澤さんが入られたということは誠にありがたい名誉なことで、その末尾におります私も誠にありがたく頂戴しようと思ったのです。ただ爺の出る幕ではないと思って、連絡を頂戴しました時に、できれば若い人に貰っていただくと励みになるのじゃないかなと申し上げました。しかし、赤黄男賞の候補が他にいらっしゃらないというお話で私が頂戴することになりましたが、今日はそういうお礼と感謝を含めましてこの席に出させていただきました。

句と歌は、ちょっとイントネーションが違いますね。今日、夏石君が読んだのを初めて聞きましたが、夏石君はこういうのがなかなかうまいですよ。密かに練習してるんでしょうかね。（笑）それから、外れにいる長谷川櫂さんは、この人はきちんとした俳句を作ってきた俳人でね。他がきちんとしてないというのじゃないですけれどもね。昔『古志』という良い句集があったのをさっき思い出しまして、ちょっとお話し申し上げたのですが、そういう人もまた賞をいただけるという。隣にアメリカか日本かよく分からない方がいるのですが、（笑）この方もいただけるということで非常に幅が広い。全体に持ち上げる話ばっかりになっていますけれども、まだ何回も続けられるでしょうから、そのうちに世の中にまだまだ隠れていらっしゃる方がいるから、是非村上さんを始め皆さん目を光らせて、そういういい人を世にお出し下さい。そ

んな他山の石になればと思って申し上げました。

▼村上　加藤さんの分厚い句集ですが、読んで面白かったですね。改めて全句集を読みまして、面白いと言うのは非常に失礼ですけれども、諧謔味のある俳句は良いと思っています。

長谷川さんは中村草田男賞です。草田男は、波郷と同じように人間探求派の俳人で、戦前は新興俳句の軽薄な素材主義は駄目だとか、モダニズムは駄目だとか、日野草城とミヤコホテル論争というのを何年もかかってやった…そういう方です。戦後は、文学も重んずるけれども、俳句はやはり形式の中での芸であるという二つのものを掲げた、いわゆる俳人であると同時に詩人です。私は中村草田男さんのことを俳詩人と言うのですが、そういう人ではないかと思っています。

長谷川さんは古格―俳人格ということを一時期言われたことがありますが、古格を踏まえた丹精な作風で知られている方です。そういう道を一途に突き進むという俳句です。やはり俳句は季語、そして切れがあるのがオリジナルであるし、俳句がこれから国際的に広がっていっても、俳句がオリジナリティを失ってはいけないということです。恐らく波郷が生きていればそういうことを言うでしょう。波郷に言わせれば、韻文精神の徹底と申しましょうか。

▼長谷川　草田男賞をいただきまして、自分とは一番対極の人の名前が付いている賞をいただいたという感じがしています。つまり今、村上さんからご紹介いただいたように、僕は俳句は本当に日本の土着のもので、だからこそ国際的に注目を浴びるのだという考え方をしています。日本語でしか書けない俳句の良さを、ずっと追求していきたいと思っています。そういう意味では、隣にいらっしゃるシラネさんの波郷賞が相応しかったかなあと自分では思っています。（笑）ですから、今回の草田男賞は、もっと俳句の枠を広げて、つまり草田男的な、僕にとってかなり異質な俳人の素質も咀嚼してこれからやっていけという励ましの意味であろうと思って、ありがたくいただきました。

俳句の賞は結社の賞とか協会の賞とかたくさんありますが、それぞれ結社の中、協会の中でやっているだけです。今まで俳壇全体を見回して与える賞というのはほとんどありませんでした。今回の賞は、あらゆる結社、三つの協会の境界を取り払って選考されたということで、非常に有意義な賞であると思っております。そういう賞の一つをいただけて光栄に思っているところです。

さて、先ほど朗読した句について、二、三申し上げておきたいことがあります。最初の「千年をまた一つより始めけり」という句は、これは２００１年のお正月に詠んだ句です。これは２００１年の正月でないと詠めません。２００１年の千年前は１００１年なんですが、１００１年はまだ俳句がありませんので、こういう俳句は出ない。３００１年も「千年をまた一つより始めけり」なんですが、それまで誰も生きてないわけですから、２００１年の正月だけの句です。

今回の句集にはかなり前書きをたくさん付けました。これはただ漫然と付けているわけじゃなくて、近代俳句の「一句独立」という考え方が、かなりあやしいと前から思っているので付けました。芭蕉の名句は、全部芭蕉の人生のそれぞれのコマにはまっているわけです。「一句独立」というのは何かの間違いじゃないかと思っています。

次の「億万の春塵となり大仏」という句には、「バーミヤン大仏破壊を嘆く人々に」という前書きを付けました。バーミヤンの大仏は壊されてしまいましたが、このことを日本のマスコミ、知識人達が「酷いことをする」と非難したわけですけれども、「そういきり立たずに」という句です。壊れたからといって、元々仏教は物にこだわるなという教えですから、仏様自体が壊れることを予測してそこに立っておられるわけです。春塵となって、塵となって世界じゅうに散らばっ

ているという句です。

四句目の「うねりくる卯波に命ゆだねたる」という句の卯波は、夏の始めの大きな波を指しますが、それに命を委ねている。これだけでも勿論読める句で、これに前書きは付けませんでした。ただ心の中で、僕の名古屋の友人である女性が命に関わる大病をしまして、ちょうど手術の直後に名古屋港の船に乗った時の句です。その女性に対する励ましの句でした。

六句目の「摩天楼の頂に秋来てゐたり」という句は、一昨年ニューヨークに行った時の句です。僕の曾祖父が、半世紀以上も前に20年間亡命生活を送っていた跡を訪ねたのですが、その時に、昨年、破壊されたツインタワーに上り、その頂で詠みました。七月の終わりでしたが、秋の始めの気配が摩天楼の頂だけに早くも来ているという句です。

「馬追の捨ててゆきたる足ならん」という句は、今度の句集に馬追いの一連の句が入っていますが、その一番最後に入れている句です。これはほかの馬追いの句とちょっと違いまして、速水御舟という絵描きがいますが、その人の伝記を頭に思い浮かべながら詠んだ句です。御舟は若い時に都電に引かれてしまいました。咄嗟の判断で、手を引かれると絵描きとしてやっていけないので、足を引かせるんですね。それで足がなくなった。これも前書きは付けておりませんが、僕の気持ちの中ではそういう句です。

▼村上　俳句は一句一句独立と言いますが、そうでもないということで前書きというお話が出ました。これについては恐らく、ハルオシラネさんから、俳句は一つ一つ独立しないという話が後で出てくるのではないかと思います。

シラネさんは石田波郷賞です。伝統的な俳句を作る人は誰もが波郷賞を貰いたいのではないでしょうか。今回はアメリカ在住のシラネさんが受賞者となりました。正に波郷というのは俳人らしい俳人ですね。そういう俳人の賞をシラネさんが貰われたということは、21世紀の俳句がどういう方向に行くのか予測できるような気もして、シラネさんの受賞はいいなあと思っています。

波郷というのは、俳句を非常に単純に、そして緊密な表現で、そして身の丈に合ったものを一息で詠むという、そういう表現方法をした方です。それが韻文精神の徹底ということでしょうが、そういう俳人ではなかったかと思います。シラネさんは、日本の俳句と英語俳句、そういうものを比較した時に、俳句というものがどういうものであるか。世界の中に日本の俳句を置いた時に、どういうものであるかということ、日本のカウンターカルチャーというか、ヨーロッパ主流の文学、理論から対抗するもう一つの文学、そういうものをお考えになって、俳句の本質論を説かれています。俳句とは何かということを考えていった時に、受賞の対象になった『芭蕉の風景』を読みまして、目から鱗が落ちる俳句論です。日本で俳句評論を書く人も多くいますが、ここまで掘り下げて書かれている人はいないと思っています。

▼シラネ　ありがとうございました。こんなに誉められると困りますが、本当に今回、波郷賞を戴いて光栄だと思っています。

『芭蕉の風景』の内容をまとめるのはちょっと難しいのですが、今回、受賞した他の皆さんの発句をとりあげながら、自分の立場を説明させていただきたいと思います。

まず夏石さんの「イリノイの堇越境してくる光」ですが、私の仕事は、一つはこの日本詩歌の「光」を理解することです。歴史的に、文化史的に、また世界文学の上で理解したいと思っています。もう一つは、この「光」を境界を越えるよ

うに持っていきたいと思っています。ただ、これは易しいことではありません。翻訳だけではなかなか日本の外に「光」を伝えられません。俳句のような短詩型というものは、翻訳だけでは長く生き続けられないものです。

俳句・俳諧に関する今の私の仕事を三つに分けてみましたが一つは研究です。『芭蕉の風景』もその一つです。

もう一つは、目下、英語で歳時記を書いてます。例句をつけた万葉集から近代・現代までの日本詩歌の歳時記。これは、歳時記がない限り、日本の詩歌は本当に世界に理解してもらえないという気持ちで書いています。短詩形の問題ですけども、俳句は短詩でありながら、大きい枠の中に入っているから生きるというところが非常に大きいと思っています。そのために、大きい枠がないと世界文学としては光らないと思っています。

もう一つは翻訳です。今までは古典文学中心でして、特に和歌、俳諧を扱ってきました。これからは今この舞台の上にいらっしゃるような近代、現代の俳人の素晴らしいものも、もっと大きい枠の中で翻訳して、紹介したいと思っています。現在のアメリカでは、やはり芭蕉、蕪村、一茶を基準にして英語俳句を作っています。正岡子規がちょっと入るというところです。今、20世紀のものを視野に入れた良い翻訳がぼつぼつ出てきていますけれども、広い視野の中で近代、現代俳句をもっと西洋、欧米に紹介したいと思っています。

私の最初の著書は『源氏物語』について書いたものですが、その後芭蕉に飛んでいって国文学の人達は皆びっくりしました。私から見れば、非常に繋がっているところがあって、それは連句的な構造で、『源氏物語』もどんどん繋げて展開していくという基本的なところがあります。『芭蕉の風景』では芭蕉の俳諧のなるべく色々な面を取り上げましたが、一番私にとって重要だったのは、比較文学のコンテクストの中で芭蕉の俳諧、俳句を分析するということです。広い意味での比較詩論です。私にとって一番問題になったのは、どうしてこんな短いもの、世界で最短ともいえる俳句という形が詩足りえているか、そういう問いでした。

西洋詩の観点から見れば、とても面白いものは切字です。これは非常にユニークな大きい武器で、もう一つは短詩形から生まれる「間(ま)」というか、開かれたスペース。そこに余情というか、その「間」において読者の想像力が働く。その「間」の中で、読者が積極的に参加して作品を完成するというふうに思われます。

しかし、それと同時に、アメリカで長年教えてきた経験ですけれども、外国人が同じ日本の俳句を読んでも、日本人が絶対考えないような反応をする、ということがあります。例えば有名な芭蕉の名句ですけども、「夏草や兵どもが夢の跡」。アメリカ人の学生は大体この夏草は枯れた黄色い草、または芝生だというふうに考える傾向があります。というのは、アメリカの夏は非常に雨が少ないのです。日本では、万葉集以来、夏草といえば丈高く繁っている緑の草なんですね。そこを理解しないと芭蕉の句の半分が死んでしまうように思います。日本の文化、詩歌は、「湿った文化」だと思っています。霧、霞、雲、雨、五月雨、時雨。湿っているようなものが多くて、歳時記のようなものがない限り、そうしたものが翻訳では死んでしまうわけです。

芭蕉は平泉・衣川というところで「夏草や」の発句を作りましたが、衣川は「衣」という言葉で恋と深く関係していました。芭蕉はこのような和歌的な連想をひっくり返し、中国詩の伝統にある戦場という場面を導入して、非常に俳諧的に、今までの読みというか、私のいう「文化の記憶」—コード化された約束を変えてしまったのです。東北の多くの歌枕が恋と関係していますが、芭蕉はいろんな意味でその風景を変えてしまったと思います。

英語俳句と比較しますと、一つはっきりしてくるのは、英語俳句には季語がありません。これは根本的な違いです。季節感のある英語俳句は勿論いっぱいありますが、その機能がちょっと違うという気がします。日本に季語のような文化的連想を伴っていません。これは一つは地域の問題で、地域ごとに気候や季節が違うということですけれども、やっぱり一番大きいのは、歳時記のような伝統が無いということです。そのために英語俳句、これはインドの俳句もそうらしいですが、半分近くは日本の川柳に近い。これは悪い意味ではなくて、いい意味で川柳に近いものが含まれていて、川柳と俳句が混じっているような独特なものになっています。

英語俳句と違って、日本の俳句は個々のテクストが独立して存在するのではなく、詩的なトポスと連想の集合体、私の言葉では「文化の記憶」、「偉大な季節・地誌のアンソロジー」が背景にあって、その中で短いものが生きてくるというところが一つのポイントになっている。ただし、この「文化の記憶」は、ただ静止して動かない集合体ではなく、絶えず変化して展開していく。そうしないと死んでしまう、命を失ってしまうものであって、それを変えていく力、これを私は「俳諧的創造力」と呼んでいます。ここにいらっしゃる俳人の方々は、そういう意味の俳諧的な創造力をもって「文化の記憶」を絶えず変化させ、拡大していらっしゃると思います。芭蕉の「夏草や」は衣川を和歌的な恋の場所から、戦場に変えてしまった。そういう動きが重要なポイントです。

長谷川さんの句ですけれども、「億万の春塵となり大仏」。これは非常に現代的な俳句ですが、やっぱり長い伝統の中に生きているもので、それは時間意識、日本の詩歌、特に俳句の本当に深い時間意識を持っていると思います。季節の時間だけじゃなくて瞬間的な時間、そして歴史的な時間と記憶、これらが同時に存在しています。歳時記のような大きい文化の記憶がなければ、こんな複雑な効果が短い詩形の中に生み出されるのは困難でしょう。こういう詩的現象を、これからも研究して紹介したいと思います。

▼村上　今のシラネさんの話の中でコンテクスト、大きい「文化の記憶」ということ、もう一つは「偉大な季節・地誌のアンソロジー」ということを挙げられていました。日本の場合には、そういう文脈の中で俳句の切れとか間を取る。その付け合いといいますか、そういうものは必然的に日本人であると自ずと分かるものであって、適当に付けたのではないというような論が、シラネさんの著書の中に出ていて、非常に感激したのですが。

▼夏石　なかなか面白い議論とポイントが出てきたと思います。シラネさんの発言中「あれ、私はやばいのかな」と思ったり、「ああなるほど」と思ったり、俳諧、俳句というのは非常に微妙なものだと思います。歳時記というもの、私も歳時記を編ませてもらいましたけれども、歳時記自体が無季を含めたキーワードを入れたり、また変わりつつあるわけです。また歳時記のみならず俳句自体も、互いが理解している短い俳句を解釈する、鑑賞する、受け取るというその補助として歳時記を考えておられる。

私も学者と俳人の創作者という中で、いつも争っていますが、学者の方が保守的にならざるを得ない。これは既存のデータ、既存のものをベースにして話さざるを得ないのですが、創作者の方はやはり未来に向かって自分がどうしていきたいかということを、少し先走りながらあるいは暴れながらやらざるを得ない。歳時記ということ自体も、比喩というか、もっと大きな広がりになりつつある。

歳時記は季感じゃなくて、もっと違う何か。人間の心というのか文化の基本というのか、何かそういうものを根っこに

しながら歳時記自身が大きく変革、変換していく、あるいは拡大していく。拡大主義というと帝国主義に繋がって、ある一つの価値観で他の国の人達の価値観を押さえてしまうということではなくて、それこそ共同で作り上げていくとまた違う共同の短詩形の創造力の場というのか、これがこの21世紀には生まれるのではないか。

河東碧梧桐も子規の弟子ですから、ひょっとしたらそういう夢物語を考えていたかもしれませんね。シラネさんのお仕事、歳時記の翻訳も期待したいですし、ウィリアム　ヒギンソンさんも『Haiku World（ハイクワールド）』という非常に野心的な仕事をされています。私も『現代俳句キーワード辞典』というのを出していますけども、これ日本語ですけれども、そういう仕事が積み重なっていってもっと大きな枠組みの、共同というのでしょうか、詩的創造力の殿堂みたいなものが歳時記であり、21世紀に僕は生まれそうな予感がしています。

▼**村上**　歳時記というか、シラネさんの考えるのはもっと大きい体系的なものであるけれども、静的、動かないものではなくて動的なものであるということ。そういう一つの文化の記憶というのも、固定したものではなくてやはり動いていくものです。

▼**夏石**　楽しみですね。

▼**シラネ**　広い意味の歳時記を今書いている最中です。最初は季語だけの歳時記を考えていたのですが、やればやるほどそれに入らないものが多い。例えば、恋、恋愛の問題ですね。季語だけでいくと七夕とか猫の恋とか非常に限られてきますが、やはりそれだけでは足りないという気がします。そういう意味で、夏石さんの言う広い意味の歳時記を考えております。

▼**村上**　シラネさんは最近、分厚い本で、『Early Modern Japanese Literature anthology（近世文学選集）』という大きい立派な、日本文学が世界に広がるテキストをお作りになっています。　また、俳句の世界に向けたテキスト作りを、これからは古典だけでなく、新しい現代の俳人の作品も入れて作るという意欲を持っていらっしゃいまして、期待しているわけです。

加藤さん。俳諧にお詳しいのですが。

▼**加藤**　いやあ、俳諧は大変ですよ。（笑）あんまりはお勧めはしませんけどね。

それと、別に異を唱えるわけじゃないのですが、芭蕉だけが俳諧だというのはどうも小癪に障るんでね。それで、飯島耕一君という長い付き合いの詩を書く友人と、あれも少しへそが曲がっていますから、やろうかっていって編みました。（『江戸俳諧にしひがし』みすず書房刊）俳諧というのは、いろんなまとめ方、攻め方というのはあると思います。

これからアメリカの人などが増えてくると、俳諧という語義の解釈といいますか、随分日本人と違った見方をするのではないかと期待はしています。子規が芭蕉よりは蕪村に傾きというか重きを置いたように、明治の革新期に広い視野に立ったふところ深い人が出てくれば、これからアメリカから全然違った意味で、例えば其角を始めとする江戸座の俳諧というものに興味を持って下さったりすれば、日本の人が却って学ぶ大きいものがあると思います。

江戸俳諧は、探れば探るほど非常に懐が広いっていうか、底辺が広いんですよ。今度書きましたのは、芭蕉というのは、ご存知のように旅を歩いて連衆を増やすことに重きを置きました。しかし、江戸の連中というのは、余り出たがらないですね。其角でいうと三～四回ぐらい西鶴に会いに行くぐらいですから。そういうのが身内の周りの、江戸といっても昔の

江戸は狭いですからね。やっぱり井の中の蛙にならざるを得ないです。江戸俳諧やると非常に行き詰まりを感じました。似たような句がいっぱい出てきますね。

子規居士の俳句分類というのは素晴らしい仕事で、その分類をなさっただけでも大変なのに、天文だとかいろんな付き合いの分類をなさったのは画期的なことです。そういうのを今度、シラネさんがアメリカで、コロンビア大学でやってくれればありがたいと思う。それと是非、日本にちょいちょいお出でになって、歌舞伎とか落語とかに直に接していただきたい。江戸俳諧というのは、歌舞伎の狂言が分からないと半分も分からないでしょう。

今日十句選びましたが、自作を言うのはちょっと照れますけども、「初松魚あゝつがもねえなまりとは」。これは筑紫磐井君が誉めてくれたのですが、つまり初松魚というと誰だって新しいと思うに決まっている。魚市場で買えるわけです。ところが、「つがもねえ」というのは簡単にいえば「埒もない」という意味です。黙阿弥みたいな調子で七五調でやるには俳句が一番適しています。こういう宝を忘れて、今の俳人は苦しんで作っているような振りをしていますけれども、私に言わせればちゃんちゃらおかしいんですね。（笑）江戸俳諧とかぎらず江戸人の伝統には悪態をつくならわしのようなものがあります。私もその伝統を重んじて、悪態の反語的な効用を大事にしてきました。これは既に筑紫磐井君が指摘して下さっています。

江戸の俳諧を見れば材料がごろごろしています。まず子規の分類を見てごらんなさい。いっぱいあるから。子規がさすがだと思うのはやっぱり野球を分かってくれた男ですから、歌舞伎も観てる。落語も知ってるしね。ちょいと吉原の遊びも知っている。そういう面白い男だったと思います。ついでに加えさせていただければ、悪態というのは江戸俳諧における挨拶のようなものです。

それと隣の薗八ですが、ご存知のように宮薗節から分かれました薗八節というのは、鳥辺山なんていう名曲がありますが、これを惜しんだ一人に永井荷風という男がおりまして、ご存知の『雨瀟瀟』という名作を、短編を、中編ですかね、書いています。それで岡時雨って引っ掛けているんですよ。岡時雨なんて言葉は今ほとんど使われていない。昔はたまにあります。

この薗八は江戸の音曲が、正曲が絶えてしまうというので、『雨瀟瀟』というのを荷風さんがこさえるわけですけれども、私もこれは実は惜しいなと思うんで詠んだんですよ。それから岡時雨っていうのは、時雨っていうのはご存知のとおり海もあれば山もあるようなところだといいのですが、江戸というのは筑波山まで行かないと山がありませんからね。まあ箱根の山あるけども。そういう時にやっぱりほとんど岡時雨。時雨っていうのは俳諧では非常に重大な問題といいますか、課題であるんですが、こういうきれいな言葉があるっていうんで岡時雨を入れた。そんなところですね。

前半は、ちょっと照れますから言いませんけれども、若書きの気ばっかりで、粋がって何を作っていたんだか分かんないわけですよ。まあ夏石君がこの天文のや何かをとっても誉めてくれたいい文章を書いてくださったです。だから今夏石君の句が非常にスケールが大きいのは、やっぱり私の影響を甚大に受けている。

▼夏石　そのとおりです。

▼加藤　それからこの伊勢るまでというのは、『俳句研究』という雑誌がございましてね。そこが別冊を出すから、何かお前も平成の俳句を書けって言うから五句選んで入れておきました。「伊勢る」っていうのは近頃使いませんが、「寄せる」

って言ってね、裁縫なさる方は分かるでしょう。編物のことを「寄せる」っていうんですよ。樋口一葉なんかはちゃんと書いています。辞典の中じゃね、『大言海』とかいろいろ出てきます。それを訛って伊勢るって言うんですね。それで私は業平蜆っていうのを『伊勢物語』とかに引っかけて入れたわけです。

それから今日は少しサービスしましょうか。最後の句はみんな引っかかると思いますよ。そんな言い方良くないがね。読めばこんな簡単な句はないんですよ。「川筋に子供老いけり春の雪」。子供が老いていくのは当たり前じゃないですか。ところが川筋っていうのは深川しか言わないんです。江戸のことを知らないと川筋って何だか分かんないわけですよ。あそこだけを川筋と申しまして、昔は岡場所がありまして吉原に対抗していた。それで川筋なんです。子供屋っていうのは芸者屋って言うと聞こえがいいけれども、簡単に言えば深川の女郎屋ですよ。それを子供屋と言うんですよ。これも夏石君が誉めてくれましたが、「子供屋のコリドン」ていう句が私にございまして、それの続編みたいなもんですね。そして「春の雪」ていうのは淡雪ですね。

しかし、てめえの句を解釈するくらい野暮でみっともねえことはないですね。（笑）まあそんなことです。あとはどうってことありませんよ。こんなものは。

歳時記の話が出たから申し上げますと、完全な歳時記っていうのはあり得ないですね。それを覚悟の上でアメリカの方はやらないと大変ですよ。これから歳時記にニューヨークの春とか、いろんなのがやっぱり出てくるでしょうからね。（笑）5丁目の地下鉄がどうしたとか何とかというのがあるでしょう。そういう意味で腹を括ってやらないと大変です。だからそれをまとめて下さったらありがたいし、是非日本の方ともご相談なさいまして、世界の文化のためにね。話は大きく持っていった方がいいんですよ。こういったのは。（笑）ちまちましてないでね。日本にも夏石君みたいに外国文学ができるのもおりますし、相談して共同作業でやってくださいよ。実にありがたいです。それで、その頃までこの賞が続けば大賞を差し上げて……。愛媛県の名誉のためにも申し上げます。（拍手）

▼村上　俳諧の奥深い、難しい、怖い話をいろいろお聞きしましたですけれども、長谷川さんもいろいろご意見あると思いますが。

▼長谷川　シラネさんの著書について一言申し上げると、出た時に驚きました。つまりアメリカの方がこれだけの本を書かれたというので、いろんなところで是非読めと勧めた本の一つです。何故そういうふうに思ったかというと、外国語で俳句を作られる人の俳句を拝見すると、やはりどこか日本の俳句と違っていまして、川柳に近いというか、意味がたくさん入っています。どうして外国の人が俳句に興味を持つのかなと考えると、要するに最初の取っ掛かりは多分俳句が短いというところだと思うんですね。それが今までの外国の俳句だと思うんです。

シラネさんの本を読むと、間とか切れとかの解説があって、それも日本の俳人が今はとても書かないような指摘があります。短い詩としての俳句じゃなくて、切れとか間、そういうものを含んだ俳句というものに、やっとアメリカの人が気づいたかと非常に驚いたわけです。本当のアメリカ人だったらお株を明け渡さなくちゃいけないのですが、半分日本人でいらっしゃるので安心しました。

俳句にとって切れというのは本当に命みたいなものですから。これから俳句が世界に広がっていくとすると、その「切れ」をそれぞれの言語の中でどう実現していくかが、本当の意味での国際化にとって重要と思います。

▼**村上**　そのとおりだと思います。シラネさんはそれに対して如何ですか。

▼**シラネ**　さっき英語俳句に季語が基本的にないと申しましたが、切字のようなものはあります。切字である「かな」とか「や」とかそういう特別の言葉は無いけれど、切字の生み出す効果が、有効に使われています。切字の効果は、国際俳句にとって一番大きい武器じゃないか。武器というと悪いですけれども、重要なテクニックとしてやっぱり活きている。

それとまた別の問題ですけれども、せっかく受賞者がいらっしゃるから一つお聞きしたいことがあります。現代俳句を読んで一番気になるのはフィクション、ノンフィクションの問題です。これは時間とも関連しています。

俳句が現在から出発して展開していくのか、それとも違う時点から、違う次元から出発しているのかという問題です。例えば古典的な俳句を見ると、芭蕉は非常にその場の時間を重視しますが、それに対して蕪村は想像の世界から出発している。蕪村の8割は多分そうだと思います。俳諧の大きい流れの中で、現在から出発するのと想像の世界から出発するのと基本的に二つあって、今活躍している俳人から見て、これをどういうふうに自分の中で受け取っているのか、という質問です。

▼**夏石**　これはもう正岡子規、あるいはその前に多分答えが一応出ているかもしれません。子規は写生、写生と言われていますけれども、『俳諧大要』という本の中では「非空非実」と言っています。非空は空想でもない、非実は現実でもない。現実、空想どちらからも離れたもっと自由な立場からと、子規は百年以上前に言っています。

もう一つ、キーワードで言いますと俳諧は自由です。いわゆる「俳諧自由」ですね。そのあたりを俳人というのはもっと自由自在にタイムマシンで飛んでもいいんじゃないかというのが私の答えです。

▼**長谷川**　空想か現実かという問題ですね。子規が写生ということを言ったわけですが、子規の写生は、彼は病床に寝ているわけですから、現実を写生すると病床の周りのことだけしか言えません。ところが実際残っている子規の俳句はいろんなこと詠んでいます。世界中のこと。日本の富士山の話とか。彼は空想で詠んでいるわけです。ただ普通の俳人と違うのは、空想で詠んだものも目に見えるように詠んでいるんです。だから子規の写生っていうのは目に見えるものを詠め、現実を詠めというのじゃなくて、目に見えないものも目に見えるように詠めっていう意味なんですね。

そこのところを子規から時代が下るにつれて現代俳句はちょっと捻ってしまって、目に見えるように詠めっていうところを軽んじて、目に見えるものだけを詠めという箍を嵌めているみたいなところがあります。

▼**村上**　シラネさん、大体よろしいですか。

▼**シラネ**　もう一つの問題ですが、句会と結社の問題です。そこには共同の想像が働いています。個人であると同時にグループの間に働く想像力。そこに俳句の一つの大きい特徴があるのではないか。だから現在でもあるし今、ここと違うところでもあるというような。

▼**村上**　それが現在であり、違ってもみんな理解できるわけですね。共同の基盤みたいなものがありますからね。加藤さん何かございませんですか、今の空想とか。俳諧ではどうなんでしょうか。

▼**加藤**　俳諧で世界という言葉をよく使います。これは歌舞伎でも狂言でも世界、世界と言うんですね。当時、三百年前、もっと前から世界という言葉は使われています。それは「わしらの世界は」という意味で使うんですよ。世間とか世の中と言い直してもよろしいでしょう。世界意識なんか勿論鎖国してますからないですけどね。子規をきちんと読んでいる長

谷川さんが言われるその通りだと思う。子規っていうのは本当に病床六尺でよくああいうものを詠まれているなと思う。それで好きな柿の句とか歌というと沢山あるように、一つに集中すると非常によくお作りになった人ですね。漱石とか良い友人がいましたから刺激も受けたんだと思いますけれども、なんせ三十幾つで若過ぎてもう勿体無くてならない。

ご存知のように『子規全集』っていうのは何次かにわたって出ましたが、その影の功労者をここで一つはっきり申し上げておきたいんです。これはご存知のように寒川鼠骨さんが勿論主になっていますが、柴田宵曲という人をお忘れになってもらっては困るんです。この宵曲さんがいないと、あれだけまとめておいてくれなかったら、今の子規全集というのはあり得ないんです。子規庵に風呂敷包みを持って毎日のように通ってね。宵曲さんの書体は子規居士に似てきたっていうことをみんなが言うようになってくるくらいの人です。そういうことも一つ合わせて。

それを森銑三という方が非常に嘆いて、文庫本のために新たに筆をおろされてお書きになっていますけども、非常に親しい、仲の良かった二人でした。だから今日の子規全集が残された仕事にそういうことがあるということです。それで子規にも間違いがある。それを正したのが宵曲さんの文集としてまとめられたのがありますから、機会があったら是非ご一瞥を賜りたいです。これはかなりありますよ。子規か牧水かのどちらかの間違いで歌が違っているのがあります。そういうことはほとんど指摘する人が少なくなりましたね。コンピュータか何だかもう変な話が多くて、大事なことがみんなぼけているんですよ。

それからご承知のように、岩波文庫で何冊も続けざまって言っていいくらいに、柴田宵曲のそういう文庫本をお作りになったっていうのは大変なことでありまして、宵曲さんを支えたのは幽明境を異にした子規居士です。俳人としても宵曲さんは子規に捧げた記がいろいろございますから是非お読みください。とてもいいものがあります。できれば子規の分類を—山下一海さんが何かで話されたことがありますが—もう一度再分類するような形でなさると面白いんじゃないでしょうか。元の本は欠字が多いんですよ。子規居士もお尻が痛かったり腰が痛かったりするでしょう。抜けている。元句が抜けている場合もあるでしょうけれども、私もそこまで入らなかったけれども、私もちょっとおいそれたことを考えて、あそこに出てくる俳人を調べてやろうと思ってかかったんだけれども、とんでもない話で……。その一部が『古句を観る』という柴田宵曲の名著となった。文庫の中に入ってますが、あれはほとんど無名の俳人です。そういう意味でも、子規のそういう薫陶大なるものがありましたね。子規は素晴らしい優しい男ですよ。そういう無名の人をきちんと拾っておいてくれました。心からお礼を申し上げたいと思います。

▼村上 どうもありがとうございます。今、加藤郁乎さんが21世紀えひめ俳句の課題というか、子規継承でどうするかと同時に、それだけじゃなくて今後への問題提起もされました。ちょうど時間が来てしまいましたので、今のお話をここに頂戴しまして今日の「俳句を訊く」の結論にさせていただきます。（拍手）

芝不器男俳句新人賞

◎趣　意

「彗星の如く俳壇の空を通過した」（横山白虹）と評された芝不器男は、現在の愛媛県・松野町松丸に生まれ、鬼北盆地の豊かな自然と俳句好きの家庭の中に育った。昭和初期の数年間に活躍し、夭折・望郷の俳人とも呼ばれる不器男が遺した俳句は、僅か二百余句に過ぎない。しかし、一つひとつの句の持つ豊かな抒情性と瑞々しい詩性は、その後の昭和俳句の先駆けとなるものであった。

不器男の名を冠するこの賞は、新鮮な感覚を備え、大きな将来性を有する若い俳人に贈られる。この賞が誘因となって、今世紀の俳句をリードする新たな感性が登場することを強く願っている。

◎対　象

俳句を募集のうえ、最も優れた者に賞を贈る。

◎募集内容

応募百句（過去三年間に既に発表した句でも可）

応募資格は昭和38年1月1日以降生まれの者（40歳未満）

◎募集期限

平成14年9月21日（土）

◎種　類

芝不器男・俳句新人賞（一名）

正賞：松野町ガラス工芸品　及び　ディプロマ（授賞証書）

副賞：賞金30万円、句集発行（平成15年度に出版予定）

選考委員奨励賞（数名）

正賞：松野町ガラス工芸品　及び　ディプロマ（授賞証書）

副賞：記念品

◎選　考

応募者氏名秘匿のまま、選考委員会の審議により受賞者を決定する。

なお、応募者の年齢については、作品毎に明らかにした。

◎選考委員会

大石　悦子　俳人
城戸　朱理　詩人
齋藤　慎爾　俳人（深夜叢書社社主）
対馬　康子　俳人
坪内　稔典　俳人（佛教大学教授）

参　与　西村我尼吾　俳人

◎選考経緯

平成14年3～4月　賞内容等に関する討議
平成14年4月30日　応募開始
平成14年9月21日　応募締切り（応募総数：156編）
平成14年10月26日　選考委員会開催（予備選考）
平成14年11月5日　場所：東京都千代田区　都市センターホテル　703会議室
平成14年11月30日　予備選考結果　公表（予選通過：31編）
平成15年4月19日　国際俳句フェスティバルにおいて公開審査会を開催、受賞者決定
場所：愛媛県松山市　愛媛県県民文化会館　第6会議室
芝不器男生誕百年祭にて表彰（予定）
場所：愛媛県松野町　松野町コミュニティセンター

◎受賞者紹介（敬称略）

芝不器男俳句新人賞　大阪府　冨田拓也

選考委員奨励賞

大石悦子奨励賞　兵庫県　小田涼子
城戸朱理奨励賞　東京都　関　悦史
齋藤慎爾奨励賞　宮城県　佐藤成之
対馬康子奨励賞　福井県　松原藍夏
坪内稔典奨励賞　東京都　神野紗希

○お知らせ　一　授賞式は、芝不器男生誕百年祭にて行われます。
と　き：平成15年4月19日（土）9時30分～
ところ：愛媛県松野町「松野町コミュニティセンター」
二　冨田拓也氏の新人賞授賞作品は、平成15年度に出版されます。

選考委員奨励賞 授賞作品

○大石悦子奨励賞

兵庫県　小田涼子

初刷を手に父戻る深夜かな
恋の猫浮きの間を通りぬけ
紅梅や一等兵の墓ひとつ
弟のぐつすり眠る梅林
下萌えや真つ白な猫眠りをり
雛人形みな福耳でありにけり
春の雪飲食街をぬけにけり
春夕焼原生林に犬の声
釣りをする少年ひとり水草生う
つちふるや学習塾の窓開く
つちふるやツタンカーメン発掘記
下校児の鈴の音高し鳥雲に
蘆の角真鴨の黒く光りけり
木々芽吹く大教室は昼休み
藪椿母との距離を少しとり
恋のうた流れてきたる黄水仙
絵の中の異人ばかりや花ミモザ
春の雲エンジンの音重なりぬ
分校に近づき杉の花にほふ
花吹雪木馬にしがみつく子かな
仕出し屋の電話を借りぬ花の昼
文庫本買うて家路や夕桜
夕桜柵の向かうの白き猫
先輩と呼ぶ声高し春の海
花束の打ち上げられし春の磯
囀りや熱帯雨林に立つごとし
鳥の恋ボート乗り場に並びをり
黒猫の大きな貌や竹の秋
嘴の光ってゐたり春の池
風光るあひる何度も顔洗ふ
男女混合サッカーチーム風光る
老人の菜の花畑に浮かびをり
菜の花や背後を過ぐる乳母車
菜の花やメリーポピンズ飛んで来し
花菜風子犬の耳の裏返る
菜の花や鉄触れ合うて音響く
遠足の児の箸箱を開けられず
夏近しショートカットの少女たち
葉桜や声出して読むフランス語
病名の明かされずゐる若葉かな
切符透く胸のポケット柿若葉
鉄線花祖父の大きな独り言
領事館の小さき表札桐の花
ポケットに出さぬ葉書や桐の花
流木をくはへし犬や夏の雲
天井に届く古本麦の秋
老人の高き鼻なり麦の秋
家庭教師終へあぢさゐを貰ひけり

地下鉄にあじさゐ抱へ乗りにけり
走り梅雨地下から返事してゐたる
青梅雨や色あせし絵を見てゐたる
夏の霧外国船の現るる
夏の雲庭より机運び入れ
ポスターを貼りゆく人や五月闇
青枇杷に昨日の月の残りけり
手芸店開店真近枇杷熟るる
先生と呼ばるる老女初蛍
夏の蝶大樹を越えて消えにけり
渡仏する友夏帽子新しく
塗り絵して母親を待つ夏帽子
青鬼灯祖母のいなりの大きかり
地球儀を照らしてゐたり夏の月
夏の月外車連ねて走る街
義経を演ずる少女月涼し
鳴焼や静かに食べる昼ごはん
青田風園児のたたく大太鼓
宇治橋の貫いてゐる大暑かな
水琴窟に耳すませたる晩夏かな
夏の果兵舎の中の鉄兜
遠花火父の通知簿見てゐたり
遠花火一人になつてをりにけり
天の川父との会話すぐ途切れ
稲の秋琵琶湖に少し波のあり
町流しきびすを返す風の盆
幼子の歌ふ恋歌風の盆
音楽館に灯の残りをる夜長かな
旅立ちの朝のかぼちやを炊いてゐる
鶏頭花本屋の裏に居つく猫
竹の春石に彫られし文字を読む
秋の空朝礼台を運びをり
石段の中の石仏秋の風
秋風や廃屋に住む黒き猫
秋の雨ガラスの指輪買ひにけり
鵙鳴くや女子学生の声に似て
親戚の作るりんごを手土産に
病む母に甘柿二つ買ひにけり
サガの夕景といふ白菊のありにけり
島の子の運動会に加はりぬ
青みかん職員室に置かれあり
秋の虹上着をかけてくれにけり
老記者の最終講義冬始め
新しき眼鏡を買ひぬ冬はじめ
新しき橋のかかりぬ七五三
落葉持ちかくれんぼする園児かな
初氷大観覧車映しけり
冬濤や車窓に残る雨の筋
大焚火貰ひに鬼のやって来し
助教授の闇に消えゆくマントかな
冬満月がらりと広き能舞台
極月の花束に席ゆづらるる

○城戸朱理奨励賞

東京都　関　悦史

「マクデブルクの館」
内界ニ洋館浮イテ眠ラレズ
膿胞ノ如ク館ノ美シキ
黒外套ノ無想ノ師弟到着ス
姉ノ横死ノ刹那ノ視野ノシャンデリア
嘆キツツ崩レ溶ケタル姉ノ快
腐敗ノ熱ノ白鳥ノ首向キ變ハル

生涯不犯ノ伯父モ行方知レズトヤ
階段ヲ自動人形ガ上リ來ル
地下ニ亡父ニ磨キコマレシ《鐵ノ處女》
眞青ナ文盲ノ魚飛ビ交ヘリ
頭上ノ魚ハ我ガ内耳ニモ産卵ス
地圖延ベテ領地女陰ノ形ヲナス
崖ヲ落ツ少年眞白キ瓦解
《フランシス》トイフ大蛸ノ通リ過グ
藏書ミナカプカプ翼疊ムナリ
曾祖父ノ不可思議ナメモ舊約ヨリ
「君トナラトモニ殺セル青イ鳥」
車椅子倒レ庭中女身生エ
婚約ノ兄梟ノ頭部シテ
宴マヅ串刺シニナル調律師
コレヨリハ宴ヲ法ト心得ヨ
往診ノ主治醫鞄ニ喰ハレツツ
鄰席ノ鷄ト築城術ノ話
弦樂四重奏團(クワルテット)互ヒノ肉ヲ裂ク調べ
沒藥ヤ卓布ノウヘニ生ルル舌
喰ハレヌタメニ舌客ドモヲ毆リツツ
モガキツツ薔薇鐵皿ニ燒キアガル
大宇宙ヒトノモノ喰フ音ニ荒レ
當主見ユ皆ニ不在トシテ見ユル
トルソーノ濃キ陰毛ヲ遺産トス
令孃ノ動力トシテ猫ノ放電
齒車式ノ求婚者タチ明滅ス
魚スベテ腹見セテ浮ク遁走曲(カノン)カナ
肉厚ノ唇ノヤウナル菓子イロイロ
奴婢斬レバ斬ルダケ增エテ酒ヲ呑ム
鵙鳴クヤ時計塔ニモ肉詰マリ
液ノ警部ノ聲通ルナリ銀杯ヨリ
全員假面ノ鑑識係ノ亂癡氣騷ギ
海流ヤ首ヲランプトシテ掲ゲ
口笛ハ無人ノ渚漂ヘリ
探偵ニ廢船ノ蟲呟キアフ
取リ落トス杯彈ミ終ヘタル死
郊外ノ野ニ被害者ノ羽根ヲ拾フ
霧モ蛾モ贋物バルコニーデノ密談
バルコニーノ椰子ニ刑事ガ卷キ込マレ
論據ノヒトツニ院長ノ尾ノ百合ノ藥
軋ミツツ人形タチガ聞ク悲鳴
屋根裏ノ白髮　人形ガ足リヌ
物見高キマネキンタチドノ現場ニモ
積ミ上ゲシ調書殘ラズ羽バタキヲリ
一族會食《鈍器ノヤウナモノ》ヲ想ヒ
晩餐ノ皿ニ各自ノウロボロス
天井裏ノ刀自ハ時々骨牌ニ入ル
遠ツ祖(オヤ)ハ牛ノ頭ヲモツトモイフ
法典ノ裏ニ毒飼フ書庫ヘ蝶
ガラス器ノ竒形ノ胎兒オヨソ百
寢室ニ星屑粘ク揉ミアフヤ
死ヌ前ノ胸郭ヲ霧吹キカヨフ
ツルツルト主殺メテ紐歸ル
廻廊ニ遺體波動説モテ隱ス
兄病ンデ無聊ニ神トナルコトモ
燭臺持チ女裝ノ兄ノ時化ノ入水
別ノ美童半バハ鳥トナツテ死ニキ
髭文字ノ髭繁リツツ死者膨レ
空間ノ裂目ヨリ手ガ垂レ下ガル
誤リテ頭部ニ《オフェーリア》ト名ヅク
依然下界ニ死人ノ頭見ツカラズ
半熟ノ黄身掬ヒツツ頭ノ行方
口サガナキ古代ノ貝ラ床ニ沈ミ
壁割ツテ女教師ノ髮伸ビ出ヅル

肉食ノ階段ナレバ滑リ易シ
食卓ノ枯野ガ鳥ヲ獲ル午餐
嚢ヨリ執事出仕ス球雷ノ如ク
雙子ノ姉妹戯レニ成ル《ウロボロス》
肖像ノ無道代々黄變ス
複眼ノ廢帝牢ニ柘榴啖フ
廊下ノ牛ガ脳中深ク迷ヒ込ム
地下温ク眼球遊ブ湖ガアリ
椿剪ル未ダ死ナヌ者數ヘツツ
角一對英國式ノ庭ニ撒ク
器官ナキ遺體ト名乗ル人來タリ
首モゲテ陶製ノ母鳩ニ喰ハレ
毀サレルタメノ美童ニ降ル光
被疑者ドモ名指シアツテハカム遊ビ
カミアツテ螺旋ニ透ケル生者死者
名推理ノ如ク次々皿現レ
皿皿皿皿血皿皿皿皿
鏡ヨリ見知ラヌ我ノ迫リ來ル
手足百二百三百月一ツ
渦卷イテ館燒ケソム頭ノ内外
八重咲キノ婦人ヲ名指シ探偵ハ
名指サレタ婦人ハ紀元前カラ難所デアツタ
犯人ヲ染ミ出ズ蜜ト藥無量
大團圓　魂紛レミンナ緞帳
ヲリモセヌモロモロノ死兒沈ミユク
不眠ノ皆ガ毛深キ瓶ニ靈ヲ插ス
死ンデナホ性トイフ修羅止マザリキ
卵生ノ僧ハ世界ノ裏デ嘔フ
生マレテハ毀レテ肉ガ歌ヲ詠ム
魂トイフノモ寄生蟲デアラウ

○齋藤愼爾奨励賞

宮城県　佐藤成之

手に負えぬ春の闇からインド人
ダイス振る春の体積はかるごと
青春のまっただなかのレタスかな
掃除機で吸いとる空よ修司の忌
紫陽花にまだ未使用の恋がある
耳鳴が集まってくる海の家
魂をむき出しトウモロコシを食う
棒立ちのままの八月十五日
夕焼が見たくて放火したという
極彩の日本が発火する晩夏
蜩の後がつかえている対岸
空前のエクスタシーの曼珠沙華
液体になるまでいだ抱き合う良夜
鬼灯の熟れて故郷が見つからぬ
抜殻のような空あり摂津の死
まばたきを忘れて冬の星になる
顕微鏡覗けば冬の星座の巣
冬苺とは星雲の舌ざわり
凍蝶は星を殺めるため生きる
希望的観測オリオン座のあたり
春はあけぼのピリオドのみのメール打つ
春の雲どすんと象が落ちてくる
春の波集まってくる膝頭
かたつむり時間の継目をこぼれ落つ
なぞなぞはおわらぬげじげじむかでけら
希薄的夏乱反射的微笑
夕焼の不足している鳥瞰図
過去はもう忘れましたと貝釦

振り絞る勇気の色よ夏野菜
日めくりの青空誰もいない夏
白桃に羽が生えたり恋すれば
捨石となれよ銀河はまだ熱い
流星は家出少年にはあらず
名月の沸騰点へ石を積む
白骨と化すまで月光を拾う
くしゃみしたはずみのような昨日今日
ワタクシノ空気入替去年今年
恋をしただけ梟のねじを巻く
唐突に恋の転がる春の丘
陽炎はいま恋人になるところ
春の海涙は片目ずつ溢る
雨上がる薔薇の血抜きも終えしころ
さくらんぼ余る未生の姉がいて
爪痕を残さず消える虹なのか
海月透くようにいき呼吸する未青年
黒板を飛び出す飛行機雲の夏
蝉の貌壊れ始める児童館
朝顔が歌詞を忘れて咲いている
海の字より母を連れ出す晩夏かな
空白の夜を転がる桃であり
枕辺に積む月光という遺産
国境を越えて愚かな木の実降る
冬日とは緩やかなる忘却線
ザラ紙に父の昭和が暮れ残る
チューブより絞りたてなる初景色
白鳥の向きを変えれば理想郷
海の本立ち読みをする実朝忌
青空を裾からめくる春の波
象潟は恨むがごとく水温む
藤棚に夜の動悸のあふれおり

来世あり交流中の新樹あり
夏草の軋みが陸奥の闇を生む
光陰矢のごとし子子沸騰す
淋しいといえず赤眼となりし蝿
蛍袋今度はどの子盗ろうかな
蛇衣を脱ぐ身に余る夢を見て
性愛の一部始終の蝉時雨
八月の空あり海と縫い合わす
今は昔月の山より泣き崩れ
かあさんはぼくのぬけがらななかまど
あたふたと夕日溺れる紅葉谷
来世へとはみ出している大海鼠
諸肌を脱ぎたるごとき初山河
煮凝りて彼の世の闇を呼び覚ます
雪暗の女陰・涅槃図・子守唄
阿弓流為の空に風花上書きす
またの名は悪路王なり落椿
エロスあり一筆書きの土筆ほど
天と地のへし合い邪馬台国の春
春の虹サンドイッチを飛び出せり
春色の備品のひとつオムライス
クローバが鬱の字ほどに込み合える
たんぽぽの寝息が漏れる絵本かな
青空ノゴキゲンヲ聞ク糸電話
六月の雨を惑わす筆記体
きみの手の中で羽化する夏の王
夏蝶はこれから影になるところ
噴水の未完成なる叫びかな
夕焼を見るより浴びて立ち尽くす
世紀末的完熟ノ大西日
月冴える千のナイフを花束に
月光のアンモナイトを巻き戻す

蜘蛛の囲は風の路線図海光る
水汲みに父は銀河へ行ったきり
底無シノ秋晴深呼吸即死
木枯しのままでホームを転げ落つ
讃美歌の埋めきれない冬星座
極月の月の寝袋あり孤島
淋しさのこす擦れ合うとき雪は降り
寒林にあり永遠の忘れもの

○対馬康子奨励賞

福井県　松原藍夏

蓮の花すべる分泌液の池
秋風の吐息真白の布汚す
融けてゆく蝿を愛して春を待つ
沈丁花泡の卵に火を点す
金木犀喉を塞いでいる静寂（しじま）
片足を失くしてもなお百日紅
藤の花山積みになる収容所
切り取りし桜のからだ血を流す
指切りをしよう燕は帰らない
極楽で身を焼いているのは銀杏
炎天下眼よりも紅い紅い腐臭
差し伸べたその手で千切る鼠の尾
ほおずきを喉に隠して独りきり
秋雨に滲んで二度とは読めぬ文（ふみ）
紅葉が染みて窒息するバケツ
きりきりと痛む胎児よ朧月
鈍色を舌で転がす彼岸かな
牡丹雪動悸息切れ眩暈など
柳より滴る緑泣き通し
溜め息の果てに十五夜お月さま
熟れ過ぎた太陽の色乳腐る
群青の月が溢れる胃に椿
千代紙を汚して融けるさくらんぼ
麦秋を泳いで白い水を飲む
二つ目は殺さずにおこう紅柘榴
我々の寂しい夜明けに百合を焼く
栗の香に胸破られて血を孕む
追いつけぬ菖蒲の空よ爪を剥ぐ
粉雪の空に赤い花ひいふうみい
灰色に光るナイフの背の鱗
くすぶった灰を飲み込むほととぎす
肺病みの黒目にペンキの鰯雲
お終いに野良猫子猫蝉の羽
引き出しに仕舞ったなりの春の風
傾いた夏を引き留められぬ雲
半熟の満月を受ける秋の海
次に来る季節の匂いに泣く晩夏
降り積もる乾いた砂かと秋の雨
干乾びた向日葵の中生き残り
豪雪に美しい黒枠の葉書
逃げ道に敷きつめられている桜
蝉ひとつ毟るつもりのないからだ
捕らえたと思い違いし薄の穂
空隠し忍び笑いの闇さくら
濡れ鴉足元に散る血は椿
嘘ばかり連ねて寝かす麦畑
春の宵掴んでは放す魚の尾
指先に唐橘が染みている
生きようと思い直して雪を食う

宵の月一途に昇ってゆく水仙
焦げ臭い髪に寄り添う天の河
彼の香を体内に残している九月
あの青は何と言う名か揚げひばり
芥子の花からだに溢れる生誕日
ひょひょと椿を呼んで鳴く廊下
幼子と同じ記憶の白い梅
草苺涙の雫も赤くなる
夜が白む湿った皮膚で蜜柑狩り
左耳に地鳴りを抱えている泥鰌
赤子から絶望を教わる蝉の声
秋深しとろとろと流れる静脈
死にかけた眼に映るストーブの薬缶
臍の緒を虫だと告げられ吐く五月
書き方の手本を破るもみぢ降る
白昼夢流れ出る汗蝉時雨
空腹のちょちょ千鳥雲を食む
夜が明ける溺れてしまいたい櫻貝
さよならのもみぢ囁く君だけと
びりびりの雪見障子と猫と寝る
恍惚に窒息寸前の花吹雪
夢を見た枕に残る春の爪
ガソリンの味の晩餐もう二月
来た道を戻れないまませりなずな
雁が音や滲んで見えぬ万華鏡
東の間の朝粥の中に冷たい秋気
明け鴉泣いて集める銀杏の葉
振り返る鴎の声を聞かぬ海
他人とは関わりあえぬ九月かな
故郷など忘れてしまったと云う燕
紫煙とは本当なのだと気付く秋
臍の緒を舐めて過ぎ行く彼岸かな

夜汽車から見ている眩しい夢の菊
水仙に毛穴塞がれ見る浄土
恍惚の中にひとひら牡丹雪
憧れは遠くに残る秋雨の夜
堕とされた小鳥の眼には入道雲
死んでいる魚の鱗から枯葉
白薔薇に身を任せようマッチ擦る
冷たいと思うのは勝手雪積もる
胸に嵐吐いて飛び散る曼珠沙華
八重桜動けず這い回る夕べ
秋雨や自らの重さに不具になる
死にたいと梅桃桜数え唄
灯籠が沈んで安堵する彼岸
北風に骨の欠片の置き土産
思い出のあけびが黒ずむ夜明け前
味噌汁の中でふやけている睡蓮
春の野に一陣の風雲帰る
諦めて火傷の指を噛む楓
帰れずに息を吐き出し踏む時雨

○坪内稔典奨励賞

東京都　神野紗希

起立礼着席青葉風過ぎた
魚類図鑑伏せたるままに薄暑かな
弓道場翳りて桐の花高し
葉桜のサイドミラーのさようなら
青蔦や第二理科室星の地図
常盤木落葉今なら水面歩けそう

麦の秋こんな隅っこにまで風
麦熟れ星お面のようなお面売り
バスにひとり降りてもひとり蛍の夜
黒人のそっと開きし手に蛍
夏暁のクレタの壷に丸き艶
昇りたての月の色した熱帯魚
虹ほどの言葉は見つからぬだろう
不等式解けず夏木立の中へ
直線を引けぬものさし桜桃忌
カラコルム産のラムネと言われけり
菩提樹の花や永世中立国
ゆすらうめ姿勢の悪い警察官
百合の花左臀部に青き痣
ゆるやかに海月の剥けてゆく真昼
青梅雨や日本語構造論概論
水音のする方に君合歓の花
天井のしみ顔となる半夏生
百日紅眉毛の太き犬と会う
座布団をはたき差し出す星祭
首のない男とつつくオクラかな
新宿や歩幅大きく鵙外忌
夕立の匂いの洋書貰いけり
熱帯夜アルファベットマカロニのQ
バナナ剥く日付変更線赤し
革靴を汚して万緑を出で来
追伸に本題を書く暑中見舞
独り言増えて青紫蘇ドレッシング
玄関に見たことのなき白日傘
白玉や言わねばならぬことひとつ
地下鉄の駅に飼わるる鰻かな
風鈴の買われようとはしておらず
こんなにも着崩し金魚掬いけり

また一人降り短夜の都営バス
雲の峰高架下には秘密基地
泉より上がりし踝の白さ
ひきだしに海を映さぬサングラス
短夜のBARゴーギャンというお酒
星涼しバス揺れるたび触れる肩
黒南風や柵の向こうに夜の海
ごめんねの夜より青い水中花
教室の隅にビー玉晩夏光
カンバスの余白八月十五日
プリントを抱えひぐらしの廊下
朝顔の実やペディキュアは海の色
頬っぺたをひっぱたかれて天高し
からっぽと言いからっぽになる九月
ドライブの帰りは無言つくつくし
重陽や水底に金色の鍵
秋潮の香に車椅子湿りけり
草の花閉まりの悪い用具入れ
青蜜柑困ったように差し出せり
杏ちゃんの黒いマニキュア小鳥来る
曼珠沙華を失くしたような顔をして
咽頭の腫れおり野菊咲いており
水澄むや宇宙の底にいる私
数えてはならぬ花野の遺留品
田んぼには昼の足跡夕月夜
月代や机上に広げたる海図
マウンドにピッチャー一人無月かな
寝待月素振りの音の始まりぬ
呻きとも月明りとも言い切れず
独房の夜流れ星海に落つ
旋律のごとくに柘榴裂けにけり
独白や菊人形の下睫

夕顔の実や耳たぶの熱くあり
長き夜の都庁から見るヘリポート
牛膝学校やめてそれっきり
左官屋に虎の入れ墨花カンナ
鬼灯や出来ぬ約束してしまう
中華街にて枸杞の実を拾いけり
月明の昆虫標本を抱く
真実の口に触れ来し秋の蝶
海に礼桜紅葉の艇庫から
寂しいと言い私を蔦にせよ
蓑虫になる思い出になる前に
お帰り放送ひんやりとリノリウム
鈍行の窓ぎいと上げ冬隣
戦わずして傷を得し小春かな
教室の冬日の匂い残る窓
目を閉じてまつげの冷たさに気付く
弟の隠し持ちたる鮫のヒレ
厳寒の瞳に海を持っている
波音を忘れぬままに初日記
初夢に出て来ないでと言ったのに
冴ゆる眼にこのまま捕まっていよう
ネット裏手袋の手をぎゅっと組む
頑張れと言いたくて言えなくて雪
溜息さえ白くてどうすれば良いの
白鳥の首のカアブを真似てみよ
砂浜にハングルの壜冬の雷
マフラーを巻いて海鳴り封じ込む
人は皆冬の月への窓を持つ
乾杯が素直に言えて風花舞う
黒板にDo your bestぼたん雪

芝不器男俳句新人賞　公開審査会

と　き：平成14年11月30日　午後1時～4時20分
ところ：愛媛県県民文化会館　第六会議室

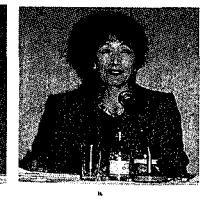
選考委員

大石　悦子（司会）
京都府舞鶴市生まれ。1954年、作句を始める。「鶴」入会。石田波郷・石塚友二・星野麥丘人に師事。昭和55年度「鶴」俳句賞。第30回角川俳句賞、第10回俳人協会新人賞を受ける。現在、「鶴」同人。俳人協会幹事・日本文芸家協会会員。句集に『群萌』『聞香』『百花』がある。

城戸　朱理
岩手県盛岡市生まれ。20歳で『ユリイカ』新鋭詩人に選ばれる。同人誌「洗濯船」に参加。詩集に『召喚』『非鉄』『不来方抄』（歴程新鋭賞）『現代詩文庫―城戸朱理詩集』『夷秋―バルバロイ』『千の名前』、詩論に『討議戦後詩』、翻訳に『パウンド詩集』（98年・思潮社）がある。詩・詩論・翻訳のみならず、批評・エッセイ・書評と幅広く活動を展開し、日本現代詩の新世代を主導している。

齋藤　愼爾
京城（現ソウル市）生まれ。深夜叢書社代表、俳人。高校時代に句作を開始、「氷海」主宰の秋元不死男に師事。氷海賞を受ける。1963年深夜叢書社を設立。出版・編集のかたわら、評論、随筆、小説などを執筆。一時中断後、1983年に句作を再開。著書に句集『夏への扉』『秋庭歌』『冬の智慧』『春の羇旅』、随筆『生と死の歳時記』（共著）、『偏愛的名曲辞典』ほか多数。

対馬　康子
香川県高松市生まれ。学生時代に「麦」を主宰する中島斌雄に師事。1984年「麦」作家賞。1990年有馬朗人主宰による「天為」に創刊とともに参加。1994年より朝日新聞国際衛星版「アジア俳壇」選者。「麦」同人、「天為」同人・編集長。句集に『愛国』『純情』、アンソロジー『現代俳句の新鋭』ほか。



坪内　稔典

愛媛県西宇和郡生まれる。高校時代に句作を始め、大学在学中に全国学生俳句連盟を結成。「日時計」「黄金海岸」などの同人活動の後、『現代俳句』を責任編集。1986年個人誌「船団」を編集発行、現在俳句グループ「船団の会」代表。句集に『朝の岸』『落花落日』『百年の家』、評論集に『俳句のユーモア』『子規山脈』『子規のココア・漱石のカステラ』ほか多数。京都教育大学を経て、現在佛教大学教授。

※坪内委員は、公開審査会当日、体調を崩されて欠席されました。ただし、選考に関わる意見は電話にて若干の聞き取りを行い、審査会では当賞の参与である西村我尼吾氏が披露しました。

■予備選考通過者一覧

応募者氏名は選考委員に秘匿としたため、応募作品に番号を付与し、公開審査会・予備選考会ともに、番号によって議論しました。

以下の方が予備選考通過者であり、公開審査会において議論された作品番号の著者です。

作品番号	応募者名	都道府県名	作品番号	応募者名	都道府県名
3	金田みずほ	長野県	65	大屋多詠子	千葉県
12	掛井広通	静岡県	70	足田久夢	神奈川県
13	島本知子	兵庫県	73	森川大和	茨城県
22	杉山久子	山口県	74	関　悦史	東京都
30	大曽根葉子	千葉県	80	片岡秀樹	千葉県
32	松原藍夏	福井県	82	山岸竜治	千葉県
33	小倉喜郎	兵庫県	88	明隅礼子	マレーシア
35	齋藤朝比古	東京都	90	相原しゅん	愛媛県
40	塩見恵介	兵庫県	98	如月真菜	東京都
42	中村阿昼	愛媛県	99	秋山　夢	神奈川県
43	加藤水野	愛媛県	108	高井一彰	神奈川県
46	篠原俊博	神奈川県	112	中村ふみ	京都府
52	大桃艪人	石川県	115	冨田拓也	大阪府
53	三木正美	岡山県	125	佐藤成之	宮城県
60	神野紗希	東京都	127	津田このみ	兵庫県
64	小田涼子	兵庫県			

立っているのは、坪内稔典奨励賞の神野紗希さん

▼**大石**　大石悦子です。満場一致で司会に決まったということですが、最年長ということで仰せつかりました。慣れておりませんけれども、一生懸命やりますのでどうぞよろしくお願いいたします。

今日の愛媛新聞の「季のうた」に、芝不器男の「**凩や倒れざまにも三つ星座**」という句について村上護先生がお書きになっておりまして、今日の審査会をちゃんとやれよと芝不器男さんがおっしゃっているような気持ちになって、ちょっと緊張しております。

お手元の資料番号順に、まず予備選考を通過しました作品を、各委員から選考の弁を発表していただきます。まず作品番号3番について、城戸さんよろしくお願いします。

▼**城戸**　手元の資料だと25歳の方になっていますが、最初に見た段階ではそういうことを存じあげませんでした。例えば「**曖昧な人と食べている白玉**」。白玉というものは、まるで表面張力で一つの球状をなしているような、くっきりとした姿を示しますが、それを何か煮え切らない曖昧な人と食べている。この何か異質な状況を突き合わせている様が、清新なフレッシュな感覚の中で17音の中に盛り込んでいるというのが全体的な印象です。また「**本当は悪い奴です雪うさぎ**」という句も、同じような感覚があるかもしれません。

不器男というのは本名だそうですね。器ではないというは、論語の「君子は器ならず」から取ったと聞きました。孔子が最高の理想とした君子というものが器ではない。器ではないというのはどういうことかといいますと、中国の易経に「形而上はこれを道と言い、形而下はこれ器と言う」という一節があります。したがって何か形がなくて捉え難いもの、それは道であり、形があって我々が手に触れることができるもの、それを器と呼ぶと中国では考えていた。これはギリシアから始まる形而上学あるいは形而上、形而下という区分とは別に、東洋にも同じような思想があったということだと思います。「君子は器ならず」というのは、何かの容れ物で留まってはいけないという意味ですから、この芝不器男の名前を冠した新人賞というのものは、器に留まらないような方に選考の結果が落ちつけばいいと思います。

この3番の方は、新鮮な感覚をどう盛り込むかという点では注目しましたが、やや定型的、内容の新しさが恋愛をモチーフにしているものが目についたという印象でした。

▼**大石**　12番の方の「**春帽子置けば羽音がするだろう**」という句。それから「**さくら咲く空よりファールボールかな**」という句の非常に感覚の柔軟な、初々しいところを、新人賞にふさわしいと思って、戴きました。年齢表を見ますと、年齢制限ぎりぎりの39歳の方だったのですが、若い感覚をお持ちの方です。

それから、「**草笛を吹く少年に近づきぬ**」。もしこれが女性の作家だったら、少年に対する母性というよりも、もう少し女っぽい感覚というものがこの句に溢れているのではないか。そういうところを大変好ましいといいますか、親しい思いで戴きました。

「**観覧車夜空の泉汲んできし**」。これは最近、遊園地に大きな観覧車ができて、観覧車を詠った俳句というのがわりとたくさん寄せられますが、多くは高いところから何を見たとか、そこから見える景色を歌っている句が多いんです。しかし、「夜空の泉汲んできし」というところが素晴らしい。

さらに、気にいった句を挙げておきますと、「**白毛布わが体温に目覚めをり**」。毛布の中で眠る安らぎといいますか、

気がつけば自分の体温なんだけれども、安らかな思いとして冬の夜を眠っている。初々しい感覚かと思います。最後にもう一つ。「**物語のはじめの雪の降ってきし**」。私の好きな世界なので、一も二もなくこの句を戴きました。

▼**西村**　坪内先生からご意見をいただいておりますので、ご意見をご紹介させていただきたいと思います。

12番につきまして、本日直前でございますが、いろいろご考えの上、この12番の作品も、是非とも自分としてはいい作品であったというふうにお伝え願いたいということでございます。個別の句に関しましては情報がございません。

▼**大石**　13番に入りたいと思います。

▼**城戸**　例えば「**七月のワックスかけたような街**」。あるいは「**ポスターの右上垂れている酷暑**」。具体的な事物と暑さの感覚というものが、具体的なものや事象によって暑さが形象化されている…そのあたりに注目しました。

▼**対馬**　ちょっと戻っていいですか。3番と12番にもう一度戻ります。昨日の夜、不器男句文集というのを開いてみて、20代で亡くなった不器男というのは、決して未完成でなかったというのを改めて認識しました。やはり、某かの完成度というか、未完成の中の完成度を欲しいなと思います。

3番は、一度読んだ時に凄くいいなと思った候補に挙がっていまして、最初の3～5句あたりまで詩的でググッと来るものがありました。読み進めていくと、俳句らしいものが現れてきて、この人は余り言葉に溺れないで、俳句らしさが加わった方がいいのではと思っていました。逆のことが12番で、12番の人は余りにも俳句らしいので、逆に詩的なものが入ったものの方がいいのがあると思いました。

12番だと「**空蟬の夜は降る星に紛れゐる**」。ちょっと抽象的ですけれども。「**さくら咲く空よりファールボールかな**」は確かに私もチェックしましたが、これは10代の句で十分と思いました。「**物語のはじめの雪の降ってきし**」は私もいいと思います。こういう感覚と具象性のバランス、自分はどっちに傾いているから、ちょっとブレーキを掛けたぐらいの方が良い句が生まれるのかなということを感じますけれども、如何でしょうか。

▼**大石**　確かにおっしゃるとおりだと思います。それと12番は「**空蟬の夜は降る星に紛れゐる**」と、星だとか宇宙だとか天体を詠んだ句がとても多かったので、それも引かれた理由の一つとして挙げておきたいと思います。

次に22番。これは「光」というタイトルが付いておりますが、これは齋藤さんからお願いします。

▼**齋藤**　22番は幾つか感心した句があります。一つは「**おおぞらのどこにもふれず鳥帰る**」。田村隆一に、自分達の空は今時代の漂流物で一杯だ、鳥が一羽巣に帰るのも我々の苦い心を通らねばならない…というのがあります。そういう詩を思わせるというか、「大空のどこにもふれず」という感覚は新しいんじゃないかと思うんです。

▼**対馬**　第一印象で、この人は詩的なものを自分の中に持っているなという気がしましたけれども、この「**おおぞらのどこにもふれず鳥帰る**」というのは言い古されてないですか。

▼**齋藤**　余り俳句ではこういうのを見ません。例えば、囀りだとか鳥なんかの群がっていることを詠んでも、「おおぞらのどこにもふれず」という言い方はしないんじゃないかなあ。それと「**うぐひすや少年の舌ざらざらす**」。

▼**対馬**　これは私もとりました。

▼**齋藤**　永田耕衣に「**鶯と父の葉書の荒々しさ**」というのが確かありますよね。よくまとまっていると思うんですが。

▼**西村**　本編につきましても先程と全く同じ状況でございまして、坪内先生はこの作品全体について、今日高い評価を下しております。ただ中身、句のどれというのは情報が届いておりません。

▼**大石**　次に30番の句でございますが、これは9番から29番あたりまで鬼が出てくるんですね。それもずっと「一月の」とか「節分の豆」「三月の鬼は」というふうに月を追う形で鬼がテーマになって詠われております。これは、今日お休みの坪内先生の甘納豆の句などを思い出して、それのパロディかなと思って、でもパロディにしては少しうまくいかなかったのかなという感じはしました。やってみたいパターンをここで俳句に詠んでみられたという果敢な態度をチェックいたしました。後半になりますと無季の句が凄く多くなっておりまして、私は有季定型の立場におりますので、ちょっとこれを押すのはやばいかなあという感じはいたしました。

しかし、そういうことを外れて全体に面白いというか、目新しいというか、少し表現は乱暴だけれども、その人のやる気のようなものが見えてきてチェックしたわけでございます。

▼**対馬**　この30番は、素材に関して言えば、現代を掴もうとしている試みに対して、その意欲を買いました。ただ、ちょっと観念的なのと未完成なのとが混在している。

▼**大石**　詠み方が荒いというところが未完成感というのでしょうか。

▼**対馬**　現代の素材をいい句にするというのは難しいですね。

▼**大石**　本当に難しいですね。どうしても型がありますから、そこのところを新しくしようと思うと、素材にまず目についたりすると思うんですが、素材の方ばかりにいくとなかなか本当に言いたいことというのが言えなかったりという。

▼**対馬**　俳句は、そのものに含まれた全体というか、時間の集約みたいなのがあるので、現代のものというのはやっぱり時間の集約が出来てないので、非常に伝わりにくいんじゃないかなと思いますよね。

▼**大石**　そうですね。だからパッと見たところ「**似たような駅ばかりなり銀座線**」というのがあって、確かによく分かりますが、どこに詩があるのかなというふうな気もします。

それでは32番は対馬さんにご発言をいただきます。

▼**対馬**　32番は私が推しています。この150人近い人の百句を読んで、誰を選ぼうかと構えて読みますので、自然体のただうまい俳句とか俳句らしい俳句というのはどうしても退けてしまうというのが辛いところでした。しかし、自然とそうなってしまうんですね。今まで見たこともないものを見たいという欲求で選んでいくため、なるべく自分の気持ちに正直なように選んだ中の一つです。

「**藤の花山積みになる収容所**」とか「**指切りをしよう燕は帰らない**」、「**紅葉が染みて窒息するバケツ**」にしても、何か気持ちが凄く逼塞しているというか、この人は25歳でまだ若い。そのやり切れなさとやる気が拮抗しているというところを感じました。何か訴えたいものがうまく表現できていると私は思いました。例えば「**ガソリンの味の晩餐もう二月**」とか、わりと意表を突くようなのもあったりして。

ただ百句というのは非常に難しくて、どの人もそうですが、百句が百句全部揃っているというのは非常にしんどくて、この人にも確かに未完成のがあります。しかし、まだ粗削りなところもかえっていいなと思いました。

▼**城戸**　先程の30番と比較した時に、粗削りという点では似たようなところがありますよね。30番の方がいわゆる詩的なものがもうどこにあるのかという戸惑いの中での作品だとすると、こちらはその戸惑い自体が主題になっているので、もっと具体性を帯びているというか。例えば収容所というふうな言葉が、どういうリアリティを持つのかが私にはちょっと分からないんですが。

▼**対馬**　そうですね。25歳で収容所なんて本当に経験しているとはとても思えないですが、例えばこれが25歳でない句だと思って、この句だけ出された場合でも、私はいいかなあと思ったんですよ。どうですか。何か説明しようがないな。山積みになるというのが死体の山を連想させるというのもありますけれども。

▼**齋藤**　30番では2句感心しているんですよね。それは彼岸と此岸を歌っているのね。「**大ぼうたんは十億年の彼岸かな**」。大きな牡丹というのは不思議な花ですが、それによってまさしく十億年の彼岸というようなことを考えさせられます。「**少年を川面に映し此岸とす**」というのは、「川面に映し」だからヒヤシンスのナルシスの伝説を皆思いますが、その少年というかナルシス、自己愛。自分の姿を川面に映しているのが、それがこの世の此岸なんだというとらえ方。此岸と彼岸のとらえ方というので、この二つを僕はマークしています。

32番は、記憶と夢うつつという二つに引かれています。「**幼子と同じ記憶の白い梅**」。なかなかこういうふうに詠めないよね。本当に梅というものの本質に迫っている感じがするんですよ。これも本当に白い梅を見たか見ないか分からないような曖昧を持っているけれども、それを幼子と同じ記憶のと持ってくるわけですね。こういうことを詠んだので、この作品では成功しているんじゃないかと思うんです。それから「**夢を見た枕に残る春の爪**」。これはわりかし技巧的だし。ちょっといいんじゃないですか、この辺の感覚というのは。

▼**城戸**　春の爪がいいですね。

▼**対馬**　気がつきませんでしたけれども、いいと思います。それから十億年の牡丹もいいなと思います。ただ、この4句とも好きだと思いますね。とても受け入れられないという人も、この中にたくさんいらっしゃるんじゃないかと思います。少年とか白い記憶とか来ただけでもう拒否。言い古されていると言えば、言い古されている言葉ではあるかなという気がします。

▼**城戸**　30番「**昼顔は昼のまほろば団地妻**」という句がありまして、昼顔というと勿論花を連想するところもありますが、ケッセルに「昼顔」という作品がありましてカトリーヌ・ドヌーブ主演で映画化もされています。身を持ち崩していく人妻の物語ですね。結句が団地妻ですから、これはかつての日活の十八番みたいな世界で、何か思いがけない違うものを読み手に連想させてしまうことというのが17音だとあります。

作者の意図と違う世界を、読んでいる側が勝手に思い浮かべるということも当然あるわけで、あらかじめ拒否してしまう方がいろんな場面でいるということがあり得ると思うんですよ。だから、これだけ皆さん選ぶものが違うというのが、いわゆる現代の自由詩を書いている立場からしてみると非常に面白いところで、俳句をやられている方なら有季定型という立場の方とそうじゃない方の対立はあっても、もうちょっと何かダブるものかと思ったんですけれども。

▼**対馬**　全然違いますよね。同じ有季定型を基本としていても。

▼**城戸**　その分だけ、これから混戦するんじゃないかと思っているんですけれども。

▼**大石**　この場がですか。（笑）では気を確かに先に参ります。

確かに見たところを詠んで非常に味の深い句ができる場合もありますけれども、重層するところを読んで、そこのところを読み取っていく面白さというのをもっと持ちたいというふうに思うんですけれども、団地妻だとちょっと……。（笑）

▼**対馬**　どなたか忘れましたけれども、イメージを重層さす句がいい句だとどなたかおっしゃっていた記憶もありますが。

▼**城戸**　エズラ パウンドが荒木田守武の「**落花枝にかへると見れば胡蝶かな**」という句を分析して、これは落ちていく花びらというのと、舞っている蝶々というイメージの重層化によって成り立っている「スーパーポジション」という言い方をしています。それが20世紀のイギリスで、イマジズムと言われる前衛運動が生まれるきっかけになったんですね。

次は33番ですか。

▼**西村**　33番の「**蜃気楼グラスに水を注ぎ足して**」「**立冬の青空立冬のボールペン**」「**魚屋に脚立などあり夕薄暑**」の三句を推奨句として挙げられております。

▼**対馬**　この三句に関しては正直なところ余りいいと思いませんが、ほかにチェックした中では、例えば「**夏の蝶バケツばかりに集まって**」「**夏の雲他人のたんす運んでいる**」「**花束を持たされている冬の星**」という方は私好みで選びました。この人も、表現の仕方がまだ未完成かなという気がしますが。

▼**城戸**　坪内さんが選んだのは僕も賛成しかねるんだけど、僕がチェックしたのは「**蝉生まれ廊下が少し長くなり**」。

▼**対馬**　これもいいですね。

▼**齋藤**　いいですね。

▼**城戸**　僕はこれだけです。

▼**対馬**　ただ廊下というのも、名句でいっぱい素材になっていますが、でもいい句ですよね。

▼**大石**　私も戴いておりますが、非常に俗と言ったらいけない言い方かもしれませんけれども、余りにも日常的なところが少々読んでいて煩わしいというふうに思いました。ちょっと類型的なというか、そういう印象を持ちました。

35番へ行きます。齋藤さんは如何ですか。

▼**齋藤**　僕は35番では「**いなびかり森が大きくなってゐる**」「**鶏頭の深きくれなゐ飛べぬ色**」「**極月の母や光りしもの並べ**」「**凍蝶の水を拒みし形かな**」「**山にゐて山を見てゐる暮春かな**」。「**いなびかり森が大きくなってゐる**」というのは、非常に素朴な捉え方なんですが。この中で一番複雑なのは最後の句です。「**山にゐて山を見てゐる暮春かな**」というのはちょっと面白いと思います。

▼**大石**　城戸さんはこの句はお取りになっていますか。

▼**城戸**　取ってないですね。「**いなびかり森が大きくなってゐる**」は取っていますが、意外と齋藤さんとはダブってなですね。大抵そうなんですけれども。

今、見直してみると、前の段階で何で自分がこちらを選んでこちらを選ばなかったのか分からなくなるところもあります。例えば「**玉虫の死が仕舞はれてをりにけり**」では、即物的に生命と死というものが物質の中に、玉虫の中に、一体

になって仕舞われた感覚がありまして惹かれました。先ほどの「**いなびかり森が大きくなってゐる**」も単純と言えば単純。稲光によって森が照らされる。そのことによって森の全体像が見える。それを大きくなっていると表現したところが要だと思います。そういう具体的な事物というものに、いつも手を付けている感覚が、この35番の方の特徴です。百句全体が、そういった姿勢で貫かれているところが魅力だったのではないか。例えば「**鮟鱇の曲線濡れてゐたりけり**」。これも単純と言えば単純です。鮟鱇が当然食べられるために吊るされているのでしょう。事物というものが、この作者の目から常に触るように見られている感じが私にとっては魅力的に映りました。

▼**大石**　私も「**いなびかり森が大きくなってゐる**」という、この稲光をどう描くかということを考えた時に、森を持ってきてこういうふうに歌う。その驚きが句の裏にある。その驚きというのに読者も共鳴する、共感する。こういう作り方が、この方の好ましいところではないかと思います。「**玉虫の死が仕舞はれてをりにけり**」では、玉虫の死というものをどう捉えるか。それが大切に仕舞われている。さっき城戸さんがおっしゃった命の描き方ということになるかと思うのですが、こういうところは大変うまい人だと思うんですね。お上手だと思いました。

もう一つ好きだったのが「**虫の夜万力すこしづつ締める**」。秋の夜の過ごし方というのでしょうか、それが例えとして万力、実際にこの万力という道具を使っているのでしょうが、それをこの人の心の有り様を思わせるような形で、このフレーズが大変生きて使われていると思って感心いたしました。私は「**山にゐて山を見てゐる暮春かな**」というのは、この「暮春かな」でこの句の答えが出てしまったような感じがして、ちょっと残念な気がしました。しかし、やっぱりうまい人の句だというふうに35番の作品は思いました。

▼**対馬**　35番は、余りにもうまさがさりげなさ過ぎて、見落としたかなと思っています。読み直してみると、確かにうまい人であるかなと思います。ただ最初の第一印象でどうして見逃したのかなというのを考えますと、何か見逃すべきものがあったのではないかと思います。

▼**大石**　うまくて引っ掛かってこないというのはあります。言葉とか叙法がそう目立たなくて、深い味わいのある句というのは、どうしても知らない間に通り過ぎてしまったりするので。

▼**対馬**　そうですね。13番の「**ちちははが金魚の部屋に座りゐし**」なんていうのもチェックしています。1番の句もいいですね。

▼**大石**　この13番の句っていいですよね。

▼**城戸**　一番は「**冷蔵庫開けゐて海のこと想う**」ですね。その二つは私もチェックしています。

▼**大石**　この一番は不思議な句ですね。

▼**城戸**　ただ、齋藤さんが挙げられた「**山にゐて山を見てゐる暮春かな**」について、暮春で結論が出てしまうんじゃないかと大石さんからお話がありましたが、確かに結論が出てしまう感じが全体に強いですね。

▼**対馬**　言い切ってしまっているんですかね。

▼**城戸**　こちらが重層化しているものを探す必要がないほど、暗に何か答えが提示されてしまっていて。

▼**大石**　きっと親切な方なんだと思いますよ。

▼**対馬**　城戸さんがおっしゃった「**鮟鱇の曲線濡れてゐたりけり**」なんて、そう言われればなるほど面白いなと見直しました。

▼**大石**　言われてハッとしたとか、そういう俳句の読み方というのはたくさんあります。

40番の作品に参ります。40番というのは坪内さんがお取りでいらっしゃいます。

▼**西村**　「**木枯らしは船の一族神戸港**」「**弾丸は蜂心臓はチューリップ**」「**いちにちをもたれてすごす春の風邪**」「**梅咲いてお城みたいなお父さん**」「**桜までダリの時計を吊りにゆく**」。以上です。

▼**城戸**　ダリの時計というと、ドロンと半ば溶けかかったような歪んだ時計ですね。最近ああいうデザインのものを本当に売っています。だから知らなければ何かそういった観念を桜まで吊るしにいくということかなと思いますが、売っているのを見ちゃうと、現物を吊るしに行くようなイメージになったりして……。でも正直言いますと、坪内さんが挙げられたものには、余り私自身が面白いなと思ったものはダブっていません。

▼**対馬**　応募作の中で「君は」とか「私は」とかを結構使っている人が多かったですね。たった17文字の中で「私は」と入れられただけで、拒否っていう感じになってしまう。「君」というのもよく10代の人に使われるパターンで、でもこの人は年齢を聞くと31歳なので今更「君」でもないだろうと思いましたけれども。

▼**大石**　「**梅咲いてお城みたいなお父さん**」という句がありますけれども、この方は比喩の句が多かったように思いますね。その次の「**コロッケのような栗鼠いて春の森**」「**さよならも歌うがごとき夏の湯屋**」。比喩の句というのはなかなか難しいと言われていますが。

▼**対馬**　坪内さんがいらっしゃらないので擁護する人がいなくて可哀相な……。

▼**城戸**　71番なんか私はハッとしたんですけれども。

▼**大石**　それは私も丸をしております。いいですね。「**百編の寓話曳きずる鯨かな**」ですね。

▼**城戸**　「『ゐ』**の滅び**『ゑ』**ほろび神戸震災忌**」という句です。79番は、アメリカの作家メルビルが鯨をめぐって長々と記述を費やした「白鯨」という作品が背景にあるのでしょう。71番は、日本の詩が難しいのは欧米の言語に比べて母音というのが貧弱だからだという説を語る方がいまして、母音が減っていくことと神戸の震災を重層化させたところが、詩人の目なんかから見ると面白いんですよ。俳句の世界ではどういうふうに語られるのか見当がつきませんが。坪内さんがいらっしゃらないのはやっぱり問題ですね。

▼**大石**　本当に残念ですけれども。

▼**齋藤**　今の71番は城戸さんみたいなとらえ方だったら面白いんだけれども。「ゐ」と「ゑ」で家でしょう。家が滅びたということ。僕はこういうのは余り好きじゃないけどね。「ゑ」も今使わなくなっちゃっている。言語状況の危機みたいなものを、あなたは今考えたけれども、それとは違うんだよ。

▼**城戸**　これは単純に家という言葉を分割しただけ？

▼**大石**　これは私も？マークを付けて是非伺いたいと思っていた句なので、もし後で作者がお出でになったらという気もいたします。

▼**大石**　次に42番です。「でこぽん」という題が付いておりまして、応募作品の中でタイトルの付いている作品と付いていない作品がありまして、タイトルが付いておりますと、どうしてもそのタイトルになった句を中心に読もうとする気持ちがあります。

この「でこぽん」というのは「**でこぽんを文学論の飛び交へる**」という句です。でこぽんという新しい栽培種のおミカンでしょうか、それを間にして青臭い文学論をみんなが戦わせているという光景かなと思いました。

その他、「**ふるるんと鹿の両耳木下闇**」「**かまきりを放すや猫の丸くなる**」「**へうたんに脳梗塞のはなしかな**」「**団栗にしぶきかかれる水飲場**」と読んでおりましたら、余り深刻ではないんですね。深刻のないところ、むしろナンセンスな句が入っておりまして、それはそれで軽い仕上がりとして、「でこぽん」という題のもとにそういう軽い作品が並んでいて、気楽に読めたというところで、こちらの気が和むような読後感をいただいて、推薦いたしました。

そういう作り方がいいのかどうかというのは別にして、今度の応募作品は、軽やかに歌われている作品が多いような、これは全体の感じでしたけれども、その中の一編かと思います。

▼**齋藤**　この73番もいい俳句ですよね。「**菜の花の茎の冷たき建国日**」。これなんかちゃんと一句完成した作品だと思いますけれども。

▼**対馬**　私が取ったのは「**はなびらをつまむすべすべしてゐたる**」。この人は小さな発見がうまい。

▼**大石**　「**冬の蠅こたつ蒲団を上り詰め**」。これも発見と言えば発見ですけれども、こういうところをじっと見つめることから俳句というのは生まれるんだなあと、そんなことを逆に教えられたような気がいたしましたが。

43番は、対馬さんが推薦でいらっしゃいましたか。

▼**対馬**　43番もどうやって説明していいのか。俳句とはこういうものであらねばならないという無意識なマインドコントロールが、私達みんなあると思うんですけれども、そこから何か逃れようと、超えようとする意思みたいなものを感じる作品もありまして選びました。

稚拙な部分がある句もあるんですけれども、中では「**くつ紐を結んでもらう雲雀かな**」。なんで雲雀が出てくるのか、全く説明の付けようがないのですが、春の野に出て行くために、靴紐を誰かに結んでもらった記憶かもしれないし、のどかな雲雀というのも決してつき過ぎず、でもちゃんとついているという気がしました。

それから「**トロッコの真っさらなころ天高し**」「**歯ブラシの光の春に並び居る**」。何かこの人の句には一生懸命さを感じますね。発見してすらすらっと思いつくまま言葉が出てきたところから、もう一つ違うものを表現しようという意思みたいなのが少し感じられました。

▼**大石**　46番ですが、前半は余り気にならなかったのですが、後半になりましてから凄くチェックしていく句が多くなりました。もしこの作品が、応募規定の中で過去三年間の作品をというお約束があったんですが、もしご自分の製作年代順に沿ってこの一編を創っておられるとしたら、最近作というのがいい感じになってきているのではないか。将来性というのは、なかなか危険はありますが、そういう先のことを楽しみにしたい作品だと思いました。

チェックしました句は「**あの岸へ渡ったきりの虫売よ**」「**蜻蛉にかむせて帽子やはらかし**」。私はどうしても可愛い

句を取ってしまうようなところがあります。それから「**ふところのときどき寒しにはとりよ**」「**馬の息かかるあたりの氷柱かな**」。季語にちょっともたれかかっているような気もしますが、後半が面白かったということをお伝えします。

52番は対馬さん、如何でしょう。

▼**対馬**　この人の第一印象は俳句の心得がある人という印象を受けまして、その分、常套に走っているところもある気がしました。しかし、その中でも「**初夢や柱のかげにまた柱**」とか「**暗室や冬の桜を現像す**」。俳句のうまさで表現しているなと思いました。

▼**城戸**　53番は「うららのらら」というタイトルが付いてますが、別にこのタイトルがさすがに全体のコンテキストを示すはずもないなと思ったら、やはりそうではなくて、一番最初に引かれたのは「**ものさしで直線引いて冬はじまる**」という、ある決然とした感じにまず引かれました。どういう句を書かれる方なんだろうと思って見つめていましたが、「**終楽章めくよ冬野のしづけさは**」とか「**鳥のやうに両手広げてみても枯野**」とか、音楽における終楽章と冬野の静けさというのは、本来はイメージの中でしか重層しないものですが、まるで棒を一本通すように一句一句を提出してきているところが印象深かったですね。

ただ、ところどころで余りにも単純になってしまうこともあります。しかし、例えば「**はるしぐれ京都に上ル下ル入ル**」。これは京都の住所というのは、北に行くのが上る、南下するのが下るという住所表示になっていますけれども、春の雨の中、春時雨というのは逆に今は俳句にするのは難しい言葉だと思いますが、逆に住所表示でもって、それは普段人間同士が道案内をする時でもそういう言い方をしますから、それをそのまま使うことによって、うろうろしているという様子をまさにこれだけで表現して見せたり、非常に現代的な部分が棒のように真っ直ぐに突きつけられてくるような気はしました。

▼**大石**　私は京都に近いところに住まいをしておりますが、確かに通り過ぎてしまっている。春時雨もそこに住んでいればそんなものだろうと思って。そういう近いところにいると見えてこないものもあるのかもしれません。しかし、これは類型があるんじゃないかなと思ったりして……。でも面白い句がたくさんありますね。

▼**西村**　この53番は本日、坪内先生が推薦しておられる作品でもあります。ただ中身は分かりません。

▼**大石**　地名を使った「**備前備中備後美作さくら咲く**」という非常にめでたい句があったりして、地名を読むのも楽しいことだなあということを思わせられた作品でもありました。

▼**齋藤**　みんなが挙げなくて僕が感心したのは「**蟬しぐれ聞いて百年木のまんま**」。それから「**茶が咲いて木綿のやうに伊予ことば**」「**ジャングルジムに四角い冬の空いくつ**」「**文語より口語の気分です春は**」。

▼**城戸**　これも巧みですよね。

▼**齋藤**　それから「**ラジオ回せば木がらしの周波数**」とかね。

▼**城戸**　「**戦前も戦後も兜虫でゐる**」というのは何だろうと一瞬思いました。

▼**大石**　人を食ったような句ですね。いろんな楽しい読みを与えてくれる作品ではなかったかとコメントしておきます。次に60番です。これは、坪内さんの推薦ですが。

▼**西村**　坪内先生が推しておられます。まず「**起立礼着席青葉風過ぎた**」。それから「**葉桜のサイドミラーのさようなら**」「**青蔦や第二理科教室星の地図**」。それからたくさんございますが、8番、9番、12番、15番、21番、22番、26番、48番、52番、64番、71番、73番、75番、97番。以上でございます。

▼**大石**　城戸さんは如何ですか。

▼**城戸**　坪内さんが最初に挙げられた「**起立礼着席青葉風過ぎた**」から始まって、この感覚ですね。「**葉桜のサイドミラーのさようなら**」もそうだと思いますが、一瞬で何か作られた状況から、その中に潜在的に潜んでいる本質みたいなものを素手で掴んでくる非常に優れた感覚の持ち主だというのが印象に残りました。「**白玉や言わねばならぬことひとつ**」なんて、これ白玉の姿と言わねばならぬことが一つと言ったところで、一つの円環構造をポンと作って見せたりして非常に魅力的な作品群だと思います。

▼**対馬**　既発表可ということで、私も俳句甲子園の選者を去年していたもので、この人は最優秀にも選ばれた句も入っていますので記憶があります。ああ、あの子だなというのは分かっていて取りました。確かにまだ10代ですけれども、10代の感覚として認めるという、10代だから認めるというところもあるとは思います。

▼**大石**　全然べたつかない句の作り方ですね。読んでいて一つも厭味がなくて最後まで。１００番に英語が入っておりますけれども、何となく納得して読んでしまったという。読後感の非常に気持ちがいい作品だったと思いました。

▼**対馬**　ご本人も非常に気持ちのいい女の子でした。ただ10代の終わりというのはこんなに爽やかなものでいいんだろうか。10代の終わりというのはもっともっと鬱屈して、自分達のことを考えても人生が嫌になる一番の年代じゃないかなという気はします。

▼**大石**　それは先輩としての感想で、私も、ついそういうことを思ってしまいますが、大変爽やかな作品でした。

次に64番です。これは私が戴きました。この方も多分若い方で、作品全部を見ておりますと、全然気負いのない作品。等身大と言っていいのではないかと思います。「**初刷を手に父戻る深夜かな**」とお父さんのことを詠んでいる。「**藪椿母との距離を少しとり**」というふうに今度は母が出てきます。そういうふうに父がいて、母がいて、そして自分が居るという家庭の中で、自然に日常を気負いなくてらいなく詠んでいる。その良さを戴きました。

一番好きだった句というのは・・一番と言ったらいけませんですね。「**宇治橋の貫いてゐる大暑かな**」「**新しき橋のかかりぬ七五三**」。こういう風景句というのでしょうか。始めに家庭内に取材した句を申しましたけれども、そういう句を作りながら、目がちゃんと外に向かって、きちっとした正統な俳句を作っているところに、この人の将来性を見て戴きました。

よろしいでしょうか。65番に行きます。

▼**対馬**　65番を選んだのは2番とか3番。それからずっと挙げれば6、13、34、37、42、68、99と選びました。この人は26歳ですが、俳句の格というのはあるなという気がします。「**海鳴に征矢の音を聞く大旦**」「**護摩の炎に揺るぎも見えぬ去年今年**」とか、俳句の枠からどう出るかというのは、今後の課題としてまだ残されているかもしれませんけれども、若い中では俳句の形という捉えどころの表現も含めてでき上がっている人だと思いました。

▼**大石**　堂々とした句ですね。
▼**対馬**　そうですね。
▼**齋藤**　印象として面で見ると漢字が多いんですよね。でも一句一句の姿はとてもしっかりしていますね。きりっとしているというか。
▼**対馬**　それをどう評価するかですよね。しっかりしていますよね。
▼**大石**　お若い方ですか。
▼**対馬**　26歳です。26歳にしてはしっかりしている。
▼**大石**　でも26歳にしてはと言うと失礼かもしれませんね。
▼**対馬**　失礼ですよね。芝不器男さんだってもう堂々と……。
▼**大石**　そうですね、本当に。これは褒め言葉ですのでそのようにお聞きくださいませ。

次に70番です。如何でしょう。

▼**対馬**　この人は逆に39歳なのに形はまだまだなんですね。まだまだという言い方は良くなかったですね。別の表現方法というか。でも何かしたいという意欲が感じられるというので選びました。例えば「**残酷なオペラがあった去年今年**」。これはちょっと陳腐かな。あと「**ケネディーの撃ち殺された夏に生まれ**」。これはちょっと映画の題名みたいでいいかなと思って。
▼**齋藤**　映画の題名にはちょっと長くありません？（笑）
▼**対馬**　それから「**朝風呂にキリストの顔浮かびをり**」。やっぱり独自性を自分なりに追求しているところが見られました。「**柔らかい青空を着た秋が来る**」とかね。「**机には手紙のやうな食べ残し**」。やっぱり前に推そうと思ったらその人らしさというのを……。さっきの一つの俳句の形ができているというのもその人らしさですし、こういう抽象性で押してくるのもまたこの人の形なんで、この人は意欲で取りました。
▼**大石**　齋藤さん、この方の作品に、行分けの句が一つあるのですが。こういう試みは如何でしょう。
▼**齋藤**　これはちょっと中途半端かもしれませんね。何のために一句だけこうしているのか。私はちょっと意味がないかなと思います。この作者にとっては意味があったんだと思いますけれども。この一句だけそうすることには意味があるのか。この人は間隔を分けているところもありますし、表現方法もいろいろ試みているんじゃないかと思います。
▼**大石**　次に73番ですが、これは私がチェックさせていただきました。全体に軽いというか、軽々しいというのではなくて、やっぱり軽快な良さ。それは一生懸命俳句を詠んで、軽快にいっているのがうまくいったのかと思いましたが、軽いというのがナンセンスの方になっていて、それもまた良しというような感じです。「**建国の日のココナッツミルクティー**」。この句が何でと聞かれると困りますが、何かいいなという感じです。意味がそんなになくて、心に響いてくるものというのは、音韻的なことがあるのかなという思いがします。9番の「**紫丁香花ソファーに倒れこむ**」。これだって紫丁香花というのはライラックのことですね。リラとも言いますが、紫丁香花と言って、この漢字が当ててある。こういうところにこの人の俳句を楽しむ姿勢が出ているのかと思ったりしました。そんなに難しい句ではないんですが、印象が良

かったというところで戴きました。

次にどんどん行かせていただきます。74番はお手元をご覧くださいまして、片仮名表記の句になっておりまして、読む方にも覚悟を迫っているようなそういう印象がありますが。

▼**齋藤**　全部の応募作の中では一番異色作だし、それから何か、とにかくある世界を作ろうとしているよね。僕は「**地下ニ亡父ニ磨キコマレシ《鐵ノ處女》**」「**眞青ナ文盲ノ魚飛ビ交ヘリ**」「**君トナラトモニ殺セル青イ鳥**」「**大宇宙ヒトノモノ喰フ音ニ荒レ**」「**皿皿皿皿皿血皿皿皿皿**」「**魂トイフノモ寄生蟲デアラウ**」。でも百句のうちで、これだけあったらちゃんとこの世界を作ればいいんだけれども、完成された作品というのかな、7つか8つぐらいしかないんですよね、全部で見たところ。ただこういうのは分かるんですよね。これは年齢は若い人でしょう。何歳なのかな。

▼**対馬**　33歳ですね。この片仮名にする表現の意味というのは……。

▼**齋藤**　僕は余りそれは考えなかったけれどもね。

▼**対馬**　片仮名で読みにくいので、考えながら読むというメリットはありますけれども。

▼**城戸**　漢語的な印象を当然受けるわけですから、言ってみれば命令的な印象というのが、まず前提で立ち上がっていると思います。その上でこの作品に関して言うと、齋藤さんがおっしゃったように、まず百句でもって一つの自分の詩的世界を立ち上げようとしているという点では、私自身はこの150を超える応募がありましたので、そういう試みがもう少しあるかなと思っていましたが、はっきりしていたのはこの方だけでした。まずその点を評価しました。

ただ問題が、ここで展開されている世界というのは、ある意味ではかつて渋澤龍彦さんや種村季弘さんや、そういった方々が展開された、旧来は異端とされていたものの、それが何か人間の生命の根源であるエロスにどういうふうに関わってくるかという主題に則ったものだと思います。それを百句でもって実現しようとしている。そこまでは大変分かります。しかし、一句で見てみますと、俳句として立ち上がっている感じがしません。

だから例えば何番目のでも構いませんが、例えば10番目の句というのを見た時、その句が一つ前の句あるいは一つ後の句と互いに寄り添うようにして出来上がっている部分がありまして、それが連作的な作品を作った時のどこか弱さにも繋がってくる。ですから、核を選ぼうとすると、いい句というのを選ぼうとすると、思いのほか選択に困る。同時に、にもかかわらず百句でもって一つの世界を作り上げようという力技は、どこか驚嘆させられるところがあるという非常にアンビバレンスな感覚を抱きました。

▼**対馬**　決して無視はできないという中の一つでした。

▼**城戸**　詩人の立場で言うと非常に分かりやすい作品に逆になるのですが。

▼**対馬**　どう思いますって城戸さんに聞いたら、いや、これは内容は古いですよと言われたので、ああ、そうか、そうなんだって。

▼**城戸**　ちょっとこの主題自体は……。

▼**対馬**　主題が古いって。

▼**大石**　それは詩の方から言ってのこと？　文学的にも？

▼**城戸**　いや、決して。

▼**対馬**　古臭いということではない。

▼**城戸**　ええ、それとは違います。ただ、どこかでもう既に見た感じが、既視感があるというところはあります。齋藤さんが挙げられている１００番目「**魂トイフノモ寄生蟲デアラウ**」って、これが一番最後にくるというのは、こういう連作をした場合には、それはある種の結論であるわけですけれども、魂という一番貴重で語り得ないものが、実は人間の肉体に対しての一つの寄生虫であろうという姿勢は、むしろ肉体の中に本質があるんじゃないかという提言なわけです。それは言ってみれば、ジョルジュ バタイユというフランスの思想家が探ったような、いわゆる人間の性の根源としてのエロチシズムへ、どう言葉の触手を伸ばしていくかという試みだと取り敢えずは要約できると思います。そのこと自体は別に古いというふうに非難されるべきものではないのですが、ことさら目新しさはないというところはあるかと思います。

▼**大石**　この人が百句で書こうとしている異次元というか異空間というか、それをアピールするために普通の平仮名ではなくて、片仮名のこういう表記をされたのかと思います。これは百句一連でもって読み取るべきものであって、そういう意味で非常に関心を持って読みました。

　せっかく百句という場が与えられて、その中で自分が一番言いたいことだとか、全体で言うということも必要ですね。最初から気になっていた作品です。大変読みにくかったのですが、読んでいると西洋の物語が背景にある。それが非常に激しい言い方で書いてありますので、どっちかというと劇画的な表現というか、そういうところでお若い方はきっと我々よりももっと抵抗なく、こういう情景というのを自分の中にイメージとして持たれるのではないかと思いました。私はこの作品は好きでございました。

▼**対馬**　すみません。勉強不足ですが、この漢字、片仮名の俳句というのは他に作っていらっしゃる方はいますか。

▼**大石**　どうでしょうか。今度の作品の中にも一、二句そんなのが混じっているのがありませんでしたか。

▼**対馬**　これまで前衛と言われた人達の中では……。

▼**齋藤**　「未定」とか「豈」とか、ああいう若い連中のは多いですよ。

▼**城戸**　夏石番矢さんなんかも。

▼**齋藤**　一冊丸々それで作ったのがある。

▼**西村**　正岡子規が漢字と片仮名でたくさん作った。

▼**齋藤**　マクデブルグの館というのは、東ドイツにある古い、今もまだあるんでしょうけれども、エルベ川のほとりの古都なんですね。そこの館という架空の場所なんだけれども、こういうのは、短歌では塚本邦雄とか春日井建なんかがよく作るわけよね。だから彼が架空の現実とは違う異次元のこういう世界。この館に僕らを十分引きつけていけばいいんだけれども、余りあれなのね。でも「**君トナラトモニ殺セル青イ鳥**」。この青い鳥というのは幸福の象徴だろうけど、それを殺そうということであって、とにかく今の秩序意識とか、そういう今の白昼に通用するような道徳観なんていうのは、みんなここでは倒錯というかな。

▼**城戸**　倒錯しているんですよね。

▼**齋藤**　でも、こういう世界を若い時はどうしても作りたがると思うんだよね。思う存分、自分の夜の部分というか、暗黒の部分、無意識の部分をまさぐっていくということは、結局この人は現実に絶望していて、例えば28番なんていうのは本当に文明批評だと思うんですよ。「**大宇宙ヒトノモノ喰フ音ニ荒レ**」。普通、荒れというのはなかなか言わないよね、荒れるということを。宇宙がとにかく人の飽食のために滅びていく。館で人間の本能のおもむくままに展開する。こういう世界を歌うということは、やっぱり現実に対する拒否反応。今の時代を生きられないという思いが、こういうことを夢想させるわけだから。ただ十分にこの館に僕らを酔わせるまでいかないんだよね。

▼**城戸**　できればもっと十分な迷路を作って、十分に迷いこませてほしいというところですか。

▼**齋藤**　ええ、そうですね。

▼**大石**　登場人物というのを追っていきますと、わりと筋書きが見えてくるような感じがしました。面白い人がたくさん出てきて、それがみんな、このおぞましい情景でもって描かれている。旧字、旧仮名で凄く凝った作品ということでしょうか。こういうことは俳句の中でもできるということも、楽しいことだというふうに思いました。

　ではこの世界から逃れまして、次に80番です。齋藤さん、どうぞお願いいたします。

▼**齋藤**　僕はかなり共感する俳句がありました。最初からいくと「**逃げ水は不幸に真直に走る**」とか、「**緑陰やそれは深爪する昏さ**」とかね。

▼**城戸**　52番がいいですね。

▼**齋藤**　これはいいね。「**月光を容れる容器として裸身**」。それから「**夾竹桃二十世紀は負の遺産**」というのもいいですね。それから軽いようだけれども「**かりそめの名で呼ぶひとと夜長かな**」というのは非常に好きですね。こういう物語性のあるのが。それから「**揚雲雀知る世界内存在と**」。これは世界内存在なんていう詩は、ハイデッカーみたいで難しいけれども、揚雲雀にぴったり合ってますよね、無理なく。揚雲雀をこんなふうにして詠んだ人は余りいないと思うし。

▼**対馬**　この人はうまい人だ。中級者から上級者というか、作り慣れているなあと思いましたが、作り慣れている分、ちょっと新鮮さが訴えてこなかったので……。どうですかね。

▼**大石**　なかなか難しいところです。

▼**対馬**　そうですね。

▼**大石**　それでは82番は坪内さんですが。

▼**西村**　変更です。ご参考までに、かつて挙げておられた句だけを紹介しますと、4番、16番、23番、24番、35番、88番。以上です。

▼**大石**　お出でになったらお尋ねしたいと思っていたのが、58番の五行になって書いてある句がありますね。普通に読めば「**すなどけいをにゃんだこれはと見てるネコ**」となると思うんですが、それを五行に分けまして

す　な
どけ　いを
（にゃんだ？　……これは）
と見　てる
ネ　コ

超絶短詩説いうのを書いている人がおられるんですが、どうもその手法を俳句に持ち込んで、こういう面白い書き方をされている。超絶短詩というのは、言葉を短い感動詞というか感嘆詞ですね。「あ」とか「お」とか。そういうものを言葉の中から一文字出して、二文字でも構わないんですが、この場合だってら「ネ」とか「な」とかというのが感動詞になって、あと言葉を分解していって、面白さを引き出してくるというものです。そういう、俳句よりも短い詩を書いている人がおられるんですが、これは俳句をそういうふうに分解した実験作かと思って、それでもこういうふうにしてしまうと随分長いなという感じがしました。坪内さんがお出でになったら、ご推薦の弁の中で伺ってみたいと思っておりました。

▼聴講者　これは形でしょう。例えば42番は蝶々の形で、58番は砂時計の形。「これは」の上の……は砂が落ちているところ。

▼大石　なるほど。気がつきませんでした。

▼対馬　なるほどこういうフォルムなのね。

▼大石　言葉を視覚的に表している。

▼対馬　これが蝶々のフォルムなんだ。

▼大石　なるほど。そういう仕掛けがあるとは知りませんでした。

▼齋藤　こういう詩の書き方自体は、20世紀初頭にフランスのギョーム アポリネールが始めたやり方で、その後アメリカのE. E. カミングズという詩人が大変巧みに展開しました。俳句のように17音でやるというとなかなか大変だと思うんで、砂時計の形であれ、蝶々の形であれ、よく考えられたなと思います。

▼大石　その意欲というか、面白いものを見せていただきました。

▼対馬　アジア圏の海外から三編応募があって、88番を読んでいて、そのあたりの句だなというふうに思いまして、私もタイに住んでいたことがあったので、分かるということでチェックを入れました。この方はアジアに住んでいて、そこで作っている希有な存在の一人であると思います。まだ若いですし。

一番好きなのは「**泳ぎ来て空青きことばかり言ふ**」。マレーシアに住んでいるというところで独自性はありますが、そこを離れたところでも、十分この人の詩的感覚というのがそれなりにあるということを認識した句です。それと「**藤の花まっすぐにあり雨もまた**」。ちょっと俳句の形としては古いですけれども、十分言い尽くして余りある句だと思いました。

▼大石　98番です。対馬さん、如何でしょうか。

▼対馬　この人も作り慣れてるなという気がして、最初はちょっと拒否反応がありましたが、選ぶ上において、じゃあ作

り慣れているからこっちへ置いとけではやっぱりよくないなと思い直して選んだものです。ねぶたの句にしても、それぞれちゃんとうまくいってる。うまくいってるなというのが一言の感想ですね。ただそれ以上、どうしてもこの人というところ。これがこの人らしさなんだなという気はします。

▼**大石**　うまくいっているというのは最大の賛辞かと思っておりましたけれども。

▼**対馬**　そうじゃない。うまいんですよ。

▼**大石**　うまいって言われて、余り喜んじゃいけないということかもしれませんね。

78番の「**いずれの御時にかあらむパンの黴**」なんて、パンの黴が恐縮しているだろうなと思って、こういう遊び心のある方なんだなあと思って読ませていただきました。

では99番へ行きます。99番も対馬さんがお取りですが。

▼**対馬**　一言で言えば、上級者というか、たくさん作っている人ですね。何が新しいのかというところを突き詰めて、こういう作り慣れているのを排除してしまうと、新しさを見直す危険性もあるかなと思って、やっぱり予選には残すべきかなと思って選びました。

選んだ中では、さり気ないんですけれども「**枝先の椿は遠く落ちにけり**」。これは如何にも俳句ですが、百句はちゃんと考えて揃える力がある人じゃないかな。安定した力というのを感じましたね。ただその分言葉に手垢が付いてしまう恐れがあるので、どうですかね。例えば「**青芒ぶつかりあうて傷つかず**」というのはチェックしました。

▼**大石**　本当に破綻なく、うまく作っていらっしゃるという感じですね。

108番。ずっと対馬さんのご推薦が続きます。

▼**対馬**　これは99番と逆の形で、凄い言葉とものを構築して作っているというイメージでした。「**寒梅や災禍の渦に蜘蛛の降りる**」「**わが母を蚯蚓に喰はす浅き墓**」なんていうのはちょっとおどろおどろしいかな。「**天蓋に黙した音楽の氷河**」。この人の句は、好き好きがある部類の句です。私の中でもそうですけれども。凄く前衛的な分かりにくい句と凄い有季定型の形がしっかりした鍛練を積んできた句というが両方が好きなんですね。

▼**大石**　いいものはいいというところですね。ありがとうございます。

次は112番です。

▼**齋藤**　僕がチェックしたのは「**浮雲と名づけて育てし糸瓜かな**」。後は余り関心ないなあ。

▼**大石**　浮雲の句ですね。これは面白かった。これは私も大きな丸を付けているんです。この句はいい句ですね。

▼**対馬**　私がチェックしているのは「**春の雪ぶつかりし歯の硬さかな**」。ああ、分かるなあという感じですね。

▼**大石**　それから「**イースト菌働いてゐる文化の日**」。これは坪内さんもお取りですが、さり気ないところで文化の日というのがよく効いているというふうな気がしました。

▼**齋藤**　「**花粉症墨東綺憚立ち読みす**」ということで、永井荷風のが入っていて、それから「**北窓を開くこゝろを愛読す**」とあるでしょう。これは夏目漱石ですが、こういう場合は括弧した方がいいんじゃないかということ。そして、僕だったら、括弧をしなければ「北窓を開くこゝろを」まではそのままで、「愛読す」じゃなくて、例えば「愛惜す」とい

うふうにする。そういうのは好きなんだよね。つまり北の窓を開く心を、そういう行為を今やっている自分をどこかで哀れんだり、いとおしんでいるんだとすればいいと思う。ただこれを、夏目漱石の「こゝろを愛読す」というだけでは面白くない。

▼**大石**　いいアドバイスをいただきました。

　では次は115番。

▼**齋藤**　これは全応募作で一番チェックが多かった作品です。全体から二～三編を挙げろといったら、この作品なんかが入ります。どれを挙げたらいいかなあ。こういう俳句を作っている人というのは、寺山修司がむしろ近いかもしれませんね。

▼**対馬**　「**胃の中に雪降る如き訣れかな**」って、ちょっとぐぐっと来ましたね。

▼**齋藤**　「**銀漢にひとさし指は溺れたり**」というのは寺山さんにもありますしね。

▼**対馬**　その模倣の域からは出ているんですね。

▼**齋藤**　これはいいと思いますよ。僕には「**虹に列しひとさし指は滅びけり**」というのがあります。寺山さんにもそういうのがあるのね。「**秋風やひとさし指は誰の墓**」というのかな、確か寺山さんのは。ひとさし指は溺れたりとか滅びけりというのは、わりと生まれているんですよね。

▼**齋藤**　今までのをずうっと見てきた中では一番詩的じゃないかなあ。「**空蟬が廃墟のやうに思はれて**」というのもそうだしね。

▼**対馬**　驚くことに23歳ということ。

▼**齋藤**　ああ、そうなの。

▼**城戸**　例えば「**何時よりか肺を彷徨ふ蛍かな**」のように、単純に物と心って分かれてないんですよね。どっちかだと思わせると、それが繋がっているような巧みさがあって。それは「**月の夜や心に貝の渦見えて**」だってそうだと思うんだけれども、一番個人的に気にいっているのが「**春満月吊り橋に死の遊びせむ**」。どこかで禍々しいイメージを持ってきても、ある明るさを伴っている印象がありますね、全体に。

▼**対馬**　逆に私は何かその暗さがいいなあと思いました。

▼**齋藤**　「春満月」がいいよね。ただ俳句の方だと、詩の遊び過ぎというのが斎藤玄だとか中村苑子なんかとか随分あるんですよ。手足の遊びをするとかね。でも「春満月」までやらないのよね。僕は「春満月」はいいけれども、「吊り橋に死の遊び」だったら余りにもつき過ぎで……。

▼**城戸**　それは常套的になり過ぎる。

▼**齋藤**　「春満月」に「死の遊びせむ」はいいんだけど「吊り橋」まで言うことないだろう。「吊り橋」にはどうも引っ掛かります。

▼**対馬**　この人は現実と心の中の融合がうまいですよね、本当に。

▼**齋藤**　だから「雪降る如き訣れかな」だったら「胃の中に」でしょう。僕はこっちの方がいいと思うんですけれども、

「**永別や扉の奥の潦**」というのがあるよね。これも同じようなことだけれども、よくできているよね。

▼**城戸**　かなり潜在的に大きなものを感じさせてくれる人ですね。

▼**大石**　素材にも好みがあって、黒蝶、蟻、空蟬、蝙蝠など。そういう中で、自分の世界を、読者が「ああ分かる」という世界に描かれているような気がします。私もこれは大変好きな句で戴きました。

▼**齋藤**　「**空蟬や暗紅の都市遡り**」なんていいですよね。僕なんか自分がこういう世界を作ろうとしているから、こういうのには脱帽しますね。

▼**大石**　「**ただならぬ闇にあやめの群がれり**」なんて、ちょっとエロスというんでしょうか、お若い23歳、そういう方がこういう世界を。

▼**対馬**　いつの間に身に付けたのという凄いテクニックがありますよね。

▼**大石**　テクニックが目立つところがありますか。

▼**対馬**　それはこの人の場合は鼻につかないんですよ。だからやっぱりうまい。

▼**大石**　そうかと思うと「**槐太忌の傘にかそけき雪降れり**」なんて、泣かせどころもちゃんと心得ておられるし、なかなかの作者だと思いましたね。

次に125番です。125番は齋藤さんにお願いしてよろしいんでしょうか。

▼**齋藤**　前の作品も最後に二〜三編残したいものと言いいましたが、これもそういう作品なんです。最終的にどっちをどうするかということは後で。今も迷っているんですけれども。まず「**紫陽花にまだ未使用の恋がある**」。それから「**空前のエクスタシーの曼珠沙華**」「**夕焼けが見たくて放火したという**」「**顕微鏡覗けば冬の星座の巣**」。これは僕は好きですね。それから「**白骨と化すまで月光を拾う**」。「**名月の沸騰点へ石を積む**」もいい。「**海月透くように呼吸する未青年**」。同じ月光というのを随分歌っているけれども、51番もそうだね。「**枕辺に積む月光という遺産**」とか凄く好きなのがあります。

▼**対馬**　タイプとしては115番と似てますよね。

▼**城戸**　似てますね。

▼**城戸**　私も実はチェックした句が125番に大変多いんですよ。今、齋藤さんが挙げられたように5、9、34、35、51番といった句が印象に残りました。

一方で、こうやって公募の形で百句競作の時に、現代的なものが具体的なものとして、どれぐらい入り込んでくるのか関心を持って眺めていました。つまり携帯電話とか、パソコンのメールであるとか。意外とうなづかさせてくれるものがなくて、その中ではこの人の「**春はあけぼのピリオドのみのメール打つ**」というのは一番できが良かったんじゃないか。しかも「春はあけぼの」ですから、まず枕草子のパロディから始まって、しかも打つのはピリオドのみですから、無言であるということを示すわけですよね。これはセンスのいい現代的な風俗をめぐる一句だと思います。これを除くと先程話し合った115番と同じように、例えば「**かたつむり時間の継目をこぼれ落つ**」というふうに、いわゆる単純な叙景を超えて何か別の次元というか、我々が普段生きて普通に触れている日常と違う次元を少し覗かせてくれる力技がある一群

の作品だと思いました。

▼**大石**　ありがとうございました。最後の127番です。

▼**齋藤**　坪内さんが、今回いろいろ推薦した中ではこの作品が一番いいですね。ただ坪内さんが挙げてないのが幾つかあります。例えば**「闇取引にアネモネの花使わるる」「唇を持て余したり春の闇」「薄原二つに割って男来る」「恐竜の背中ひびわれ秋日和」**。また、僕も坪内さんと共鳴句がありました。**「長電話二人はきっと蛍かな」**というの。

▼**城戸**　これは凄くフレッシュな感覚がところどころに見えるのが気持ちいいですね。**「吾もまた一人るるるるかいつぶり」**。「吾もまた一人」なんていうのは非常に常套的な言い回しでしかないんだけれども、この「るるる」という4音ですべてが姿をきちんと現してくるようなところがあって、こういった部分でも感覚が新しいという感じはしました。

▼**対馬**　そのフレッシュな今時の感覚というのが凄く伝わってきていいなと思いましたが、前にも言いましたように「私」が多くて、そこでちょっと拒否しちゃったんですね。そういうのって気になりませんか。マイナス方式で言うのは良くないのでしょうけれども。

▼**齋藤**　17音ですから、やはり語る主体であるとか語られる対象であるとか、私とかあなたとかというのを読み込んでいくと非常に難しいですよね。

▼**城戸**　あなたとか私とか挙げないでしょう。でも僕は歌ってもいいと思っています。でも余り成功したのはないけどもね。

▼**齋藤**　17音の中で例えば何かを反復するなんていうのは大変なことです。

▼**対馬**　他の作品でもありましたけれども、同じ言葉を反復したり勿体ないじゃないと思うんですよね。

▼**齋藤**　芝不器男の**「あなたなる夜雨の葛のあなたかな」**と、これは反復があるわけですけれども、ここまでいくのはなかなか大変だって。

▼**大石**　いろんなお話が出たところで、予選を通ってきました候補作品についてのご意見は、この辺で一応終りにいたします。

〔休　憩〕

▼**大石**　どうもお待たせいたしました。会場の方から少しご意見を伺ってみたいと思います。夏井いつきさん、いろいろお考えになったこととかご感想やらをもし伺えたら……。

▼**夏井**　ありがとうございます。松山からこういう形でこういう新しい賞が出来たということも大変嬉しく思いますし、皆さんのお話を興味深く聞かせていただきました。

個人的な感想を述べさせていただきますと、百句まとめて何かを主張しようとする意欲作ということも分かりますが、

私達は一句独立という形で俳句を書くということをひとまず目的にやっています。個人的な思いとしては、一句一句がどういう作品として立っているかという視点で決まっていけばいいなというふうに思いました。

また、芝不器男らしい清新なというか、爽やかなというか、希望の持てるような作品が選ばれると良いと思います。何せ一回目ですから。二回目ぐらいに個性的なのが出るのは拍手喝采なんですけれども、一回目でいろいろなものが印象付けられることもあるので。

▼大石　ほかにどうぞご意見のある方はお願いいたします。挙手をどうぞ。

▼名本　芝不器男記念館からやって来ました。「**あなたなる夜雨の葛のあなたかな**」に近づいた俳句が出るのかな、そういう気持ちでした。それは全く期待を裏切られましたが、今日の選ばれた句が云々という意味ではございません。新しいタイプの俳句はこんなものなのかなという印象を受けました。不器男のまだ句集に載ってない句に「**麦笛を吹けば誰やらあわせ吹く**」というものがあります。小学生にも分かる俳句ですね。芝不器男記念館で俳句道場をやっております。子供達と一緒に俳句を楽しんでいます。今日聞かせてもらいながら、かなりのレベルの俳句だということが実感です。小中学生達と俳句を作るのに、公開審査の先生方のご意見を聞きながら、どういうふうに今後対応していったらいいかというのが、芝不器男記念館長としての私の課題になりました。ありがとうございました。

そして、来年の4月19日、不器男の生誕百年祭を計画中です。是非また不器男の故郷にお出でいただいたらありがたいなと思います。これはちょっと宣伝ですが……。この賞の授賞式もその時に松野町で行う予定でおりますので、どうぞいらしてください。

▼大石　来年のことですけれども、是非、参加していただきたいと思います。

さて、受賞作品ですが一作ずつどういう形で……。口頭で何番という形でいたしましょうか。対馬さんの方から順番でよろしいでしょうか。

▼対馬　最後の一編を残すということで、非常に迷いました。それは選者が将来の俳句に何を求めているかということさえも問われることで、何か新しいものを見つけたくて選を楽しみながらやっていました。

じゃあ何が新しいのか。よく新しみ新しみと言いますけれども、川本皓嗣先生の論文を今度「天為」という雑誌に載せていただくことになっていますが、「不易流行」ということを考えました。川本先生はボードレールのことを引き合いに出して「不易流行」ということについて述べられております。変わらない真実の美と今のもの、もっと先のもの、未知の美というものの兼ね合いというのが、果して見い出せたのかどうかということを考えました。そして、私が最後に一つ推したのが32番です。

他にもいい作品はありましたが、この32番の一連の句を見ていると、何か生死というか、生きること、それから死ぬこととというテーマ性を底辺に感じたんですね。しかもこの人は25歳ですが、この死という最も困難な、命とか・・命というのをもろに出すのじゃなくて、例えば赤ちゃんが生まれた時の喜びとか子供を育てているとか新婚さんの句とかいっぱいありましたけれども、そういうことを排除して命を歌っている、死を歌っているということを感じました。

子規も若くして亡くなりましたし、この芝不器男さんも20代で亡くなっている。死というのは昔の人にとっては本当に

早く訪れたものだと思います。この人は、まだ自分は病気でも何でもないだろうけれども、死から逃げないで常に抱えて考えているんではないかなということを感じました。作品番号では7、9、13、15、24、31番。どれも息が詰まるぐらい、自分の中に帰っていく力というか、もしかしたらこの一連の中で見ると「**生きようと思い直して雪を食う**」とか「**死にかけた眼に映るストーブの薬缶**」とか。もしかしたら本当にそういう体験をしているのかもしれませんけれども、そこからまたふと日常に帰った時に「ガソリンの味のする晩餐」がある。ああ、何と虚しいんだ。そういう感覚が私は好きでした。またこの粗削りな部分も完成されてない未完成さを私は推したいと思います。

▼**齋藤**　百句では、一句一句の完成度が、まあ70句なきゃ駄目だというのが大体普通だと思います。試験でも大体60点で合格点ですが、それからいくと百句あったら70～80句はとにかく一応の水準に達してなければならない。今回、どのぐらい取れるかというふうに取って、最大取ったのでやっぱり34～35句しかないということは正直な話です。結局、完成度の一番多いのから言えばいいのですが、そうすると僕が推すのは115番か125番ということになる。

さて、そこで悩んだんですけれども、先程年齢の問題が出ました。僕は、男とか女とかは全然関係ないけど、年齢というのは考えなきゃならないだろうと思うわけ。最終的に、僕は115番と125番を迷うんだけれども、取った句数から言うと、125の方が少し上回っている。ただ年齢からいうと、さっき聞いてびっくりしたのは115番が23歳です。それで125番が37歳。125番の「**紫陽花にまだ未使用の恋がある**」とか「**ダイス振る春の体積はかるごと**」。こういうのは僕は非常に好きです。「**青春のまっただなかのレタスかな**」もいいじゃない。だけど37歳ではそういうのは詠んでもらいたくない。これはやっぱり20代で、10代で詠まなきゃならない作品ですよ。「**ダイス振る春の体積はかるごと**」。「**青春のまっただなかのレタスかな**」「**掃除機で吸いとる空よ修司の忌**」。寺山修司の忌。これは僕は取らないけれども、こういう未熟な作品もあるわけです。良い作品の数だったら125番なんだけれども、年齢とかそういうことを考えると僕は一位に115番を押します。

115番の先程触れなかった作品では「**葡萄 捥ぐ聖痕戻らざる日々を**」「**曼珠沙華墓の隙間を溢れ出づ**」「**金雀枝に零るる死者の吐息かな**」「**葡萄 捥ぐ聖痕戻らざる日々を**」。「聖痕」というのは23歳でトラウマ、聖痕、そのステグマかな。それが戻らざる日々をと歌っている。葡萄を捥ぐというのは、平畑静塔の「**葡萄を捥ぐように教えたし**」を踏まえていて、思い切ったことを詠んでいるわけです。それから「**曼珠沙華墓の隙間を溢れ出づ**」は別にどうってことないけど、なかなかこういうふうにいかない。これは曼珠沙華が墓の隙間を溢れ出たんだろうけれども、逆に墓が曼珠沙華の隙間を溢れたとも言えるわけだしね。これなんか計算しているかどうか分からないけれども、これはなかなかいいと思います。何気なしに詠んでいるけれども。あとは「**瓦解して眼裏を発つ蝶の影**」。これなんか緊張感が走っていてきちんと詠んでいるし、この年齢でこれだけの作品を作ったということと、今後の将来性を含めて、僕は115番に一票を投じます。

▼**城戸**　私の場合は気になった句をチェックして、その数が多いものを実はここに推薦作として挙げたわけではないというところがありまして、それは何でしょう。やはり自由詩を書いている立場から見ると、これは良いと思うものが例えば20あるものよりも、もっと何か深く突き刺さってくる一行というものに気持ちを動かされているところがあったのかもし

れません。そういった中で、例えば作品番号で言うと53番や60番なども大変気になりますが、今、齋藤さんに先に挙げられたんで困っているんですけれども、私も結論から言いますとやはり115番に一票を投じたいと思います。

先程も論議になりましたが、齋藤さんが挙げられた「墓の隙間を溢れ出づ」も確かに私もチェックしていますが、何か暗さの中に明るさが灯るようなものが常に感じられるところがある。先程も話しました「**何時よりか肺を彷徨ふ蛍かな**」。これなどは人間の生死に関わりながら、何か微かに灯って自分の身体を支えてくれているような、微かな明かりが自分の身体を支えてくれているような美しさがあると思います。

例えば死であるとか、そういった問題を句の中に語るというのは簡単ですが、そのことが読む人間にとってリアリティを持つのは難しいと思うんですね。ところが、それが何かきちんとした姿を持ってこちらに迫ってくるところがあって、同時にそのことが生きているということのある儚さを持った姿というのを見せてくれているように思います。

▼大石　私も今随分迷っておりまして、一番気になったのは、先ほどお話ししましたように74番でした。でもこれは、確かに一句の独立性とかということを考えますと、俳句を作っております側からしますと、面白いことは面白いけれども、アピールするものが少し違ってくるのではないかという感じで、74番は見送りました。

私もなるべく重ならないように思っておりますが、でも好きなのは115番になります。別に休み時間に談合してきたわけではありませんので、聞いていただきたいのですが、選考していて、読んでいて、ああ、これこれっていうふうに響いてくるのが選考している時の楽しみだったのですが、それが74番に多かったのですが、その次に多かったのが115番という作品でした。

さっき申し上げられませんでしたが、「**垣間見し駅は昼顔ばかりかな**」。これは駅の有り様、それも垣間見た駅というのが昼顔だけが咲いているという、この昼顔の象徴するところのものが心に響いてきます。それから「**逆鱗に触れては開く花火かな**」。逆鱗に触れるという言葉を普通使いますけれども、花火の咲く様子にこういう使い方をして、花火の開く様子を的確にとらえているように思いました。それから「**雷の夜を風のごと去る曲馬団**」。こういう懐かしい心の中の風景というのが出てきております。本当にこの人の持っている世界というものに強く引かれて、さっき年齢のことが言われましたけれども、年齢のことは別にして、作品として非常に魅力のある作品でした。大変早熟な作家ではないかと思います。

もう一つ64番の句。お若い方の句だと思いますが、これもさっきちゃんと言えなかったところがあります。父母を詠んで、自分の周辺を等身大で詠んでいるその態度というのはやはり非常に尊いことだと思います。季節というか、季感というか、それに対する感度が非常に良いことと、そこから引き出されるナイーブな感情というのでしょうか、それが句の上に無理をしないで出てきているというところで、甘いと言えば甘い、幼いと言えば幼いかもしれませんけれども、この年代の作者としてしっかりと俳句に向かい合っておられる。本当のことを言うと64番と115番と随分迷ったんです。

64番についてもう少し申しますと、「**切符透く胸のポケット柿若葉**」「**天井に届く古本麦の秋**」。それからご自分の体験そのものだと思うんですが、「**家庭教師終へあぢさゐを貰ひけり**」「**地下鉄にあじさゐ抱へ乗りにけり**」という、何でもないのですが、この大きなあぢさゐを胸に抱えて電車に乗っている、地下鉄に乗っているその若い女性の姿を、何だ

か涙の出るような思いで読みました。それから「**秋の雨ガラスの指輪買ひにけり**」。ああ、そうかという感じもします。「**病む母に甘柿二つ買ひにけり**」「**秋の虹上着をかけてくれにけり**」。非常に素直な句です。

非常に両極端にあるような作り方とか世界とがあるんですけれども、115番の方に一点入れたいと思います。

坪内先生のご意見をお願いします。

▼**西村**　それでは坪内先生のお言葉をお伝えしたいと思います。これは先生がおられませんので事実だけを伝えさせていただきたいと思います。坪内先生は12番、22番、33番、40番、53番、60番、127番から選ばれればありがたいが……。それで自分としてはこの中でも一番若い60番を推したいということであります。

▼**大石**　ありがとうございました。そういたしますと坪内先生は60番ということです。どういたしましょうか。

▼**対馬**　三人が115番ということで、私も確かに115番はいいと思ったんですけれども、ちょっと待ってよ。本当にいいのかともう一度問い直してみてください。

▼**大石**　対馬さんは、いかがですか。

▼**対馬**　言い古されているとまではいきませんが、どこかで見てしまった俳句ではないかなという不安感があります。新人賞ということにこだわるわけではないですが、未知の可能性と未知の美を自信を持って、私も確かに115番は推していますが、本当にもう一度聞きたいのですが。

▼**大石**　ここで止まってしまうとか、そういうことではなくて、非常にはっきりした世界というか、この方の世界というのがしっかりでき上がって、不安定なとか不安感を覚えさせるようなそんなところはありませんでしょう。良くできたというか……。

▼**対馬**　そうですね。不安ではなくて、可能性というのはどうですかね。この人の将来の可能性。このままいったら末恐ろしい俳人になる素質はやっぱりありますよね。どうしても何か見たことがあるという気が拭えないんですけれども、そんなことはないですか。皆さんはどう思いますか。

▼**大石**　どうぞおっしゃってくださいませ。

▼**聴講者**　自分の経験からいくと、23歳でこれだけの句ができるということは凄いことです。あと五年ぐらいするともっといい句が出るという可能性はありますね。僕の好みでいくと99番ぐらいだけども、それよりもっと感覚的に素晴らしいところがあります。

▼**対馬**　そうなんですね。確かに感覚的に素晴らしい。確かに最初この全編を読んだ時に、形式的な74番を除いてはみんな何か似ているな。突出していたものはないなと思いました。しかし、二回、三回と読み進むに連れて、115番とか125番は圧倒的な力を感じたんですよ。それは如何ともしがたい。じゃあ何故詩人である城戸さん、有季定型の「鶴」の俳人である大石さん、齋藤さんが共通して115番を押したのでしょうか？

▼**齋藤**　私の場合は、俳句をやられている方よりも小説家であるとか、詩人であるとかそういう方が友人に多いんですね。最近「ブエノスアイレス午前零時」という作品で芥川賞を受賞した作家の藤沢周と話している時に、彼が凄い俳句を見つけたと言うんですよ。それがどういう句かというと「**鳥の巣に鳥が入っていくところ**」という句なんです。いつもレト

リックに苦心している作家の目から見ると、当たり前のことを当たり前のように語られた時に奇跡のように思うらしい。

自分も何度か繰り返して読んでいくと、全体に似たような印象だったものの中から、どうということはないんだけれども、どうしようもなく魅力的だというものがあるのに気づくようになるんですよ。ただ、この115番に関しては客席の方から発言もありましたように、確かにセンスの良さというのは十分感じるんですね。それが一つのテーマを先に立てるんじゃなくて、テーマを連れてきているようなセンスの良さと言ったらいいでしょうか。

ただ、一方で定型にまつわる問題として、その感覚をいつも五七五に持っているとやはり進歩はないわけで、批判性をこれから作者がどう持っていくかというのが問題だろうと思います。批判性というのは有季定型か自由律かというふうな問題ではないですよ。より五七五という問題を深く自覚すると言い換えてもいいですけれども。

▼大石　推薦作が出ておりまして、32番それから60番、115番の三作が候補に挙がっておりますが、手続きとしてケジメということで、挙手による採決をした方がよろしいですか。もう挙げなくていいですか。

▼齋藤　手は一回しか挙げちゃいけないんですか。候補に挙がっているのに二回までの挙手可能で取ってみるのはどうでしょう。32番、60番それから115番で二回までの挙手可能でやってみたらどうでしょうね。

▼対馬　115番は四票入りそうな感じ。

▼大石　結果として……。

▼齋藤　一緒ですか。

▼大石　三作ですから、挙手するのも何か恰好だけのような気もしますけれども、ひょっとして変心ということもありますし、じゃあ取らせていただきます。

―　挙手による採決　―

では第一回の芝不器男新人賞は、115番に決定しました。おめでとうございました。（拍手）

▼対馬　一応反対はしましたけれども、115番は選者を驚かす力があったと思います。

▼齋藤　一体どこのどなたなんでしょう。

▼事務局　それでは発表させていただきます。115番は大阪府にお住まいの冨田拓也さん。男性。23歳です。おめでとうございました。

では続きまして委員奨励賞を、よろしくお願いいたします。

▼大石　各委員の奨励賞というのがありまして、各委員から一作これという作品に対して奨励賞を差し上げることになっております。では坪内先生の方からお願いします。

▼西村　坪内先生からお言葉をいただいておりますので、奨励賞は60番でお願いします。（拍手）

―　事務局発表　60番作者は東京都の神野紗希さん。　―

▼城戸　これもまた迷うんですけれども、坪内さんが推していらっしゃらなかったら私も60番と言いたかったのですが、齋藤さんが君は詩人だからこれを推さなきゃ駄目だと強制されまして……。（笑）

一句としての自立性には欠けますが、やはり百句でもって一つの世界を作ろうとしたところを評価します。74番。

―　事務局発表　74番作者は東京都の関悦史さん。男性です。―

▼**齋藤**　坪内さんがかなり推していて、僕も推薦していた127番というのもあって、これは坪内さんと一番共鳴したんだけれど・・・。

迷っていたけれども、やっぱり125番、この人に奨励賞をあげたいと思います。

―　事務局発表　125番は宮城県の佐藤成之さん。男性です。―

▼**対馬**　私は最後まで推した32番。このまま頑張ってくださいという可能性に賭けます。

―　事務局発表　32番は福井県の松原藍夏さん。女性です。―

▼**大石**　私は、さっき申しましたように64番を奨励賞にしたいと思います。このままどうぞ素直に伸びて下さい。

―　事務局発表　64番。兵庫県の小田涼子さん。女性です。―

▼**事務局**　長時間にわたりありがとうございました。

表彰式は、平成15年4月19日に松野町で開催されます。皆さんのご参加をお待ちしております。

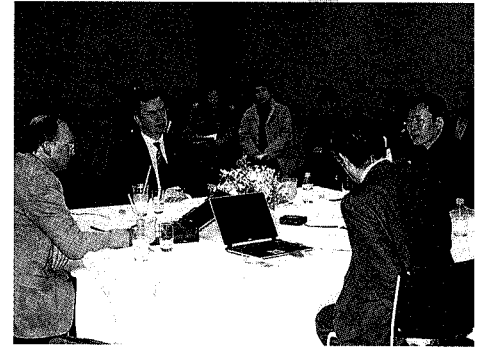
また、この新人賞の次回は三年後を予定しております。

カンファレンス・句会・吟行 ほか

俳句カンファレンス

欧米における俳句

とき：平成14年11月30日　午後4時30分～6時20分
ところ：愛媛県県民文化会館　第一会議室

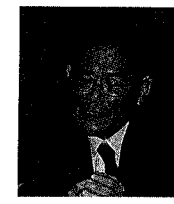


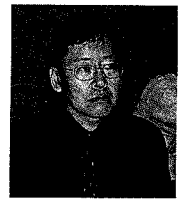
聞き手：川本 皓嗣（帝塚山学院大学教授）
比較文学、特に「詩歌」の比較研究を専門とし、日本比較文学会会長、ならびに、国際比較文学会会長も務める。東京大学教養学部助教授・教授の後、現在同大学名誉教授。この間、カナダ・トロント大学東アジア学部客員教授等も務める。
著書：『日本詩歌の伝統―七と五の詩学―』で小泉八雲賞、サントリー学芸賞を受賞。
正岡子規国際俳句賞調整会委員、21世紀えひめ俳句賞選考委員

出席者：ハルオ シラネ（アメリカ　コロンビア大学教授）
『芭蕉の風景　文化の記憶』にて21世紀えひめ俳句賞・石田波郷賞受賞。

ラーシュ ヴァリエー（スウェーデン国会外交局長、大使）
ストックホルム大学で日本研究を専攻し、その後、大阪外国語大学、京都大学に留学。在日スウェーデン大使館勤務を含め、延べ16年間日本に滞在。日本と北欧の文化作品の翻訳を中心とした文学雑誌「ひかり」の編集長でもあり、自ら日本の散文・詩歌を翻訳するかたわら、日本に関する著書も多数。1997年には、スウェーデンの作家に贈られる、スウェーデン・アカデミー「文学賞」を受賞。スウェーデン俳句協会の設立にも携った。

ウィリ バンデ＝ワラ（ベルギー　ルーヴァン大学教授）
ベルギーにおける日本研究の先駆者として、研究及び後進の育成に尽力。ルーヴァン・カトリック大学を欧州有数の日本学研究機関として確立するとともに、日本の研究機関との学術交流にも積極的に取組むなど、日本とベルギー、さらには日本と欧州を結ぶ日本文学研究者として著名。平成12年に国際交流基金より国際交流奨励賞を受賞。正岡子規国際俳句賞選考委員。





▼川本　今日の議論のタイトルは「欧米における俳句」です。あまり形式張らないで、ざっくばらんに、自由にお話しいただくというのが趣旨のようです。どうぞよろしくお願いします。

今日お話しいただく三人の方々は、よくぞ松山にお集まりくださったと嬉しくなるような、素晴らしい方々です。その実力のほどは、これからだんだんお分かりいただけるかと存じます。

ところで、こういう方々が日本へおいでになると、よく人から尋ねられる質問があります。例えば、「あなたと俳句との出会いは」とか「何故俳句がお好きになりましたか」とか、あるいはもっと単刀直入に「お箸が使えますか」とか。(笑)いつも同じことを尋ねられて、実はうんざりしておられるようです。

例えば今、柔道をやっている外国人が日本へ来たとして、「あなたと柔道との出会いは」と聞く人は、もういませんね。柔道がすっかり国際化して、外国人が柔道をするのを、誰もふしぎには思わないからです。だとすると、外国で俳句をやる人に「なぜ俳句が好きなのか」などと尋ねている間は、まだ俳句がマイナーな、日本だけの文芸だと思い込んでいることになります。もっと言えば、そもそも「あなたと日本との出会いは」などと聞きたくなること自体、まだ日本がマイナーでエキゾチックな国だという意識がどこかあるからでしょう。つまり、俳句はとても素晴らしいと文芸だと誇らしく思いながら、その反面では、こんな風変わりなものは外国の人には分かりっこない、なぜこんなものに興味を持ったのだろう、というような気持ちがあると思います。

ところが、ここにおられる方々は、俳句研究、日本研究、そしてアジア研究の上で、それぞれの地域、ひいては世界における第一線の研究者、大変な造詣の持ち主。ある意味では我々より遙かに俳句のことや、日本のことをよくご存じの方々です。

そこで、まず最初に質問したいことがあります。「あなたと俳句の出会いは何か」(笑)。いろいろ申しましたが、やはり「なぜ俳句をやるようになったか」という点を、まず伺っておいたほうがいいでしょう。

▼シラネ　私は日本人の名前を持っていますけれども、アメリカで育ち、教育を受けました。

俳句との出会いは二つあります。一回目は高校、大学で英語俳句を読んだということがあります。ちょうどベトナム戦争の時で、1960年代です。ヒッピー時代でして、反社会的な運動、反政府、反戦争の時代です。それが英語俳句と非常に繋がっていました。ゲーリー・スナイダーという詩人は、私達にとってヒーローでした。またビーツの詩人たち、スナイダーのちょっと前の世代ですけれども、アレン・ギンズバーグ、コロンビアの卒業生なのですが、そういう人達は、私達若者にとって一種の文化的なヒーローだったのです。ただ、私はその時は日本語ができなくて、単に英語で読んでいました。

二回目の出会いは、日本文学研究に入ってからの出会いです。これは、日本の詩歌や物語の長い伝統、和歌、連歌、俳諧の中に文学論を求めていたことが一つのきっかけでした。和歌の歌論、連歌論とか俳諧論を読んでいるうちに、その中

で芭蕉の俳諧論が非常に優れているということに気がつきました。そこが二度目の出発点です。日本の文学論はただ鑑賞する論ではなくて、実作、自分で創るための論が非常に多いというのが大きい特徴です。欧米の文学論のように、ただ見てエンジョイする側、またテキストを分析する側の論だけではなくて、作る方から見る、その論が非常に目立つ。そこが非常に面白い。

▼川本　ゲーリー スナイダーは俳句とも非常に縁が深くて、今後、正岡子規国際俳句賞ともいろいろ関わりをお持ちになるかもしれません。彼はちょうどシラネさんの世代のヒーローだったわけですね。

それから、日本には文学論があるのかどうかという疑問、そして芭蕉にきわめて優れた文学論があったという発見、これは非常に面白いですね。

俳句だけに話を絞っても、日本では、実作者による俳論や実作者のための指導的な議論と、それから日本文学専門の方々の俳句研究というのは、はっきり分離しています。研究者は、どうも19世紀以来のリアリズムや実証主義をまだ信奉していて、作者の伝記だとか時代背景、あるいはテクストの確定だとか、そういうことだけを緻密にやっている。言い換えれば、俳句という詩を詩として見るという、詩学的な視点が全く欠けているわけで、シラネ先生はその面に斬り込んで、非常に大きな業績を挙げられました。

▼ヴァリエー　私もジェネレーション・オブ・1968の一人だと思います。ストックホルム大学を卒業した時に、やはり、反政府運動が非常に激しかったので、誰でも、賛成するか反対するかということばかりを考えなければならなかった。そして当時は、中国の政治、中国の古代文化、日本の古代文化、日本の古代文学、現代文学、全部が大きな波としてヨーロッパに入ってきました。そして、そこからどれかということを判断することが非常に難しかった。しかし、私一人のヒーローというか、やっぱりアメリカ人でアラン ワッツという方の書いた『ZEN』という本が非常に重要でした。その中に多分俳句の例も入っていたと思います。私は反政府運動に入っていなかったのですが、大学生はみんな政府がやったことに反対しました。日本にはもっと面白い東洋文化の表現はないのか、という目的で日本の文学を勉強し始めました。その後は、鈴木大拙の本も非常に大切だった。そこで多分初めて、俳句があるということを知りました。

スウェーデンの詩人の中でも、俳句のようなとても短い詩を書く詩人がかなりいます。例えばカール ベンバリーという詩人もそういう詩を書いた人です。今は亡くなっていますが。それからハリー マッティンソンというノーベル賞を受けた人も日本的な人で、彼は日本文学に対して非常に興味を持っていました。変な話ですが、彼は自殺しました。ノーベル賞を受けてからスウェーデン国内の批判がかなり激しくなりまして、あんな詩人がノーベル賞を受けるのは恥ずかしいとスウェーデンの新聞が書いた。そして自殺しました。

▼川本　それは俳句的であるためですか。

▼ヴァリエー　いえ、それは関係ない。ただ、まずいとみんな。（笑）でも彼は日本が大好きで、そのせいか自殺した時に、ハサミを使って自分をこうしたんです。非常に大きなショックだった。

そういう日本のいろんな影響がある時代だったのですが、柔道もわりとポピュラーでした。柔道と合気道の先生もどんどんスウェーデンに入ってきて、柔道だけじゃなくて俳句とか文学とか書道も教えてくれました。

だから一つの理由から、このために俳句に興味を持ち始めたということは言えません。しかし60年代の終わり頃から興味が大きくなってきました。

▼川本　ありがとうございました。ヴァリエーさんはメナード出版というところから『スウェーデンから見た日本の素顔』といういい本を出しておられます。それによりますと、日本のお米は世界一おいしい。お寿司とおせんべいが大好き。柔道、剣道、合気道を修行したが、現在は弓道に熱を入れて、週に四日お稽古に通う武道家でもある。そういう凄い方です。

シラネ、ヴァリエー両先生はほぼ同窓、同世代で、まず反体制というところから始められたという点が、とても面白いと思います。しかも、そうして反体制から出発した方々が、今ではエスタブリッシュメントの中心に座っておられるわけで、それは今後の世界に希望を抱かせるものですね。そして、さらに面白いのは、反体制、反権力、反エスタブリッシュメントの人々が東洋に興味を持ち、日本に興味を持ったことです。何かそれまでの西洋の伝統とは違うもの、代わり得るものを探しているところで、日本を発見された—逆に言えば、西洋を内から変えるための触媒として日本が働いたわけです。それはちょうど、ヨーロッパ19世紀の絵画で、アカデミズムが固定してしまって面白くない。そこで若い画家たちが何か他のものを探している時に、日本の浮世絵が入ってきて、西洋の絵を内から変えるための力になった。あの場合と事情が似ていますね。例えば禅であるとか俳句であるとか、反体制や伝統刷新の手がかりとして働いたというのが、注目すべき点だと思います。

同窓生と言いますと、ヴァリエーさんとバンデ＝ワラさんは本当の同窓生で、どちらも大阪外大から京都大学へ行っておられます。

▼バンデ＝ワラ　ちょうど同じ時期の国費留学生として大阪外大に在籍し、京都大学に行きました。私も68年の世代に属するもので、2つの大きなことが言えると思います。

先程も川本先生がおっしゃったように、西洋文化に対する一つの不満があって、それを補填というか、補えるような、別の文化の本質を探し出す運動という動きの中で、アジア文化史に注意を向けて、例えば仏教とか特に精神的な側面をもう少し知りたいという気持ちを持った人は結構多かったと思います。その中で、例えばジャック ケルアックとかあるいはアラン ワッツの著作を、私もほかの人達と同じように読んでいました。勿論その中には俳句というものが出てきますけれども、ただそれをきっかけに、特に焦点を俳句に絞るという気にはまだなっていませんでした。

ちょうど68年の暮れに大学に入学した時、私は東洋学を選びましたが、図書館にR・H・ブライスの著作、特に『俳句』という四冊の本がありました。その時は、少し読んだりしましたが、特に俳句に関心を持っているという段階にはまだなりませんでした。

卒業してすぐ、国費留学生として日本に来ました。ちょうどヴァリエーさんと同じ時期にいた人で、イタリア人のブランドーニさんという人がいまして、しょっちゅう俳句を書いていました。どこかへ行く時は手帳を取り出して書いたりしていた。でも日本語は余りできない人で、これは不思議だなあと思いました。彼は日本語で俳句を書けているのかなあと思った。

▼川本　日本語で書いているんですか。

▼**バンデ＝ワラ**　いや、書いてない。イタリア語で書いていた。しかしイタリア語で俳句ができるものかなと、最初は非常に不思議に思っていました。結局、日本に留学しているうちに文語を勉強することもありまして、その文語のテキストを選ぶ機会があった時に「奥の細道」を選んで、その時点で、初めて俳句とか俳文というような原書に本格的な関心を持ちました。

帰国する際には、俳句は非常に個人的な関心事項であって、ヨーロッパで関心が広いとか大きいということは全然考えていませんでした。しかし、帰国してみると、70年代の後半でしたが、ベルギーとオランダには俳句協会がありました。そこの人達は日本学者でもないし、オランダ語で俳句を書いている人で、彼らは私を呼んで講演させられたりしたわけです。その時点で、ヨーロッパで俳句がかなり詠まれているということが分かりました。自分が関心を持ち出した俳句、俳文に対して、かなりの関心を持っている人口があるなということが分かって、嬉しい気持ちでしたね。それ以降、自分の国語での俳句を嗜む人との付き合いと同時に、学問的に俳句、俳文、俳論を勉強する人の付き合いの両方があって現在に至るわけです。

▼**川本**　なるほど、どこかで俳句ショックを受けたというよりは、ご専門の勉強をしっかりなさっているうちに、だんだんそちらの方の人々からも誘われて、興味が深くなっていったということですね。

ここで、今日ご出席の皆さんが、どういう方かということを改めてご紹介したいと思います。

シラネ ハルオ先生は、白根治夫という漢字の名前もお持ちですけれども、本当はハルオ シラネというのが正しい。というのは、この方の日本語は、自分で勉強して学んだ日本語です。こういう色白のいい男ですけれども（笑）、日本語のネイティヴに見えるので、非常にご損をなさっています。勉強して自分で獲得された日本語です。

皆さん素晴らしい日本語を話されて、近ごろこういう国際会議で日本語が使えることが、いかに楽で嬉しいかを痛感しております。いつも英語で言い負かされますから。シラネ先生はアメリカで日本語を勉強して、源氏物語研究で博士号を取得されました。その『夢の浮橋』が日本語に翻訳されて、角川源義賞を受賞しています。これは、日本の源氏学を徹底的にやった上で、アメリカの文学理論の光を当てた画期的な本です。そして最近、芭蕉についてまた分厚い本を書かれましたた。その邦訳がまた角川から『芭蕉の風景　文化の記憶』というタイトルで出版され、今度こちらで21世紀えひめ俳句賞の石田波郷賞を受賞したわけです。

次にラーシュ ヴァリエーさんですが、この方も素晴らしい。大使館勤務で16年間日本におられました。そして今ではスウェーデン国会外務委員長をなさっておられますが、研究者でもあり創作者でもあり、たくさん翻訳もなさっています。そして『光』という、半分日本語で半分スウェーデン語の面白い雑誌も出しておられます。また、スウェーデン・アカデミーの文学賞をとっておられ、創作家としても第一流の方であります。

最後にウィリ バンデ＝ワラさんは、ベルギーのルーヴァン大学教授で、勿論シラネさんもそうですが、大学者です。中国学も、また禅や日本の詩の研究もなさっている。ついでに言いますと、欧米で日本研究を専攻する場合、まず中国研究から入る方が多くて、これはたいへんな強みです。中国語もちゃんとできて、日本語もできる。場合によっては朝鮮語もできるということで、我々日本の日本文化研究者よりはるかに視野がひろく、東アジアの中における日本というものを

見る目を持っておられます。だから、逆に我々こそ学ぶべき点が多いのです。正岡子規国際俳句賞選考委員会の委員なども務めていてくださって、私共とも非常に縁の深い方々です。

今日いろいろお話しいただくことにつきましては、ただ単に、西洋でも俳句が研究されているのは心強いとか、日本文化が欧米でも受け入れられて嬉しいとかいったレベルの問題ではなく、国籍はともあれ、ともに俳句に関心をもち、いっしょにそれを味わい、面白がり、作っている仲間として—さっきの柔道で言いますと、世界じゅうでさかんにやっているその仲間、あるいはライバルとして、話し合うということが大切かと思います。

さて、欧米の俳句と言っても二面があるわけで、一つは欧米で日本の俳句はどのように読まれ、研究されているかという問題と、もう一つは現実にハイクがいろんな国や言語でどのように作られ、ハイク活動がどのように実践されているかという問題ですね。

まず研究面といいますか、古典や現代の日本の俳句がいま欧米でどんなふうに興味を持たれ、読まれ、研究されているか、皆さんそれぞれの地域で俳句研究がいまどういう状態にあるかということを、ごく簡単にご説明いただければと思います。

▼シラネ　英語圏における俳句受容と日本の俳句研究ですね。これは二つになっていますが、ある意味では繋がっているところがあると思います。

その出発点は、勿論20世紀の始めのイマジスト、エズラ パウンドたちが日本語俳句に興味を覚えて、それをイマジスト運動の中に取り入れたことです。このイマジスト運動が英語詩の歴史の上では非常に大きいインパクトを与えているわけで、それはアメリカの詩人もイギリスの詩人も、エズラ パウンドは両方に繋がっていますが、それが戦前の一番大きい成果です。

戦後はアメリカにおけるビーツの運動、反体制運動、それがだんだん研究に繋がってきて、戦後の一番大きい刺激になったのはイギリスのブライスの本ですね。『俳句』という四冊の本。あと川柳の本とかいろんな俳句選集を出して、戦後のアメリカ、イギリスの俳人達は、みんなブライスの翻訳を勉強して英語俳句を作った。ブライスは非常に禅に影響されたわけで、英語圏の俳句受容の一つの流れは宗教と関係しているんです。

もう一つは、私の世代ですけれども、それに刺激を受けながら反発する。要するに、俳句をただ禅のコンテキストで読むだけじゃなくて、和歌、連歌、俳諧といった日本の長い詩歌の伝統の中で読む。勿論芭蕉は禅の影響を少し受けていますから、禅の影響が全くないと言えませんが、ブライス達は自己と自然、自己と対象が一緒になって、ワンになって、それこそが俳句であるということを非常に強調したわけです。精神的な面をブライスは重視しました。今は連歌研究がアメリカではかなり行われていて、連歌研究からやっと最近、俳諧や近代俳句の研究に繋がってきていると思います。

もう一つは紀行文です。俳句関係の本の中で何が一番売れるかというと『奥の細道』の英訳です。大学生も高校生も授業で教える時は、一つの俳句よりも複数の俳句が、またそれが日記の中に入っていると更に効果がある。俳句は特に、日本語から英語に訳す時に失なわれてしまうところが多いのです。けれども日記や紀行文の中に入れるとそれを補う形になる。『奥の細道』が非常に大きい原動力になって、『奥の細道』を研究する人がだんだん出てきている。俳句だけじゃなく

て、日記あるいは紀行文の伝統があるということも注目されるようになっています。複数の角度から研究が進んでいるという気がします。

▼川本　そうですか。第一回の正岡子規国際俳句大賞を受けられたフランスの詩人イヴ ボヌフォアさんも、『奥の細道』を読んでショックを受けたことを、非常に強調されておりました。アメリカの学生が『奥の細道』を読むとき、かれらに一番アピールするのはどんなところでしょう。

▼シラネ　一つは旅する。要するに大都会から脱出して新しい刺激を求めるそういうイメージがある。

▼川本　それはケルアックの小説『オン・ザ・ロード』（路上にて）とちょっと繋がる。

▼シラネ　似ています。ケルアック自身は『奥の細道』の翻訳を読んで、自分もオン・ザ・ロードという気持ちになったと思います。要するに、家が固定したものではなくて世界が家になる。それで自然と接触する。これがある意味で非常にロマンチックなアピールがある。そういうイメージがあって、学生は自分も書きたいということがある。自分が旅して自分が書くという、それが一つ。

もう一つは、俳句というものは、どこで書いて、どうして書いたかということを知らないとなかなか分からない。特に学生達は。だから日記があると、芭蕉が平泉の古戦場に行ってあの「夏草や」を書いた、そのコンテキストが分かる。これで詩人の経験と俳句の関係が初めて分かるんですね。日記のコンテキストの中で。

▼川本　多分、日本人にとっても『奥の細道』は、そういう意味で芭蕉入門、俳句入門にはなっているでしょう。

俳句がひろく西洋に伝わったのは、主としてブライスの『俳句』という本のおかげです。これは画期的な本でしたが、禅を中核に据えて俳句を説いたもので、俳句はまず禅を通じて西洋に受け入れられたわけです。けれども、ある意味でそれが強調され過ぎたために、俳句はすなわち禅だという短絡が起こってしまいました。けれども、シラネさんがおっしゃるには、最近では文学として、詩として、日本文学の伝統の中で連歌とか紀行文とかとの繋がりの中で、改めて見直そうという動きがあるという。ちょうど今、世界では脱宗教化が叫ばれていますけれども、ようやくアメリカの俳句研究においても脱宗教化といいますか、世俗化が進んでいるということは重要な指摘です。シラネ先生は、単に文学史的な観点からだけではなくて、江戸という文化全体のダイナミズム、「雅」と「俗」がいつも相互作用しながら動いていく、そうしたものに焦点を当てながら、今度の本をお書きになったわけです。

▼ヴァリエー　スウェーデンは如何に小さい国であるかということが、俳句を勉強する時によく分かります。スウェーデン人はほとんど英語ができますから、もし重要な本があれば、そのまま英語本を買って読みます。例えばシラネ先生の本をストックホルムで買いました。今二冊持っていますけれども、ストックホルムの本屋さんで、英語で書いた本を平気で出しています。

▼川本　ジャパニーズ何とかというコーナーがありますか。

▼ヴァリエー　ありません。むしろ東洋史とかフランス文学、東洋文学それから面白い本とか、いろんなコーナーがありますが、俳句を紹介するスウェーデン語で書いた本がほとんどありません。王立スウェーデン図書館で、スウェーデン語で書いた本が幾つあるかということを調べましたら全部で26冊あります。だから、ほとんどないと言っていいでしょう。

スウェーデン語で俳句を紹介した人というと、重要な人が三人ほどいます。ロシュ エンルンドという人、この人は今は亡くなっていますが、ター エリック ボールンドという人はまだ生きていて、多分85歳じゃないかと思います。それから早く亡くなった方でジョン リンティレスクというヨーロッパの南から入ってきた移民の人ですが、俳句をスウェーデン語で紹介しました。しかし、これは英語から翻訳した俳句です。だから、まずアメリカとヨーロッパで俳句を紹介した本の考え方をそのまま取り入れています。自分の分析よりもほかの人の分析を読んで、俳句はこういうものだということをスウェーデン語で書きました。だから非常に面白くないと言ってもいいかもしれませんが、（笑）非常に大切なことをやりました。やっぱり俳句をスウェーデン語で紹介したということも言えると思います。

スウェーデンでは本当の俳句というか、日本語から翻訳した俳句がどんどん紹介されて、俳句はどういうものかということが分かるようになっていると思います。そしてそれはやはり日本語を勉強した人が、この前に書いたことは確かではないということと、もっと面白い面もあるし、もっと深いところもあるからもっと紹介しなければならないという理由で、だんだん本が出てきています。今は非常に面白い時期だと思いますが、多分50年代のアメリカと同じような雰囲気だと思います。

▼川本　ちょっと不思議なのは、みんなたいてい英語で読むとおっしゃいましたね。そうしますと、例えばシラネさんの本をスウェーデン語にわざわざ訳する必要はない。しかしそれなのに、英語の原本から俳句をスウェーデン語に訳する必要があるというのは、読者層にいろいろレベルの違いがあるわけですか。

▼ヴァリエー　そうですね。レベルがいろいろあります。みんなまだ俳句というと三行が必要と思っています。本当は一行で書いてあるということは誰も考えないと思います。

▼バンデ＝ワラ　問題というか領域が三つありまして、つまり日本学と言うべき研究領域と、それからその研究の成果をより広い読者層に読まれていくという問題と、それから各国語での実作。

研究そのものに焦点を絞るとして、戦前の状況について言いますと、英語圏のチェンバレン、ドイツ語圏だとカールフローレンツ、あるいはフランス圏ではジョルジュ ボノーというような一流の学者によって俳句が紹介された。ただ紹介されたといってもこれは読者数がごく少ない時代でして、結局あるとすれば日本学会に限られたようなものでしょう。

戦後では、英語圏の研究成果が主導的というか、先駆的な役割を果たすようになると思います。例えば、ブライスの本が勿論読まれているし、それが一つの規範的なものになると思いますけれども、そのブライスが影響を受けた鈴木大拙の本もかなり読まれています。次の段階として、やはりヨーロッパの日本学者が『奥の細道』などの有名な古典作品を翻訳する。例えばドイツ語圏だとドン ブラディという人が、一茶とか蕪村とかについて本を出す。それからフランス語圏だとシフェールが、芭蕉とか蕉門の作品を訳します。数から言いますと、英語圏の学者の方が多いかもしれないけれども、ただ一流の学者の一部がやはり俳句の研究をやっているというような状況だと思います。より広い読者層がその研究成果を読み始めるのは、やはり戦後になって50年代だと思います。その時点では、やはりブライスの著作が非常に重要な役割を果たす。それが基本的な歴史の展開をまとめた表現だと思います。ただこれが研究そのものの問題であって、やはり読者層がより広くなるきっかけとなったのは、アジア文化に対する関心が高じた時代がその背景にあると思いますね。

▼**川本**　それは大体何年代ですか。

▼**バンデ＝ワラ**　やっぱり60年代。

▼**川本**　60年代からですね。一種の反体制といいますか、欧米の伝統以外のものを求めるような動きと連動している。なお念のため、ベルギーの日本学にまず影響を与えたのは、皆さんご存じのハーンとある意味で対立していたチェンバレンの英語による日本学の研究。それからカール フローレンツというドイツ人。この人は日本へ来て大論文を書きましたが、俳句紹介者として有名です。それからフランスについて挙げられたのは、ジョルジュ ボノーですね。他にもクーシューなんかがいましたけれども。

▼**バンデ＝ワラ**　クーシューは学者というよりも実作の領域の方に入れたいですね。

▼**川本**　学問としてはボノーの影響が大きかったということですね。

▼**バンデ＝ワラ**　そうです。クーシューは日本語は余りできないと思いますし、彼自身が初めて俳句をフランス語で書き出す。しかもそれは単独の句作ではなくて連歌的な感じでやり出すわけです。１９０５年。ですからこれは本当に先駆的な試みだと思いますね、クーシューの方は。ただ、日本学の中で、俳句の研究というものは決して主流ではないと思います。長い間、亜流的な位置づけであったと思います。今でも学会に出席してみても、俳句、俳論などについての発表の数が少ない。つまり有名な物語とか、散文的な古典とか、和歌、歌論とか、そういうような内容のものの方が、主流的な地位を占めているような気がします。

▼**川本**　戦後は英語圏がリードして、ドナルド キーンさんの本などが非常に影響を与えたと思います。それから勿論、その前にブライスさんの『俳句』があります。ドイツでは、ドン・ブラディ。もっと最近になりますと、フランスのルネ・シフェールさん。この人は翻訳をたくさんした人で、『源氏物語』のフランス語訳も手がけた人です。しかし、俳句の研究というものは日本文化・文学の研究の中ではまだまだ劣勢であって、やはり物語論、歌論の方が強いということは、ちょっと注目しておくべきことかと思います。

それでは、二つめの問題に進みましょう。俳句は現在、欧米の各地でどのように生きているか。つまりどのような人々が、どんなふうにして俳句を作っているか。そしてさらに、これは微妙な問題ですが、俳句がどのように見られているか、これも興味深いところです。

▼**シラネ**　一つは俳句の形式の問題があると思います。ご存じのように俳句というものは五七五。そして普通季語を含みます。勿論、無季俳句運動はありますけれども、主流は季語が必須です。そして切字。この三つが一応俳句の中心的な柱になっています。

英語俳句になりますと、五七五というふうに音律数でいくのではなく、二行か三行で短詩としての俳句を構成する。今は三行が中心になっていますけれども、たまに二行、一行もあります。

二つ目は季語の問題ですけれども、英語俳句では基本的には季語はないと言っていいと思います。これが日本語俳句と英語俳句の一番大きい違いで、私の計算では英語俳句の半分ぐらいは季節感が入っていますが、半分だけです。日本の俳句を見れば95％は季節感というか、季語が入っています。このことは、英語俳句の人達にとって非常に大きい問題です。

日本の俳句に季語があるということは知っていますから。一つはアメリカでは地域によって全然気候が違います。フロリダとニューヨークの気候は、ほとんど共通したところはあり得ないぐらい違う。日本と基本的に季節の形が違うということと、もう一つはやっぱり長い伝統を持つ季語に相当するようなものが少ない。

それで気がついたのは、最近こういう傾向があると思うのですが、季語がないから自由なんです。要するに、季語がないから別に何でも書いていいというところがあるわけです。大きく歴史的に見ますと、１９５０年代は自然詩が多かったんです。要するに、アラン ワッツとかゲーリー スナイダーとかは、自然を大事にして、反体制、反都市の運動で俳句を通して自然を大事にする、自然と接触する、ということを強調した。だからそういう天然界を中心にして俳句を作りました。禅の影響もありますが、それが１９５０年代、60年代。それで過去10年か15年はだんだん人事の方に興味の焦点が変わってきている。別に自然にこだわる必要はないんじゃないかと。

もう一つは、英語俳句人口の大部分が大都会に住んでいますから、当然映画館とか地下鉄とか、日常生活が俳句の素材になる。例えば、離婚、恋愛、環境問題とか、そういうのが俳句のトピックになってくる。要するに季語がなくてもいいようなテーマです。そうすると、私から見れば、川柳に近いようなものが多くなる。俳句と言いながら、日本人から見れば川柳のようなものが多いと思います。切字もない、季語もない。そして滑稽なところがある。社会を対象にしている。ただし川柳と違うのは、風刺的なところが少ない。だから川柳的なところはあるけれども、日本の、特に古い川柳とはちょっと違う。これを私は悪いとは思っていません。これは英語俳句の独特な発展で非常に面白い。

▼川本　欧米の俳句は禅から始まった。そして、その影が薄くなったあとも、自然詩であるという通念は根強く残っていた。それも、やはり東洋的でエキゾチックな自然との合一、ないし調和といった縛りがかかっていたようです。とはいえ今や、アメリカの俳句は独自の境地を開きつつあって、それぞれの土地、それぞれの環境の中で、もっと人間詩としての発展をしていると。ある意味では、川柳にも近づいているわけですね。

実を言うと、芭蕉を禅と言い切るのも変ですけれども、芭蕉を自然詩人と言うのもやはり、エキゾチックな見方に傾き過ぎるのではないか。芭蕉はたいへん人情に興味を持ち、俗なこともしっかり見て俳句に定着しています。どうも西洋では、自然詩人という面が強調され過ぎたと思います。だから現在、もっと当たり前に普通の人間の詩になりつつあるというのは、非常に面白い展開かと思います。

▼ヴァリエー　スウェーデンやスカンジナビアでも俳句が生きています。若いのですが、これからどんどん大きくなります。非常に人気のある詩の形だと思います。俳句とは何かというような質問が、新聞の中でもどんどん出てきます。学校でも、俳句を書いてくださいと先生方が今言っています。

スウェーデンでは、五七五のシラブルを数えているんですが、勿論音字よりももっと長くなります。いろんなことが言えると思います。シラブルを五七五にするとやっぱり俳句が長くなります。

▼川本　どういうことでしょうか。5シラブル、7シラブル、5シラブルで1句ですね。

▼ヴァリエー　例えば東京というと。

▼川本　ああ、スウェーデン語で5シラブルだと、日本語の5シラブルの倍ぐらいのことが言えてしまうということですね。

▼**ヴァリエー**　東京はスウェーデン語では二つになります。日本語では四ですね。だから長くなります。一年ぐらい前に「俳句」という雑誌を作り始めました。俳句がたくさん投句されまして、みんな長過ぎる句を書いていました。何が良くないかということを聞かれると、まずもうちょっと短くしてくださいと言わなければなりません。それから季語が二つ、三つ、四つあって……。

▼**川本**　四つ入る。（笑）それは日本では厳禁です。

▼**ヴァリエー**　何とかしてよと言わなければならないんです。（笑）

▼**川本**　そういうことの中心にヴァリエーさんがおられるわけですか。

▼**ヴァリエー**　三年前にスウェーデン俳句協会を始めました。そして一年前に、「俳句」という雑誌を出しました。毎日いろんな俳句が入ってきます。それを読まなければならない。辛いです。（笑）でも非常にいいのも入ってきます。だから非常にポピュラーになってきています。大きな俳句賞も一回やったことがあります。賞品は綺麗なノートだけだったんですが、みんな賞を取りたいということでたくさん入ってきました。だから俳句が生きているかという質問に対しては、まず生きてますと答えなければならない。

▼**川本**　生んだ、そし育てつつあるということですね。

▼**ヴァリエー**　そうです。12歳です。

▼**川本**　それじゃもうかなりな歳だ。みんな季語は絶対と思っているわけですね。だから思わず季語を入れ過ぎる。

▼**ヴァリエー**　作り始めましてからすぐ派閥に……。（笑）だから自由俳句と五七五を必ず守らなければならないという人もいます。そういう派閥は三つぐらいがあると思いますけれども。

▼**川本**　日本で起こったことがそのまま既に……。（笑）

▼**ヴァリエー**　そしてお互いに喧嘩します。

▼**川本**　それはお盛んで誠に結構です。

▼**バンデ＝ワラ**　先程、研究の流れを簡単にまとめて、より広い読者層を得たのが60年代であると言いましたが、結局それが今後の問題にも関係しています。何故かというと、より広い読者層が読んだのは日本の古典的俳句の翻訳です。しかも、日本学者の中での、古典的な学者の翻訳を読んだわけです。それが規範になった。したがって、いろんな時間的な錯覚を起こすような事情が起こりました。

例えば今、ヨーロッパで俳句を実作している人達は、子規以降の俳句、文学についてほとんど何も知らない。特に20世紀における人間探求派とか、社会的な傾向とか、そういうことについてほとんど無知と言っていいぐらいの状況です。

それから、日本学の古典的な学者が試みたのは、既に西洋で知られた形式との類似性を求めて翻訳を試みることでした。例えば、チェンバレンはエピグラムとかに行ったり、あるいは最初のカトランとの類似性を見い出したりして、四行に翻訳してみた人もいるわけです。一般的な受容が非常に古典に偏り、しかも俳句翻訳の歴史の中でも、古い部分に非常に偏っているというのが一つの特徴じゃないでしょうか。したがって、音節の重要視とか、少なくとも英語圏以外ではまだ非常に支配的ですね。それが、英語圏の実作者の人口が多いし、年季も入っているということで、時間が経つにつれて、い

ろいろな事件的な方向に行くわけです。やはりこれは英語に向かないとか、そういうような字画に対していろいろやってみますが、ほかの言語圏ではまだそこへ行かない。

それからもう一つ、言語そのものの特色もあると思う。例えばオランダ語、ドイツ語、イタリア語では、やはり音節が、発音とスペルがかなり近いので、どうしても音節でいきたい。ですから、ドイツ、オランダ、イタリア語圏ではやはり音節を数えるのが支配的です。ただフランス語の場合は、特にスペルと発音の差異というか、隔たりが大きいでしょう。だからフランス語では音節を数えるのが難しい。だから音節を数えるのではなくて、ちょっと均衡の取れたような五七五というぐらいのその割合、比率で均衡が取れていればいい。だからフランス語と英語では、音節をそんなに重要視しない。それがもう一つの西洋の中での特色ではないかと思います。それから、形式の上では三行に固守する。それから禅的な精神が盛り込まれていること。それから自然詩であるということ。

それからもう一つ、俳句モーメントというのがよく言われていて、私も何度も実作者の方から俳句モーメントとか俳句モーモンと言われていますが、日本では全然出会わない言葉ですから不思議に思いました。

それから川柳と俳句の違いです。どうしても川柳と俳句の境界線をはっきりしようと思っている。ただ、それは日本の俳句と西洋の俳句の類似性が、受容が内容の上で行われたものでして、内容の上で境界線を引こうと思っているわけです。でもそれが非常に困難である。だから何度も定義付けを試みて、いつも失敗に終わる。

何故かというと、例えば西洋詩の中ではソネットというのがあります。ソネットはイタリアの形式で、ルネッサンス時代になると、西洋各国でもソネットを書く。ところがこれは形式の上での受容でしょう。やっぱりイタリアと同じような形でソネットの形式を守る。ところが日本の形式はヨーロッパの形式に翻訳するのが非常に難しくて、結局残るのは三行だけ。しかも三行は元々日本では書いてない。日本は一行で書く。勿論五七五というのはありますが、後天的な翻訳者が、日本の俳句を西洋各語に翻訳してみる段階において、何にしようかということで五七五音節を三行にしてしまったわけです。それが何か実作者にとって一つの鉄則になったわけです。色々な面で、非常に大きなギャップが生じているのが一つの特徴だといえます。それ自体も、一種のショックと言えるかもしれないですけれども。

▼川本　今うかがって本当に意外でした。ベルギーにおける俳句というのは極めて伝統主義的だと。古典俳句・日本俳句研究者の発言力が強くて、厳密に日本の伝統を守る。つまり、はるか遠いベルギーで「日本」をやっているというような感じですね。古典的な俳句で、三行、そしてもちろん季語は入れなきゃいけない。

▼バンデ＝ワラ　それは難しいですね。特に三行というのが一番。

▼川本　五七五は守る。自然詩である。そして、どちらかというと禅的であるということ。まわりでお聞きの皆さんに申し上げますけれども、「俳句モーメント」というのは、日本ではまったく言われていないことで、私も初めは知りませんでした。欧米で俳句を作る時には、俳句モーメント、俳句の瞬間というものに注目する。これは一種禅的なものでしょうね。

▼シラネ　元々、ヤスダが言い出したものじゃないでしょうかね。

▼川本　インディアナ大学の先生で、ケネス ヤスダという俳句研究の先駆者がおられますが、彼が言い出した言葉ですか。

▼シラネ　そうだと思います。禅と関係しているんだと思います。悟りの瞬間。

▼**川本**　それを掴まえる。

▼**シラネ**　自然と自己が一緒になって世界全体を把握する。さらに、小さいものを通して全体を見る。特に瞬間というところが強調されているんです。

▼**川本**　俳句を翻訳して欧米の人々にすんなり受け入れてもらうために、もともと西洋にあった短い詩形がよく使われます。バンデ＝ワラ先生によれば、一つにはエピグラムが使われた。エピグラムというのは、形式は固定していませんが、風刺ぴりりと利いた短い詩のジャンルで、古代ギリシャ・ローマ時代からある形式です。もう一つはオマール　カイヤームというペルシャの詩人の『ルーバイヤート』という短詩集で、岩波文庫にも翻訳が入っています。これは四行詩で、人生は短いからせいぜい今のうちに楽しもうなどという、東洋に通じるような無常観も入っています。こういう四行詩の形に訳してみたり、いろいろやってみるわけです。だから、そういう既成の形式を借りないで、ともかく三行でいいんだということ、それ自体が、西洋で俳句が認知される大事なきっかけになったと思います。

　さっきも申しましたが、ベルギーでは古典的なものが非常に重視されて、子規以降のことや、もっと社会的なことや人間的なことが今日の俳句に入っているとことなどは、余り知られていない。

▼**バンデ＝ワラ**　重視されているというよりも、そういう古典的なものが、結局土台を作ってしまったわけです。今やもう忘れられているかもしれないけれども。それでもって一つのジャンルが成立して、一人歩き始めました。フランス、オランダ、ドイツもそうですね。

▼**川本**　それでは、欧米における俳句のイメージはどんなものでしょう。どういうものとして、俳句がそれぞれの地域で生きているか、受け入れられているか。多分、短いということは非常に大事なことですね。これは便利というか、やりやすいというか。例えばソネットを一つ書くのは大変なことです。専門家でないと書けませんが、俳句ならわずか三行でいい。ある「モーメント」をつかまえて、さっと書き留めるわけです。そうした俳句は学校の作文教育で盛んに使われていて、まことにいい傾向かと思います。

　さて、皆さんそれぞれの地域で、どんな人々がどのようなものとして俳句活動を行い、そこにはどんな楽しみや意義があるのでしょうか。例えばヴァリエーさんも、スウェーデンでそういう運動を興された時に、どういう人々が何を求めて俳句に入ってくるのか。それは西洋の文化や生活の中でどんな意味を持っているか。そういうことを伺いたいのですが。

▼**シラネ**　一つは、大体俳句グループがあるんですね。勿論一人でやっている人も多いのですが。特にニューヨーク、ボストン、サンフランシスコなどの大きい都市にそれぞれ組織があって、毎月会うということ。

▼**川本**　それはかならずしも日系の人とは限らないんですね。

▼**シラネ**　はい。これは英語俳句をやっている人達が俳句雑誌を出して、それを出すために組織があって一応指導者がいる。それが日本とちょっと似ているところがあると思います。

▼**川本**　結社ということ。

▼**シラネ**　はい。そういう会に呼ばれていくことがあります。

▼**川本**　かなり接触を持っていらっしゃるんでしょう。

▼**シラネ**　そうですね。いろんな人が入っていますね。弁護士、ビジネスマン、主婦、学生。貧しい人達からお金持ちまで。これはかなり幅広く、社会的にこれというタイプという感じはしませんが。

▼**川本**　やはり知識層が中心ですか。

▼**シラネ**　そうですね。一応大学を卒業している人達で、シックスティーズの人達が多いです。

▼**川本**　やっぱり。（笑）

▼**シラネ**　だんだん歳を取ってきていますけれども。こういう階層とか、こういうタイプというよりも、いろんな人がやって、それが一つの交流になっている。例えば、最近はガンの問題で患者さんが俳句を作る。そういう小さい運動ですが、現在の社会の問題を取り上げてやっているという気がしています。

▼**川本**　そこには人間同士の触れ合いがある。例えば西洋の文学作品は、個室のなかで一人で書きますけれども、みんなでやるということはとても重要でしょうか。

▼**シラネ**　誰でも参加できる。西洋の大きい伝統の中では、詩人というのは特殊な才能のある人で、普通の人はなれないのですが、英語俳句の大きい魅力は誰でも参加できることでしょう。それで、グループでやるから誰かに助けてもらう。頑張ればいつか活字になる。これは非常に大きな楽しみになっているようです。（笑）

▼**川本**　そうですよね。普通の人の作品が活字になる。

▼**シラネ**　これは本当に大きいことですね。もう一つ、自分で俳句雑誌を作る。自分の手で書いたりいろんなことが行われています。

先ほどの問題ですけれども、一方では、俳句は欧米の学問の世界では主流ではない。俳句研究はちょっと軽く見られている。ということは、普及しているからこそ学問的にはまともな対象とされていないというところはあると思うのです。うちの息子が小学校二年のときだったと思いますが、最初の作文は俳句でした。まだ文章を書けない子供達が俳句を書く。これは文章にならなくてもいいような英語。英語かどうか分からないような……。今のアメリカでは俳句というものは、小学校の言語教育と繋がっている。だから知らない人は、俳句というのは子供がやるものだと思っている。大人になったらもう卒業するという偏見を持っている人もいます。

▼**川本**　積木やレゴを大学で勉強するかというような問題になる。（笑）

▼**シラネ**　ある意味では、それほど普及しているということですね。

▼**ヴァリエー**　最後のところは非常に違うかもしれませんが、非常に人気のある詩だから嫌だという人はスカンジナビアでは少ないと思います。

▼**川本**　まだ育ちつつあるということですね。

▼**ヴァリエー**　そうですね。後は、ほとんど同じことが言えると思います。グループがあって楽しいから一緒にやりましょうとか、そういう雰囲気がどんどん広がっています。どういう人が俳句を書いているかということになると、女性が多いということがスウェーデンでも言えます。（笑）どうしてか分からないのですが、スウェーデンでもそういうふうになってしまいました。それから年齢でいうと、歳を取っている方もいますし、若い人もいます。僕が入っているグループ

の中では、お母さんとその娘さんが一緒にやっている例もあります。
　それから俳句を見ますと、自然が入っている俳句が勿論多いのですが、スウェーデンの現代詩の伝統の中でも、そういう自然からインスピレーションを持って詩を書く人がまだ多いのです。そこはスウェーデン、スカンジナビアと日本の似たところではじゃないでしょうか。

▼川本　昔から自然詩の伝統。それは珍しいですね。

▼ヴァリエー　はい。もう一つ似たところが名前を見ますと、スウェーデンの名前を翻訳するとほとんど日本的になります。例えば、川山さんとか林山さんとかそういう自然の現象を使って、スカンジナビアの名前を作ったんです。

▼川本　ドイツだと、椅子の足だとか、石が一個とかいうのがありますね。

▼ヴァリエー　ドイツと違います。スウェーデンでは熊とか動物も入っています。鳥の名前も入っている。僕の名前を翻訳しますと狼島となります。

▼川本　スウェーデンで自然詩の伝統があるというのは非常に面白い。ヨーロッパの詩というのは人間中心で、神様のもとで自分個人というものがどう生きていくかといった詩が多いのですが。自然との接触がもっと深いという。
　ところで、俳句の作者に女性が多いというのは、私はしごく当然で、良いことだと思っています。というのは、男性は社会で他に発言の場がいろいろあるけれども、女性には少ない。ところが俳句によって、主婦、女性が創作の声を得た、詩を作るチャンスを得た。これはとても大事なことではないでしょうか。女性が発言の場を得たというのは、俳句の重大な効用であって、欧米でも同じことではないかと思います。

▼バンデ＝ワラ　ベルギー、オランダ、ドイツ、フランスあたりでは、やはりそういう同人的な、或いは結社的な色彩も勿論あります。日本ほどではありませんが、ややそういう傾向が見られる。何故かというと、例えば各市には定期的に集まる人が何人かで集まったりして、作品を持ってきて、それをお互いに批評し合ったりするわけです。伝統的に言うと、いわゆる詩人とか作家は、余り好まないでしょう。あるいは余りそういう傾向がない。つまり人と話し合って批評をしてもらったりしてそれを改作するとか、それはどっちかというと、ちょっと毛嫌いというか、そういうことがあります。

▼川本　沽券に関わるという感じですね。

▼バンデ＝ワラ　そうです。それが一つの大きな特色であると同時に、恐らく主流的な文学からややもすれば貶された理由の一つでもあると思うのです。そういうのを好まない。やはり個人主義というのが、文学界においては非常に強いですから。
　そういう結社的な動きもあって、ほとんどの国では俳句協会があります。その協会から雑誌を出す。機関誌ですね。例えばベルギーだと、既に76年に非公式ながら俳句協会が発足する。それからオランダは80年。オランダとベルギーの協会が合同で機関誌を出す。ドイツあたりも少なくとも80年代から雑誌を出すようになった。フランスでは雑誌は出ていないですね。個人的に俳句を創る人が結構いるのですが、余り連絡し合わずに、結社の傾向も余り見られない。

▼川本　最も個人主義的な……。（笑）

▼バンデ＝ワラ　かもしれないし、あるいは距離もあるから、例えばブルターニュとかフランスの南部で俳句を書いて

もなかなか会えない。つまり移動が大きいですから。

ただ逆に、ドイツあたりではかなり結社的な傾向が強くて、年次会議もやりまして、かなりの人数が出席します。私も一度それに出席させてもらったことがありますけれども、一般的に言いますと、恐らく女性がやや多く、年寄りが多い。これは一つの特色です。

イギリスの方でもわりと古くて、ブリティッシュ・ハイク・ソサエティというのがありまして「ブライズ・スピリット」という雑誌を出しています。そういう点ではよく似てますね。フランスだけはその雑誌がないというところに特徴がありますね。

▼川本　最後におっしゃったイギリスの俳句雑誌『ブライズ　スピリット』というのは、たいへん凝った題名です。まずR・H・ブライスという人が、俳句運動に大きな影響を与えた。それから、19世紀イギリスの詩人シェリーが、有名な詩のなかで「おお、汝、陽気な魂よ」（ブライズ・スピリット）と、ヒバリに呼びかけた。そして、今度は20世紀に、ノエル　カワードというイギリスの人気劇作家が『陽気な幽霊』―「スピリット」には「幽霊」という意味もありますから―という芝居を書いた。そういう含みをすべてもたせた上で、「ブライス精神」という誌名にしたわけですね。

日本だと、結社的に動く、詩や芸術や芸能について結社的に動くのは当たり前です。何でも結社的になって、クラシック音楽でさえ結社的になっていると思いますけれども、そうして集団でやること自体が、欧米では不思議で変わっていて、その面白さに目覚めるというか、そこに惹かれる人も多いわけですね。

▼バンデ＝ワラ　俳句雑誌では実作も発表すると同時に、少し学問的な論文、小論などを載せたりしてかなり内容がまちまちです。わりと充実した内容ではありますけれども、機関誌ですから年に四回しか出ませんが、そういうものが、もうベネルクスあたりは20年以上経っているし、ドイツも同じぐらいの期間です。

あと、俳句について言えば、今までの文学というと勿論、他地域からの受容の例がある。先程のソネットとかですね。同じ文化領域に属するものであるためか、形式までかなり完全に受容できたわけです。勿論イタリア語だとかラテン語だとその旋律の方式が違うのですが、ゲルマン族の方に転移されると違うのですが、一応何とか。だから理解できなくても、見た目でこれはソネットだとすぐ形式の上では分かる。あるいは形式といっても長さとか行数だけじゃなくて、俳句の場合はいろんなものが取り落とされていて、結局残るのは内容だけ。だから私は定義付けを読むたびにある意味でちょっとガッカリする。俳句は、何とかの内容のものであるとしか言えない。

▼川本　内容で規定するんですね。

▼バンデ＝ワラ　そう。内容で規定するというのは、非常に例外的というか異例的であって、不満なところです。その辺は、西洋における俳句のこれからの存続にも関わることだと思っています。要するに、これが短命のものになるか、本当にずっと長いこと生き残るものであるか。その点においては、内容だけではいけないところがあると私は思います。例えば日本語の俳句だと、エディプスとか言語的に凝ったような側面もある。それを現代の西洋の俳句を読みますと、余りにも散文的なものが多い。ただ一つの発言を三行に書いただけに留まる。そういうのは生き残らないと思うのです。

だからもう少し凝った、いろんな修辞的な手法を生み出して、しかも一つの伝統を作って、それで始めて日本みたいに

俳句も長生きできるのではないかと思っています。

▼**川本**　英語とドイツ語、あるいはドイツ語とフランス語の間でさえ、ある形式を移植すると、ものが変わる。形式のもつ感じが変わるばかりでなく、形式そのものが微妙に変わったりします。だから、日本語のものが向こうへ行った時に、俳句などの形式がどう受け取られ、その言語にどう適応していくかというのは難しい問題です。だからつい、内容のことばかり、テーマのことばかりに目が行きがちですが、それだとまったく違うものになってしまう可能性もある。これは論じると切りがないところですけれども。

▼**ヴァリエー**　西洋では、それぞれの国の俳句はどこへ行くかということは、これから非常に面白くなると思います。現代詩や俳句にも国民性が出てくると思います。フランスの俳句はどこへ行くか。ベルギーの俳句はどこへ行くか。北欧の俳句はどこへ行くかということが、これから非常に面白くなる。

スウェーデン、北欧の俳句というと、やはりポエジのある俳句がこれから大切になると思います。スウェーデンでは、現代詩の伝統が物凄く強いのです。どうして現代詩の伝統が強いかといいますと、その理由は多分ポエジの精神が非常に人気があるからです。スウェーデン、北欧ではポエジが非常にポピュラーです。

▼**川本**　詩が愛されているわけですね。

▼**ヴァリエー**　愛されていますし、尊敬されています。そして俳句を見ますと、ポエジのない俳句は余り面白くないとみんな言っています。だからポエジのある俳句という表現は難しいかもしれないが、やはり詩人である俳人が面白いと思います。

▼**川本**　本当に詩として優れたものとして書かれなければならないという意識が強い。

▼**ヴァリエー**　そうです。そのことは、これからの北欧の方針になると思います。

▼**シラネ**　二つのポイントがあります。一つはフィクション、ノンフィクションの問題です。今までの俳句はノンフィクション。要するに、自分を語る私小説的な発想が非常に強い。多分日本の現代、近代俳句もそういう傾向があると思っているのですが、これからはフィクションの世界とかサイエンス・フィクションとかいろいろな可能性が出てくると思っています。特に季語のない世界では、いろんな可能性が出てくる。

それからもう一つは、バンデ＝ワラ先生がおっしゃったように、欧米は古典俳句をベースにして、現代が古典と一緒に

同世代みたいに存在していますけれども、これからは日本の近代、現代俳句がもっと紹介されるのではないか。私はそれもやりたいと思っているのですが。

▼川本　そうですか。期待しています。

▼シラネ　そうしたら現代のいろんな動き、社会的な俳句とか人間探求など、現代の日本の俳句のふくらみや可能性が欧米の俳句人にも共感をもってむかえられるのではないかと思っています。そうすると、どんどん開いていく。今のところ現代俳句が基本的に紹介されていないことが大きい問題だと思います。

▼川本　これは大切なご指摘ですね。ありがとうございます。それからフィクションという問題ですが、日本では写生、写生と言っているけれども、連句というのはフィクションです。別にいつも現場で詠んでいるわけじゃなくて、色々な場面を思い出したり、想像したりして、盛んにフィクションを作り出している。発句でさえ、家へ帰ってから遠くの風景を詠んだりするわけですから。そういう問題もあるし、それから現代性という問題もある。

そもそも芭蕉は「新しみ」ということを一番重んじました。「不易流行」と言うけれども、流行の方をずっと大事にしていると思います。今ということですね。今どう書いていくかということが、俳句においては命です。新しくなければ俳句じゃない。多分、いま芭蕉が生きていたら、喜んで国際俳句文学会長になっていただろうと思います。（笑）決してワビ、サビで、ただ草庵に住んでいる人ではなかった。彼は皆さんを大歓迎したことでしょう。

どうも長時間ありがとうございました。

当日句会

授賞式・シンポジウム参加者を対象に、当日句会を開催しました。

と　き：平成14年12月1日午後
ところ：愛媛県県民文化会館　サブホール

募　集：雑詠　一人二句まで

選　者：相原左義長「虎杖」代表
上原白水　「泉」主宰
髙石幸平　「柿」主宰
対馬康子　「天為」編集長

特選句

○相原左義長　選

小鳥来る小鳥の名前キム・ヘギョン　相原澄江　松山市
錦木に声をかければ散りそうな　有光米子　松山市
新豆腐地道に生きて母を知る　松下晴江女　松山市

○上原白水　選

縄跳びの輪を秋風とくぐり抜く　伊賀上寿賀子　伊予市
掌の中に雪あたゝめて人ゆるす　近藤紀子　松山市
返り花狂気と正気近すぎる　白石司子　伯方町

○高石幸平　選

見得を切る菊人形に見据えられ　井上由美子　松山市
伝言をハートで結び駅小春　髙松千栄子　松山市
夜神楽のをみな面とはほほえまし　土居桂子　松山市

○対馬康子　選

門をかけて凩殺到す　近藤富美子　松山市
殻やがて重い日が来るかたつむり　菊川壽賀子　松山市
冬銀河真っ直ぐに置く机かな　田村七重　松山市

※特選句は、開催当日の夕刻に開催されたレセプション席上で選者より発表されました。

入選句

○相原左義長　選

縄跳びの輪を秋風とくぐり抜く　伊賀上寿賀子　伊予市（*）
合掌の指先までも夕焼けて　大西幸子　松山市
銀杏黄葉天守閣より龍馬来る　加藤公子　松山市
わが十指までは撃てまい枯蟷螂　白石司子　伯方町
脳輪切りキューイフルーツならよかろう　高田ヨネ子　松山市
余生なお燃ゆる欲あり秋茜　中島百合子　松山市
古タイヤかすかに湿り鳥渡る　藤田ユリ子　松山市
鳥渡るカントリエレベーターの背後　光宗柚木子　松山市
柿を剥く妻の指先母を越え　宮田頼行　松山市
綿虫や八方美人の面を取る　村上洋子　松山市

○上原白水　選

枯葉降るふりかへりても枯葉ふる　井ノ口カズ子　松山市
母に抱くライバル心やクリスマス　大財美紀　重信町

限りある命を生きて鰯雲　菊川壽賀子　松山市
大根引く地球の髭を抜くように　佐藤トラエ　松山市
生と死の一字の重さ赤まんま　塚本幸子　松山市
靴重き日なりゆらりと黒揚羽　常国淑子　松山市
余生なお燃ゆる欲あり秋茜　中島百合子　松山市（*）
品書に落鮎ですと女文字　西山たかし　松山市

○髙石幸平　選

縄跳びの輪を秋風とくぐり抜く　伊賀上寿賀子　伊予市（*）
城山の影に入りたる大根引　泉のぶ子　松山市
日矢射せる医学部までの草紅葉　金並れい子　松山市
紅葉燃ゆ渓流おどりつ、土佐へ　河本カヲル　松山市
歳晩やオレンジ色の港の灯　竹田香代　松山市
手袋を外せし指の自由かな　丹下綾子　松山市
冬空に襟を正して記帳せり　明神芳園　松山市
断崖を噛む走り根や櫨紅葉　山本千代香　松山市

○対馬康子　選

冬の風ひゅうひゅうなってにぎやかだ　井上智之　川内町
母に抱くライバル心やクリスマス　大財美紀　重信町（*）
集会に声から入る秋の暮　佐藤トラエ　松山市
役終へし案山子を乗せて乳母車　白石千古　松山市
鬼の出る民話の多し紅葉山　本郷和子　松山市
ぽつちやんの下駄の歯減りし十二月　八木　淑　清水市

（*）再掲句

南予吟行

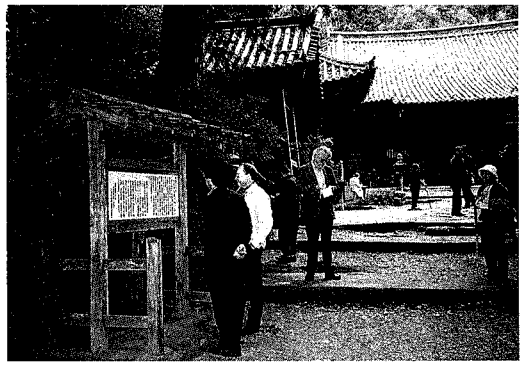
冬の一日を、内子・大洲にて過ごしました。帰りのバスの中で、選者である村上護さんから選句の発表がされると、大いに盛り上がりました。

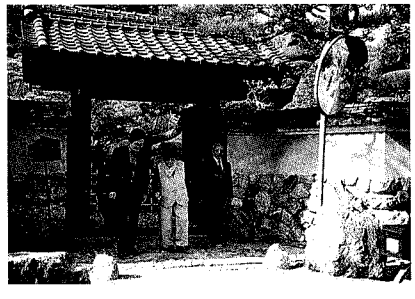
とき：平成14年12月3日
ところ：愛媛県内子町及び大洲市

行程：

集合
10：00～　愛媛県県民文化会館　出発
―（バス）
11：00　内子町（町並み保存地区）　到着
《見学、散策》
12：40　昼食（フレッシュパーク　からり）
―
13：30　大洲着（如法寺）
―
14：00　《見学、散策》如法寺　冨士山
15：30　大洲発
バス内にて、選者より特選・入選句を発表
解散
17：00　市駅前　経由　愛媛県県民文化会館

投句：一人二句まで
選者：村上　護（作家）





特選句

藍甕に藍の匂ひや返り花　井上由美子　松山市

白壁に染まりて白猫のままで居る　城戸朱理　伊勢原市

ねはん仏み足さすれば陽のぬくみ　Lidia Rozmus　アメリカ

原句：lying Buddha
his feet warm from the sun
when I scratch them

翻訳：田村七重　松山市

入選句

禅の道たぐり求めて冬紅葉　池田正二　松山市

芳莪邸の櫨の枯木を撫でにけり　宇都宮靖子　松山市

ハゼの実を活けて和蝋の六代目　太田万壽子　横浜市

外国の人と古刹に落葉踏む　角原幹規　松山市

風狂に執し冬木に執しゐる　垂水秀夫　松山市

掌に遊ぶ日の斑一所の紅葉　常国淑子　松山市

蝋泥にまみるる技の手冬一日　乃万美奈子　松山市

白壁の町並抱き山眠る　松田まさ代　松山市

冬陽さす土蔵の光りなまこ壁　明神芳園　松山市

レセプション

「子規」を食む

正岡子規が食したものを、『仰臥漫録』を資料にできるだけ再現（食材やメニュー）し、参加者の皆さんが、子規の旺盛な食欲と好奇心の強さ、そして子規の生活そのものを肌で感じ取ることを目指しました。なお、今回の再現に際しては、「松山市食生活改善推進協議会」の皆様のご協力・ご指導をいただきました。

と　き：平成14年12月1日　午後5時～6時40分
ところ：愛媛県県民文化会館　真珠の間

メイン料理

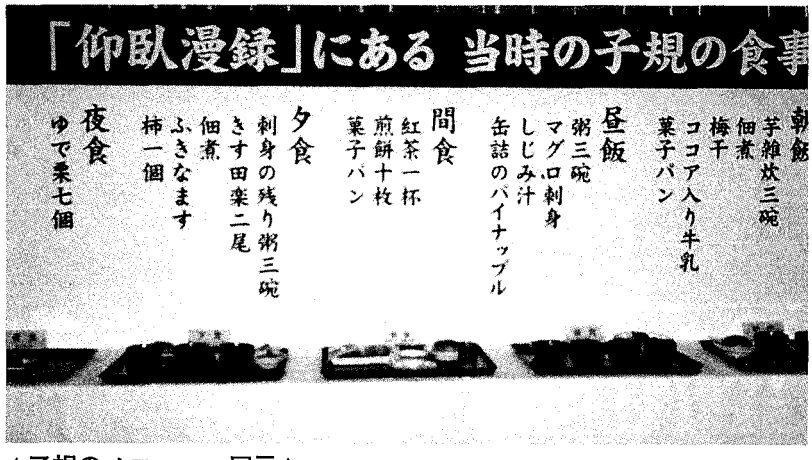
刺身盛り合わせ（鯛、ひらめ、シマアジ、フッコ、カンパチ　生姜千切り）
寿司（さかさ稲荷、まつやま揚巻、鯛巻き）、丸盆寿司、松山酢ばら寿司
酢もの（鯵なます、ままかり、とらはぜの酢漬け）
焼き物（とらはぜ、きす、さわら、うなぎ、焼いわし）
鯛麺（鯛麺だし汁、ソーメン出し汁）
つみれ汁
油もの（せんざんき）
枝豆
福麺
つくだ煮（はまぐり、はぜ、あみえび）
漬物（ひの蕪、大根、なす、うり、梅干、西瓜　各奈良漬と醤油漬）
焼き鳥、焼いも、鶏肉たたき
宝楽焼き
煮物（なす、じゃがいも、かつお）
きらず

若鶏のワイン煮込み〈洋食〉
焼き鴨（キャベツ、ポテト）〈洋食〉
甘味（おはぎ、羊羹、りんまん、ココアムース、抹茶ムース、醤油もち）
フルーツ（パイナップル、バナナ、ブドウ、ナシ）

◆**飯類**
ぞうすい
栗ご飯
いも粥
小豆飯

◆**屋台**
五色ソーメン
じゃこてん
たこ飯
鯛飯
さつま汁

◆**各人盛り**
親いもの煮物
南京
さつまいも煮
くるみ



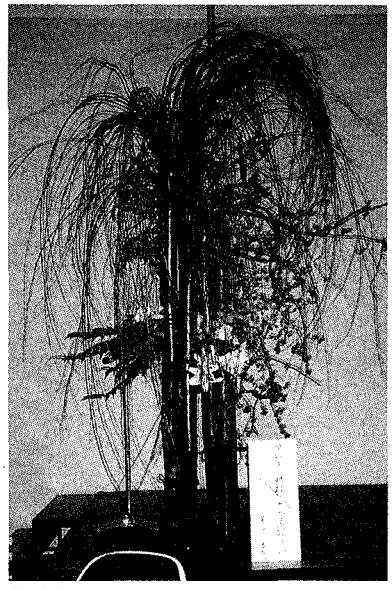
〈子規のメニュー　展示〉

生け花と俳句のコラボレーション

国際俳句賞、えひめ俳句賞受賞者の俳句と生け花のコラボレーション作品をレセプション会場に展示しました。山下香友（草月流師範　NHK文化センター講師）さんに出品いただきました。

たかの巣に眼球一つおいてこい

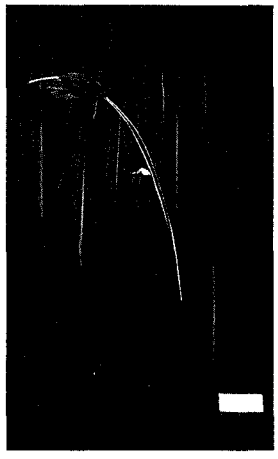
夏石番矢



■いけばなコメント
世界中を見渡せる鷹の巣には物事を斜す眼球が必要かもしれぬ。私は別のもう一つの眼球にも興味があり未だ鷹の巣に登っていない。

この星にまた新しき年起る

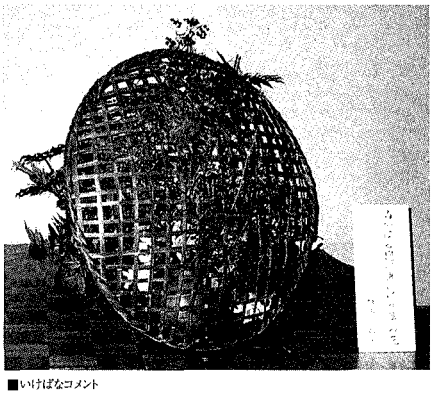
長谷川櫂



■いけばなコメント
地球には無限の生命が育っている。それらは口を有し戦う本能があるだろう。私は地球の幸せを祈り紅い唇を宇宙に泳がす。ハッピーソングを歌うために。

品かはる恋に老いけり草の花

加藤郁乎



■いけばなコメント
恋にいのちを炎やす人はまぶしい。私は一枚の大笠を透して垣間見るだけ。

lingering snow
the game of catch continues
into evening

Cor van den Heuvel

■いけばなコメント
キャッチボールを楽しむひととき、暮れてゆくなか、ふと気がつくと名残の雪が舞っていた。私はその片をこのボールに飾りたい。

正岡子規 英語俳句展

子規の俳句の英語訳を俳画とともにパネル展示しました。

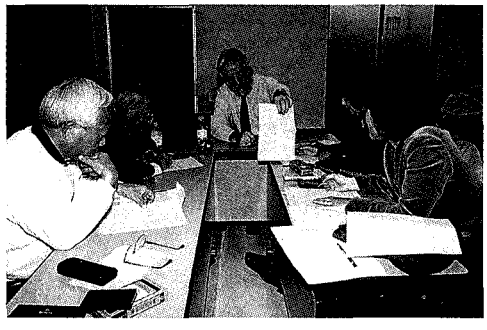
と　き：平成14年12月1日　午後
ところ：愛媛県県民文化会館　サブホール

俳画出展：Lidia Rozmus（画家、アメリカ）
夢来　怜子（画家）
松本　秀一（銅版画家）
選　句：西村我尼吾（正岡子規国際俳句賞選考等委員会参与）
翻　訳：Lee Gurga（「Modern Haiku」編集長）
宮下恵美子（「天為」同人）
田村七重（「圭の会」会員）

俳句ワークショップ「英語で俳句」

公募によって参加した皆さんが、英語で俳句を作ることに挑戦しました。
正岡子規国際俳句賞受賞者や選考委員の皆さんが、丁寧に指導して下さいました。

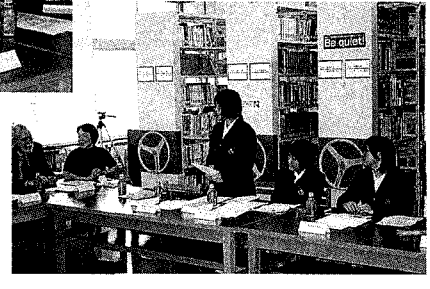
とき：平成14年11月30日　11時～15時30分
ところ：愛媛県国際交流センター、道後周辺吟行



高校生との俳句交流

正岡子規国際俳句賞や21世紀えひめ俳句賞の受賞者、選考委員の皆さんが、「俳句甲子園」をはじめ各種の俳句大会で顕著な成績を修めている伯方高校を訪問しました。
同校の図書室で開催された会では、受賞者等と高校生が相互に自作の句を紹介しました。

とき：平成14年12月2日（月）　13時～15時30分
ところ：愛媛県立伯方高校



平成14年度
国際俳句フェスティバルの概要

1　芝不器男・俳句新人賞公開審査会

日程：平成14年11月30日（土）13：00～16：20

場所：愛媛県県民文化会館　第6会議室

2　俳句シンポジウム・授賞式

日程：平成14年12月1日（日）13：30～16：30

場所：愛媛県県民文化会館　サブホール

○主催者あいさつ

愛媛県文化振興財団理事長　桝田三郎

愛媛県知事　加戸守行

○授賞式

正岡子規国際俳句賞及び21世紀えひめ俳句賞

○記念講演

コール　バン　デン　フーベル　（英　語）

サトヤ　ブシャン　ワルマ　（日本語）

○シンポジウム（トークセッション）

タイトル：「俳句を訊く」

モデレーター：村上護（作家）

パネリスト：Haruo Shirane（コロンビア大学教授）

夏石　番矢（俳人、明治大学教授）

加藤　郁乎（俳人）

長谷川　櫂（俳人）

3　レセプション―「子規」を食む―

日程：平成14年12月1日（日）17：00～18：30
場所：愛媛県県民文化会館　真珠の間
○会費制　8000円・人
○形　態　センター　ビュッフェスタイル
○内　容　正岡子規の食を「仰臥漫録」を基に再現し、子規の生活を実感する。

4　関連プログラム

（1）正岡子規・英語俳句展、生け花と俳句のコラボレーション展
子規俳句の英語訳を俳画とともにパネル展示、また俳句と生け花のコラボレーション作品等を展示する。
日程：平成14年12月1日（日）午後
会場：県民文化会館　サブホール＝英語俳句展
　　同　　真珠の間（レセプション会場）＝俳句と花のコラボレーション展

（2）当日句会の開催
授賞式・シンポジウムに出席する人を対象に当日句会を開催する。
○投句　当季雑詠二句まで（必ず未発表作品のこと）
　会場で配布する所定用紙に句及び所定事項を記載のうえ、サブホール内に設置する投句箱まで
○締切　シンポジウム開催当日―13：30
○選者　相原左義長、上原白水、髙石幸平、対馬康子
○発表　特選句はレセプションで発表（記念品を贈呈）

（3）俳句ワークショップ・カンファレンス
幅広い視点から俳句を考え、実作するワークショップ及びカンファレンスを開催する。
日程：平成14年11月30日（土）
○第一会場（英　語）「英語で俳句」
　場　所：愛媛県国際交流センター　時間：11：00～15：30
　出席者：Cor van den Heuvel（コール バン デン フーベル）
　　David Burleigh（デビット バーレイ）
　　William J. Higginson（ウイリアム ヒギンソン）

Sataya Bushan Verma（サトヤ ブシャン ワルマ）
Willy Vande=Walle（ウイリ バンデ＝ワラ）　ほか

○第二会場（日本語）「欧米おける俳句」　【公開座談会】
場　所：県民文化会館　時間：16：30～18：20
出席者：川本皓嗣
Lars Vargo（ラーシュ ヴァリエー）
Willy Vande=Walle（ウイリ バンデ＝ワラ）
Haruo Shirane　（ハルオ シラネ）

（4）高校生との俳句交流
受賞者が県内高校を訪問し、俳句クラブ等の生徒と懇談、交流する。
日程：平成14年12月2日（月）13：30～15：30
場所：愛媛県立伯方高校

（5）南予吟行
受賞者・選考委員と一般俳句愛好者が、大洲、内子を訪ねる吟行を開催する。
日程：平成14年12月3日（火）10：00～17：00
場所：内子（街並み保存地区）、大洲（如法寺、冨士山）等
参加者：約30名（一般公募）　バス
選者：村上　護（作家）

International Haiku Convention 2002

宝くじは
豊かさ築く
チカラ持ち。

協賛 日本万国博覧会記念協会